発掘調査報告第18集

駒ヶ根東部土地改良区東部地区県営ほ場整備事業(昭和59年度分)埋蔵文化財緊急発掘調査

青木城遺跡

1985

南信土地改良事務所
駒ヶ根市教育委員会

発掘調査報告第18集

駒ヶ根東部土地改良区東部地区県営ほ場整備事業(昭和59年度分)埋蔵文化財緊急発掘調査

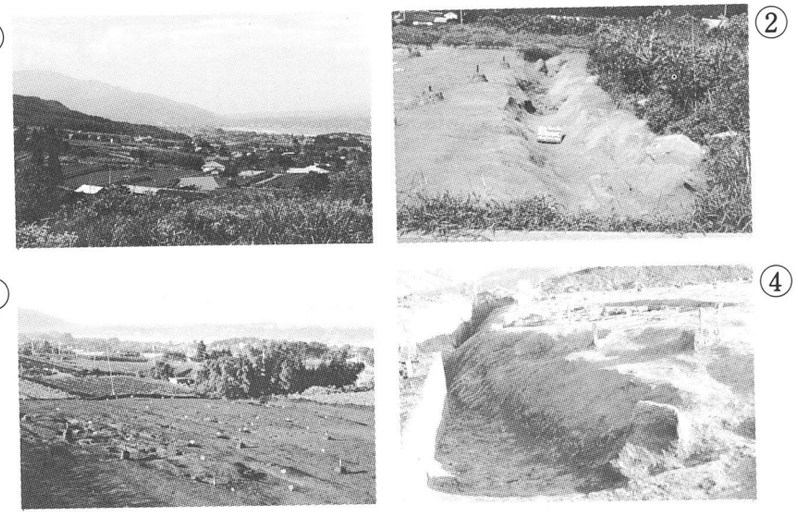
青木城遺跡

1985

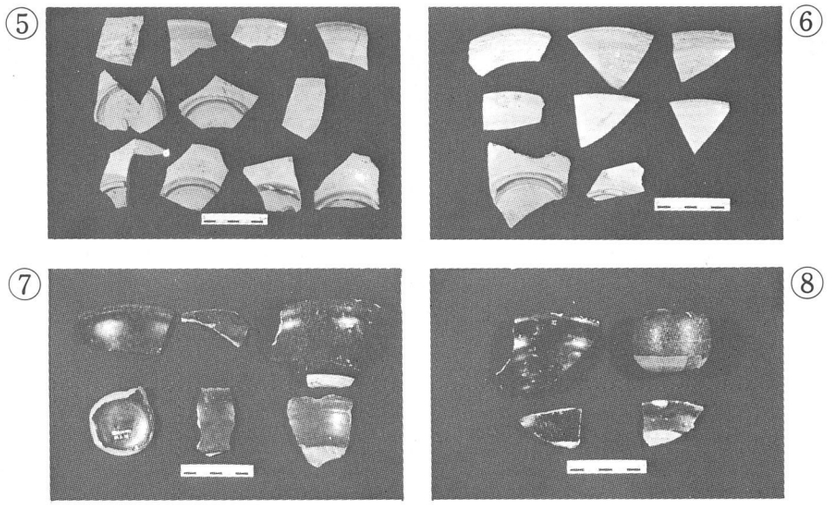
南信土地改良事務所
駒ヶ根市教育委員会

青木城遺跡

I



①青木城遺跡全景（北東より）
②青木城遺跡Ｂ地区縦堀（東より）
③調査Ｄ地区遺構全景（北東より）
④Ｄ地区横堀（南より）



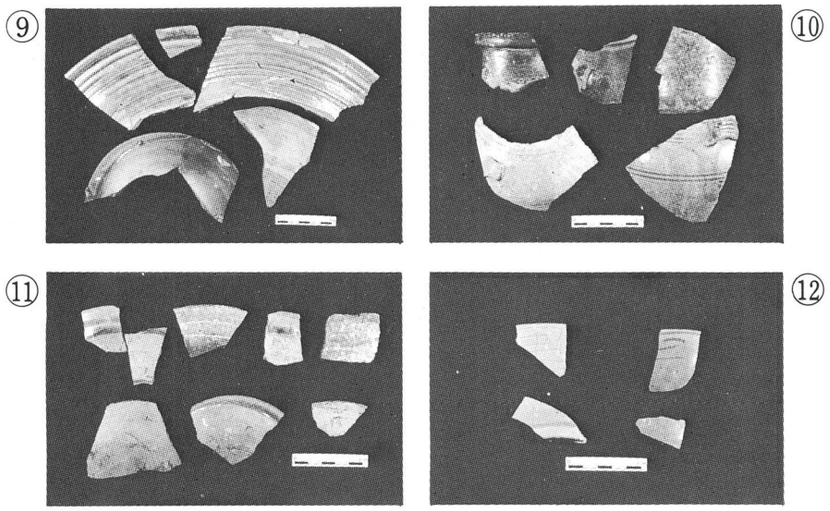
⑤灰釉碗・皿（10C～11C）
⑥　〃　（10C～11C）
⑦天目茶碗（15C）
⑧天目茶碗・茶入・稜皿（16C）

0
5cm

0
5cm

0
5cm

0
5cm



⑨古瀬戸灰釉〈折縁深皿、卸皿〉（15Ｃ）
⑩　〃　〈壺・四耳壺〉（15Ｃ）
⑪　〃　〈碗・皿・縁釉小皿〉（15Ｃ）
⑫青磁器（13～14Ｃ）

0
5cm

0
5cm

0
5cm

0
5cm

序　　文

今回ここに刊行の運びとなりました報告書は、駒ヶ根東部地区県営ほ場整備事業に伴い、昭和59年度に実施されました青木城遺跡緊急発掘調査の報告であります。

昭和58年度には当遺跡に隣接する青木遺跡が調査され、中世期に属する住居跡、堀、礎石、柱穴群等が検出され、天目茶碗、古瀬戸灰釉陶器、青磁などの遺物が出土しております。

本年度は、この青木遺跡から青木城（館址）へと向う、いわば本拠地を解明する調査として期待されていました。幸いにも、文化庁及び長野県教育委員会の御指導と御高配、更に南信土地改良事務所の御協力を得て、調査計画を行い、駒ヶ根市文化財審議会会長友野良一氏を団長とする青木城遺跡発掘調査団を編成し、発掘調査を実施することができました。

調査の結果、東の山麓から台地先端部（青木城）へと続く2条の縦堀、戦国時代の住居跡、土壙、竪穴遺構、柱穴址群などが検出され、遺物では昨年度検出を見なかった16世紀初～半ばにかけて位置する天目茶碗、灰釉陶器が発見されました。これらの資料は、古文書や高山神社棟札などに残されている、「戦国時代末の天正年間に青木城（館址）に牛山道賢が居館を構えた」という伝承を解明する貴重な資料となります。

また、縄文時代中期後半の住居跡、これに伴う遺物や奈良・平安時代の生活跡（焼土集中箇所）、これに伴う土師器・灰釉陶器が発見されたことは、当遺跡の時代的経過や性格を把握する上でも大切な基礎資料であり、数多くの成果が得られました。

長い期間にわたり、発掘調査をご指導下さった友野団長を初め、快く発掘作業に参加していただいた東伊那地区の方々、事業に深いご理解をいただいた南信土地改良事務所並びに東部土地改良区の方々、地主の方々、多くの皆さまのご協力、厚意によりまして所期の目的を達成することができました。

ここに関係者の皆様方に心から感謝申し上げますとともに、この報告書が多くの方々に利用され、地域の歴史研究の一助となることを念願する次第であります。

昭和60年3月20日

駒ヶ根市教育長　木下　衛

例　　言

1．今回の調査は、昭和59年度に実施された駒ヶ根東部土地改良区東部地区県営ほ場整備事業に先立つもので、昭和59年７月５日から８月18日にかけて調査したものである。

2．発掘調査は、南信土地改良事務所の委託により、国県補助金を得て、駒ヶ根市教育委員会が中心となり、駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会を組織して行った。

3．発掘調査の中で、遺構・遺物の実測は、小原晃一、北村英憲、北沢武志、桐山清一が担当し写真撮影は小原が担当した。

4．遺物整理・報告書作成の中で、土器洗いは小町谷春子、注記は宮沢美智子が担当した。遺物の復元は小原、拓本は宮沢美智子、遺物の実測は小池幸夫が担当し、遺物及び遺構図のトレースは宮沢、図の作成は小原、小池が担当した。写真撮影は小原が行った。

5．本報告書の執筆は、小原が行った。

6．本書は、調査によって明らかとなった遺構及び遺物をより多く図・表示することに重点をおき、文章記述は簡便にした。

7．遺構・遺物関係の図面の縮尺は、その都度明示してある。

8．遺物の表示については、その都度明示してある。

9．遺構の断面層位は、次のとおりである。

Ⅰ層―褐色土〈表土〉	Ⅴ層―黒色土（木炭粒含）
Ⅰ′層―　〃　〈耕作土〉（ローム粒含）	Ⅵ層―ローム層（砂質）
Ⅱ層―暗褐色土〈　〃　〉	Ⅵ′層―ローム層漸移層
Ⅱ′層―　〃　〈　〃　〉（ローム粒含）	Ⅶ層―Ⅲ層＋砂混土
Ⅲ層―暗茶褐色土（木炭粒含）	Ⅶ′層―Ⅲ層＋砂・礫混土
Ⅲ′層　〃　（木炭粒・ローム粒含）	Ⅷ層―焼土・木炭
Ⅳ層―黒褐色土（木炭粒含）	Ⅷ′層―焼土・木炭＋Ⅴ層混土
Ⅳ′層―　〃　（木炭粒・ローム粒含）	

10．当遺跡の出土遺物及び諸記録・図面は、市立駒ヶ根博物館が保管している。

目　　次

序　　文
例　　言
目　　次
第Ⅰ章　発掘調査の経過…… 1
　第１節　発掘調査に至るまでの経過…… 1
　第２節　調査会の組織…… 1
　第３節　発掘作業経過（発掘作業日誌）…… 2
第Ⅱ章　遺跡の環境…… 6
　第１節　地理的及び歴史的環境…… 6
第Ⅲ章　発掘調査…… 13
　第１節　調査概要…… 13
　第２節　調査Ａ地区遺構と遺物…… 13
　第３節　調査Ｂ地区遺構と遺物…… 23
　第４節　調査Ｃ地区遺構と遺物…… 28
第Ⅳ章　まとめ…… 35

挿　図　目　次

第１図　青木城遺跡位置図…… 7
第２図　青木城遺跡及び周辺遺跡分布図…… 8
第３図　青木城遺跡調査Ａ～Ｄ地区位置図及びグリット図…… 9
第４図　青木城遺跡調査Ａ地区遺構全体図……10
第５図　青木城遺跡Ａ地区縦堀実測図……11・12
第６図　青木城遺跡Ａ地区縦堀出土遺物実測図……16
第７図　青木城遺跡Ａ地区横堀、土壙２号、柱穴址群実測図……17・18
第８図　青木城遺跡Ａ地区土壙１号、柱列址１号実測図……19・20
第９図　青木城遺跡Ａ地区土壙１・２号実測図……22
第10図　青木城遺跡Ａ地区縦堀及び柱穴址群周辺出土遺物実測図……22
第11図　青木城遺跡Ａ地区柱穴址群周辺出土遺物実測図…… 22
第12図　青木城遺跡調査Ｂ地区遺構全体図…… 23

第13図　青木城遺跡Ｂ地区縦堀及び遺構外出土遺物実測図……24
第14図　青木城遺跡Ｂ地区縦堀実測図……25・26
第15図　青木城遺跡調査Ｃ地区遺構全体図……27
第16図　青木城遺跡Ｃ地区遺構実測図及び遺物分布図……29・30
第17図　青木城遺跡Ｃ地区土層断面図……31
第18図　青木城遺跡Ｃ地区焼土集中箇所出土遺物実測図……32
第19図　青木城遺跡Ｃ地区焼土集中箇所遺物分布図……32
第20図　青木城遺跡Ｃ地区遺構外出土遺物実測図……33
第21図　青木城遺跡Ｂ・Ｃ地区遺構外出土遺物実測図……34

図　版　目　次

図版１　青木城遺跡景
図版２　調査Ａ地区グリット掘り下げ状態、調査風景、縦堀ベルト設定状態、縦堀・横堀、柱穴址・柱列址、土壙１号断面、土壙２号断面
図版３　縦堀掘り下げ状態、縦堀S—NI～Ⅳベルト断面、縦堀内耳土器出土状態、出土内耳土器(口縁部)、出土内耳土器(底部)
図版４　縦堀出土陶器、柱穴址１号周辺出土きせる雁首、出土石器
図版５　調査Ｂ地区グリット掘り下げ風景、調査風景、縦堀掘り下げ風景、縦堀Ｓ—ＮⅠ～Ⅲベルト断面、調査Ｂ地区調査終了状態、ローム層下掘り下げグリット
図版６　調査Ｂ地区縦堀出土灰釉陶器、出土青磁・鉄釉陶器、出土須恵器
図版７　調査Ｃ地区全景、グリット掘り下げ状態、Ｅ～Ｇグリット遺物出土状態、Ａ・Ｂグリット遺物出土状態、Ｑ～Ｓグリット遺物出土状態、Ｍ～Ｏグリット遺物出土状態、焼土集中箇所
図版８　焼土集中箇所遺物出土状態、礫検出状態、出土土師器、出土灰釉陶器、Ｃ地区遺構外出土須恵器、Ｃ地区遺構外出土土師器、Ｃ地区遺構外出土縄文・弥生土器

出土遺物一覧表

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第1節　発掘調査に至るまでの経過

昭和58年度に実施した青木遺跡の発掘調査に続いて、昭和59年度駒ヶ根市東部土地改良区東部地区県営ほ場整備事業施工区域内に、青木城遺跡があり、破壊される状況が顕著となったため、昭和58年9月6日に、長野県教育委員会文化課小林主事、南信土地改良事務所岩崎主任、同丸山主任、駒ヶ根市農林課倉田、市教育委員会北沢、下村、小原出席のもとに事前協議を行った結果、記録保存を行うということになった。

以後、南信土地改良事務所、県教育委員会等と連絡をとる中で、調査面積1,000㎡以上、調査費用500万円で、駒ヶ根市が事業主体として発掘調査を行うという経過をもった。調査費用の内訳は、南信土地改良事務所分362.5万円、国県補助事業分137.5万円（国庫補助金68.7万円、県費補助金20.6万円、駒ヶ根市負担分48.2万円）である。

事務手続きは、昭和59年1月6日付昭和59年度文化財関係補助事業計画書提出、同年4月10日付昭和59年度文化財関係国庫補助事業の内定（通知）、同年4月10日付県費補助金の内示（通知）、同年5月15日付昭和59年度文化財関係国庫補助事業申請書提出、同年5月30日付発掘調査届、同年5月22日付県費補助金交付申請書提出を経て、同年6月14日に、南信土地改良事務所長関島喜徳郎と駒ヶ根市長竹村健一との間に、「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を取りかわし、つづいて7月5日に、市長と駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会長木下衛との間で、再委託契約書を締結した。

調査は、駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が行うこととし、青木城遺跡発掘調査団を編成し、団長には友野良一氏をお願いして、昭和59年7月5日から調査を開始した。

第2節　調査会の組織(駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会)

顧　問	鈴木義昭	（駒ヶ根市教育委員長）
会　長	木下　衛	（市教育長）
理　事	小池金義	（市教育次長）〈会長職務代理〉
〃	友野良一	（駒ヶ根市文化財審議会会長）
〃	松村義也	（　〃　副会長）
〃	林　赳	（　〃　委員）
〃	竹村　進	（　〃　委員）

理　事　中山敬及（　〃　委員）
〃　下村幸雄（市立駒ヶ根博物館長）
監　事　北原名田造（駒ヶ根郷土研究会会長）
〃　宮下恒男（市収入役）
幹　事　北沢吉三（市教育委員会社会教育係長）
〃　原　茂（　〃　社会教育係）
〃　野々村はるゑ（市立駒ヶ根博物館）
〃　斎藤香代（　〃　）
〃　小原晃一（　〃　）

・青木城遺跡発掘調査団（事務所　駒ヶ根市上穂南２番15号　市立駒ヶ根博物館内）
団　長　友野良一（日本考古学協会会員）〈発掘担当者〉
調査員　小原晃一（長野県考古学会会員）〈　〃　〉
〃　小町谷元（上伊那考古学会会員）

作業員　中村文夫、白川仁重、小林正信、宮下三郎、渋谷吉子、小林満寿子、細田律恵、佐藤秋子、佐藤慶子、赤羽笑子、渋谷光子、下平チカエ、下島清一、北沢武志、川上敏明、北村英憲、桐山清一、小町谷春子、宮沢美智子

指導者　小林孚（長野県教育委員会文化課指導主事）
〃　伝田和良（　〃　〃　）
〃　樋口昇一（長野県史刊行会専門主事）
〃　桐原健（　〃　〃　）
〃　宮下健司（　〃　〃　）
〃　林茂樹（日本考古学協会会員）
〃　気賀沢進（　〃　）

協力者　田中清文、小松原義人、羽柴利明、三沢好一　〈順不同、敬称略〉

第３節　発掘作業経過

・発掘作業日誌
７月５日　発掘器材の搬入。調査Ａ地区南東隅を基点として、北方向、西方向へ５ｍ×５ｍのグリットを設定する。基点から北へＡ～Ｅ、西へ並列してＦ～Ｊ、さらにＹ～Ｇまで設定する。

7月10日　器材整理・移動。テント設営。友野団長より、当遺跡の概略説明を受ける。A～Cグリットを掘り下げる。調査区周辺より青磁（日本製）、鉄釉盞ともに18C以降を表面採集する。

7月11日　A～D・F・G・K－グリット掘り下げ。A・B・F－グリット終了。A－Gより砥石、D－Gより天目破片、F－Gより擂鉢片出土。表土は20～30cmと浅く、ローム層が基盤をなし、桑畑である為攪乱されている。地形測量S＝$\frac{1}{200}$で行う。写真撮影。

7月12日　A～D・F・G・K－グリット掘り下げ終了。H・L・P・U－グリット中途。K－グリットより黒曜石剝片、縄文前期土器片、陶器出土。調査B地区5m×5mのグリット設定。A地区は、西へかけて表土及び暗褐色土が55～60cmと厚くなり、さらに基盤は、北東から南西にかけて低く傾斜している。

7月13日　H・L・P－グッリット（G）掘り下げ終了。I・M・Q・V－G中途。写真撮影。M－Gより縄文中期土器片、陶器片及び集石検出。P－Gより磨り石、盤状石出土。G・H・K－Gに直径40cm位の落ち込みあり。P－G周辺より縄文前期の土器片多数出土。

7月14日　I・M－G掘り下げ終了。J・N・Q・V－G掘り下げ。A－G断面仮清掃。V－G黒褐色土層より打石斧頭部出土。P・U－Gには柱穴状の落ち込み多数検出。

7月16日　I・N・Q・U・O－G掘り下げ終了。J・R・T・V－G中途。B～D・F－G断面仮清掃。E－Gから西にかけて、幅1.2m位の溝状遺構（縦堀）あり。内耳土器出土。

7月17日　E・S・T・R・V－G掘り下げ終了。W～Y－G中途。V－Gより礫群検出。

7月18日　W～Y－G掘り下げ終了。V～X－Gにかけて溝状遺構（横堀）あり。A～Y－Gのベルト断面清掃。A地区全体写真撮影。H－G内にBM・L＝706.000mを設定。調査B地区、B・C・F・I－G掘り下げ開始。C・F－Gより大礫検出。

7月19日　調査A地区E・X・Y－G仮清掃。D・G～I・K・L・N－G断面清掃。写真撮影。調査B地区A～C、F・I・L－G掘り下げ終了。E・O・R－G中途。I・R－GII層（暗褐色土）より灰釉、L－Gより内耳土器、須恵器、黒曜石剝片出土。

7月20日　A地区E・J・O・P・S～UG断面清掃。写真撮影。B地区O・R－G掘り下げ終了。D・F・N・P・Q－G中途。C～R－Gにかけて溝状遺構（縦堀）あり。出土遺物は少ない。

7月21日　A地区Q・V～Y－G断面清掃。写真撮影。B地区N・P－G掘り下げ終了。D・H・K－G掘り下げ中途。N－Gより灰釉出土。

7月23日　A地区S－NI（F～J－G）セクション、S－NII（K～O－G）セクション、W－EI（A～U－G）セクション実測。B地区D・H・K－G掘り下げ終了。G・J・M－G中途。M－Gより打製石斧出土。Q－Gより内耳土器。剝片石器出土。

7月24日　A地区W－EII（B～V－G）、W－EIII（C～W－G）、S－NIII（P～T－G）S－NIV（U～Y－G）セクション実測。W－EI・IIベルトはずし。S－NI～IVベルトはずし開始。B地区G・J・M－G掘り下げ終了。全グッリット内と断面清掃。

7月25日　A地区W－EIV（D～X－G）ベルトセクション実測。W－EIII・IVベルト、S－NI～IVベルトはずし。南側半分清掃。ピット（柱穴址）判別。写真撮影。B地区S－NI（D～F－G）ベルト清掃。写真撮影。W－EI（A～P－G）、W－EII（B～Q－G）ベルト清掃。写真撮影。調査C地区に、5m×5mのグッリット設定。ベルト設定。

7月26日　A地区北半分清掃。縦堀南側より土壙検出。柱穴址群掘り下げ。縦堀ベルト設定。B地区E・F・I－Gベルト断面清掃。写真撮影。

7月27日　A地区柱穴址群掘り下げ終了。縦堀I区（E）～V区（Y）掘り下げ開始。I～III区より内耳土器片多数出土。柱穴址群周辺より土壙検出。横堀ベルト設定。

7月28日　A地区縦堀・横堀掘り下げ。縦堀は深さ50～60cmを測り、横堀は25cm前後と浅く西側はゆるやかである。B地区B・MをL＝701.000mに設定。S－NI・II、W－EI・IIベルトセクション実測。C地区A・B・F・G－G掘り下げ開始。

7月30日　B地区W－EI・IIベルトセクション、S－NIVベルトセクション清掃、写真撮影、実測。C地区A・E・F－G掘り下げ。A－Gより鉄釉陶器、E－Gより内耳土器出土。A～E－Gのかけて、表土から遺物包含層（黒褐色土）までの深さが60～75cmと深く、ロームまではさらに15～20cmある。A・E－Gともに大礫（自然）が露出。

7月31日　A地区縦堀全景及び出土遺物写真撮影。ベルト清掃。好天続きの為、水打ち。縦堀内礫・出土遺物平板測量。B地区S－NVベルトセクション実測。C地区A・E－G掘り下げ終了。B・F－G掘り下げ中途。

8月1日　A地区縦堀I～IV区ベルトセクション清掃、写真撮影、実測。I・II区内礫・出土遺物平板測量、ベルト実測、取り上げ。C地区F・K－G掘り下げ終了。B・J・O－G中途。B－Gより黒色土師器多数出土、E・F－Gからも土師器片出土。K－Gより灰釉皿底部出土。

8月2日　A地区縦堀I・II区礫レベル実測。III・IV区礫、遺物平板測量。ピット2ケ所掘り下げ。C地区O－G掘り下げ終了。土師・灰釉出土。B・G・J－G掘り下げ中途。B－G中央部より焼土集中箇所検出。J－Gより土師・灰釉出土。

8月3日　A地区縦堀III・IV区礫・遺物平板測量。横堀IV区礫・遺物平板測量。取り上げ。B地区S－NI～IV、W－EI・IIベルトはずし。C地区J－G掘り下げ終了。B・G・I・N－G掘り下げ中途。G－G内北側隅より焼土検出。N・G－Gより土師、灰釉出土。

8月4日　A地区縦堀V区礫・遺物平板測量、レベル実測、取り上げ。横堀IV区礫・遺物平板測量、レベル実測。土壙1・2号半分掘り下げ。昨夜の雨の為、埋ってしまった柱穴址群再度掘り下げ。B地区S－NVベルト、W－EI・IIベルトはずし。B地区全面清掃、写真撮影。縦堀I～VI区までベルト設定。I・II区掘り下げ開始。旧D－G内にローム層下掘り下げG設定。

8月6日　A地区縦堀I～V区礫排除、底部分まで掘り下げ。横堀I～IV区礫排除、掘り下げ。縦堀・横堀ともに掘り下げ終了。柱穴址群及び周辺出土遺物平板測量、レベル実測。B地区縦堀I～III区に掘り下げ中途。ローム層下調査グリット掘り下げ。

8月7日　A地区柱穴址群及び遺物平板測量、レベル実測。横堀平板測量、レベル実測。B地区縦堀Ⅰ～Ⅵ区掘り下げ。ローム層下調査グリット掘り下げ終了。北壁で70cm、南壁で35cm掘り下げた面で自然の礫が露出し、出土遺物はない。縦堀Ⅳ・Ⅴ区礫・暗茶褐色混土層より灰釉多数出土。

8月8日　A地区縦堀Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区底部礫・遺物平板測量終了。Ⅳ区中途。柱穴址群及び周辺出土遺物平板測量、レベル実測。土壙1・2号断面実測。横堀Ⅳ区礫・遺構レベル実測。B地区縦堀Ⅰ～Ⅵ区掘り下げ。ベルト清掃。C地区G－G掘り下げ。

8月9日　A地区縦堀Ⅳ・Ⅴ区礫及び遺物平板測量、レベル実測終了。Ⅰ～Ⅴ区遺物取り上げ。柱穴址群遺物平板測量、レベル実測、取り上げ。B地区縦堀Ⅰ区礫平板測量。C地区B・S－G掘り下げ終了。Ⅰ・N－G掘り下げ中途。S－Gは東側のグリットに比べ浅くなっている。

8月10日　A地区柱穴址群、集石、遺物平板測量、レベル実測。B地区縦堀Ⅰ～Ⅴ区出土遺物平板測量。C地区S－NⅠ（Ⅰ～K－G）、S－NⅡ（Q～S－G）ベルト断面清掃。B・G・I・M・Q・R－G掘り下げ。R－Gより石剣胴部出土。写真撮影。

8月11日　B地区S－NⅠ（C－G）、S－NⅡ（Ⅰ－G）、S－NⅢ（O－G）ベルト断面清掃、写真撮影。縦堀Ⅴ・Ⅵ区礫及び遺物平板測量。C地区M・Q・R－G掘り下げ終了。

8月12日　B地区縦堀Ⅰ～Ⅳ区礫・出土遺物レベル実測。S－NⅠ～Ⅲベルト断面実測。礫・遺物取り上げ。ベルトはずし。C地区グリット内全面仮清掃。W－EⅠ（A～Q－G）、W－EⅡ（B～R－G）ベルト断面清掃。

8月13日　B地区縦堀Ⅰ～Ⅲ区清掃。遺構外出土遺物平板測量、レベル実測、取り上げ。C地区A・B－G内遺物、礫、焼土集中箇所平板測量。S－NⅠ・Ⅱベルト、W－EⅠ・Ⅱベルト写真撮影。

8月14日～16日　盆休みの為、現場作業休み。

8月17日　B地区縦堀Ⅰ～Ⅲ区掘り下げ終了。遺構外出土遺物平板測量、レベル実測、取り上げ。C地区W－EⅠ・Ⅱ、S－NⅠ・Ⅱベルト断面実測。全グリット内清掃。

8月18日　B地区縦堀Ⅳ～Ⅵ掘り下げ終了。清掃。写真撮影。C地区E～G、Ⅰ～K、M～O、Q～S－G内出土遺物、礫平板測量、レベル実測、取り上げ。写真撮影、A～C地区坑、立札、等の器材整理、片付け。本日にて現場作業終了。C地区については、焼土集中箇所を除き、ローム面等まで遺構の検出が出来ず、調査体制、期間等の不備を痛感し、遺跡に対する担当者の認識の甘さを反省する。

6週間余にわたり、真夏の炎天下のもとで、発掘調査に作業員として参加していただいた皆様方の御理解と御協力により、調査ができましたことに対して心から感謝の意を申し上げます。本当にありがとうございました。

（小原晃一）

第II章　遺跡の環境

第1節　地理的及び歴史的環境（第1・2図）

当遺跡は、駒ヶ根市東伊那火山3436－1・2から3466番地に所在する。国鉄飯田線太田切駅より北東へ約4km、主要地方道伊那・生田・飯田線東側台地上に位置し標高は690m～710mを測る。

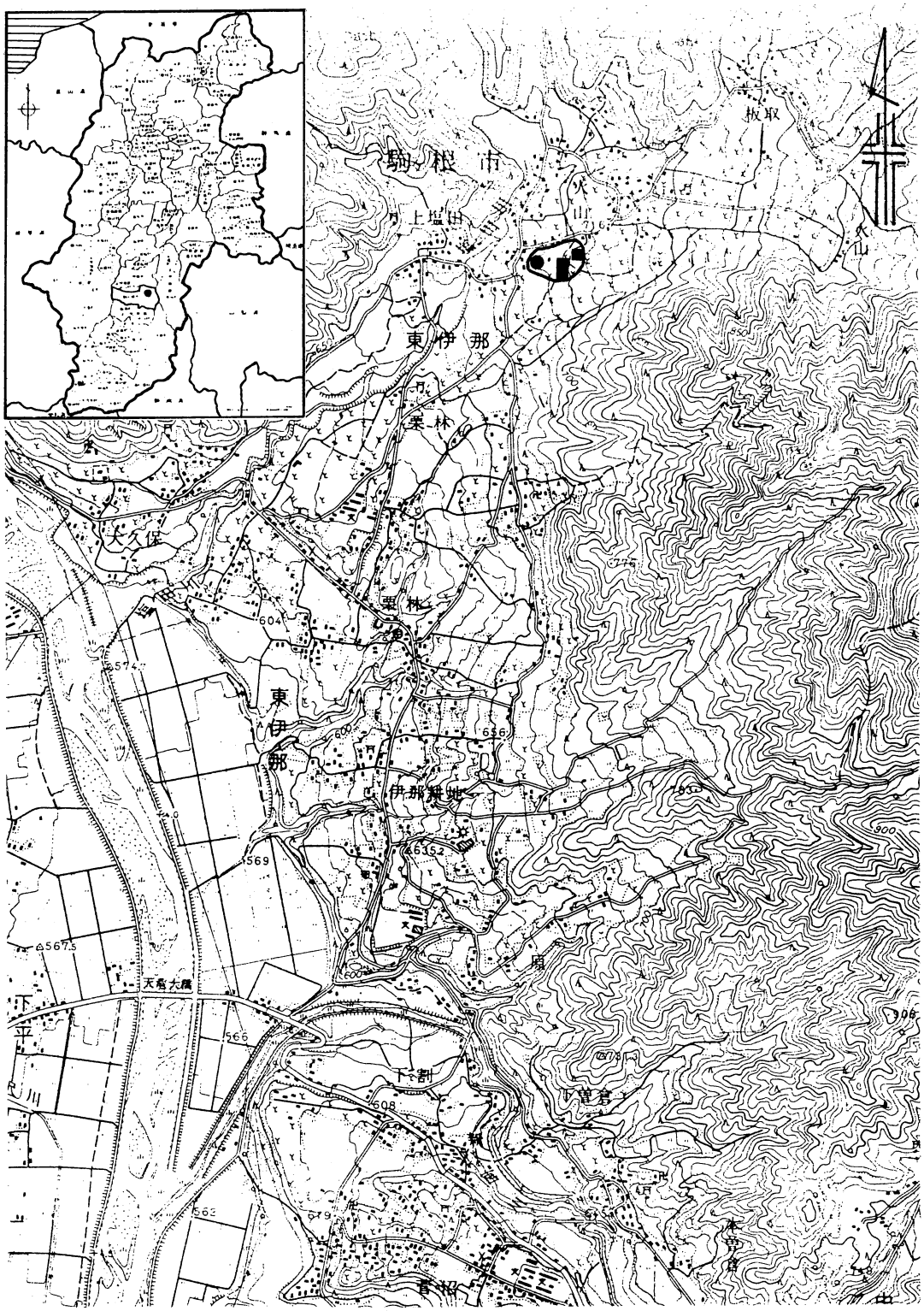
駒ヶ根市は、三つの地区から成り、天竜川をはさんで西側に赤穂地区、東側南部に中沢地区、北部に東伊那地区があり、その東伊那地区の北域中央部に当遺跡は位置している。

伊那谷は、諏訪湖より流れ出る天竜川とその支流である各々の田切川により開析され、西に木曾山脈（中央アルプス）、東に赤石山脈（南アルプス）があり、中央構造線をはさんで戸倉山、高鳥谷山を初めとする前山の伊那山地が両山脈と並行して走る。この伊那山地の一角をなす高鳥谷山及び火山峠に源を発する塩田川が造り出した扇状地の東域やや高い舌状台地先端部寄りに立地し、塩田川の左岸に当る。塩田川との比高差は、約40m前後を測る。地質基盤は、礫層から成り、その上に新期ローム（青木城遺跡では砂質ローム）が堆積している。

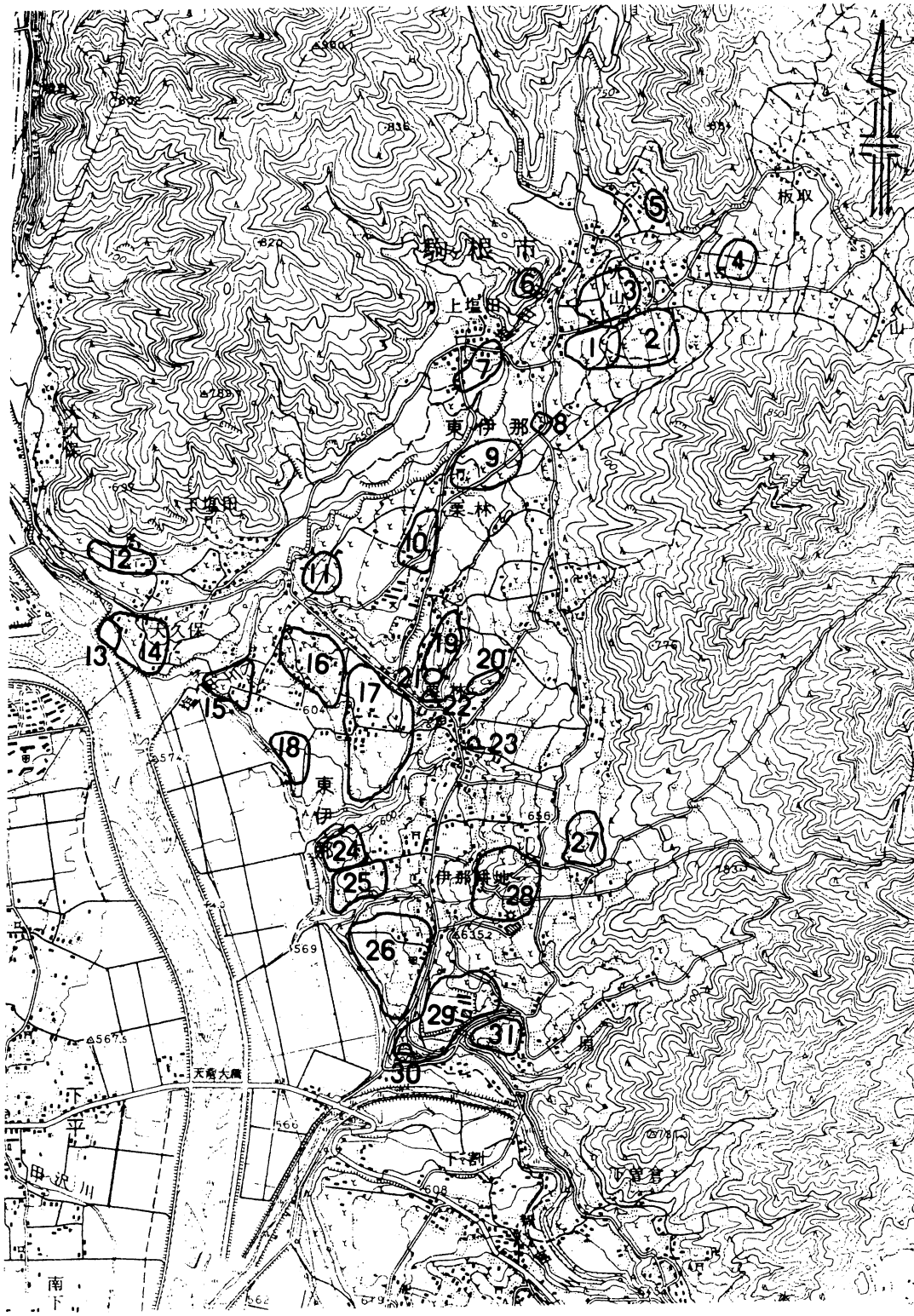
遺跡の層位は、基本的には、I層〈表土〉～VI層〈ローム層〉までのVI層により構成されるが、遺跡一帯が傾斜の強い地形であることと、桑畑・根菜類の耕作地等の環境により、整層を成さない。調査A・B地区の浅い所では、I層〈表土〉、II層〈耕作土〉が30cm前後堆積し、ローム層が表出する状態である。調査C地区は、窪地であることにより、表土面よりローム層面まで75cm～95cmと深く割合各層が整層を成している。

遺跡の所在する東伊那地区は、遺跡の宝庫として知られ、大正末年発行の「先史及び原始時代の上伊那」（故鳥居龍蔵博士著）に数多くの遺跡が確認されている。第2図中1は青木城、2は青木（平安、中世～近世）、3は青木北（縄文・平安）、4は高山社（中世以降）、5は火山（縄文以降）、6は塩田城（中世）、7は上塩田（縄文・平安・中世）、8は石経塚（中世～）、9は栗林神社東（弥生後期）、10は善込（弥生後期）、11は垣外上（弥生）、12は箱畳（平安、中～近世）、13・14は大久保城（中世）、15は高田城（中世）、16は反目（縄文）、17は遊光（縄文）、18は反目南（縄文）、19は城村城（中世）、20は小城（中世）、21は桃山（弥生）、22は桃山古墳（消滅）、23は柏原古墳（消滅）、24は稲村城（中世）、25は稲村古城（中世）、26は殿村（平安）、27は山田（縄文）、28は丸山（縄文・弥生）、29は狐久保（縄文・弥生）、30は稲荷古墳、31は原城（中世）、である。

これらの中で、特に、青木遺跡は当遺跡の外郭の遺跡であり、昭和58年度に調査（約1200㎡）され、平安末の住居跡1軒、室町時代以降（15世紀後半～16世紀初頭）の住居跡1軒、室町～桃山時代にかけての堀址2条、同時期と考えられる礎石列、集石址、柱穴址群、近世以降の集石址、火葬墓等が検出され、古瀬戸灰釉、天目、内耳、青磁等が遺物として出土している。

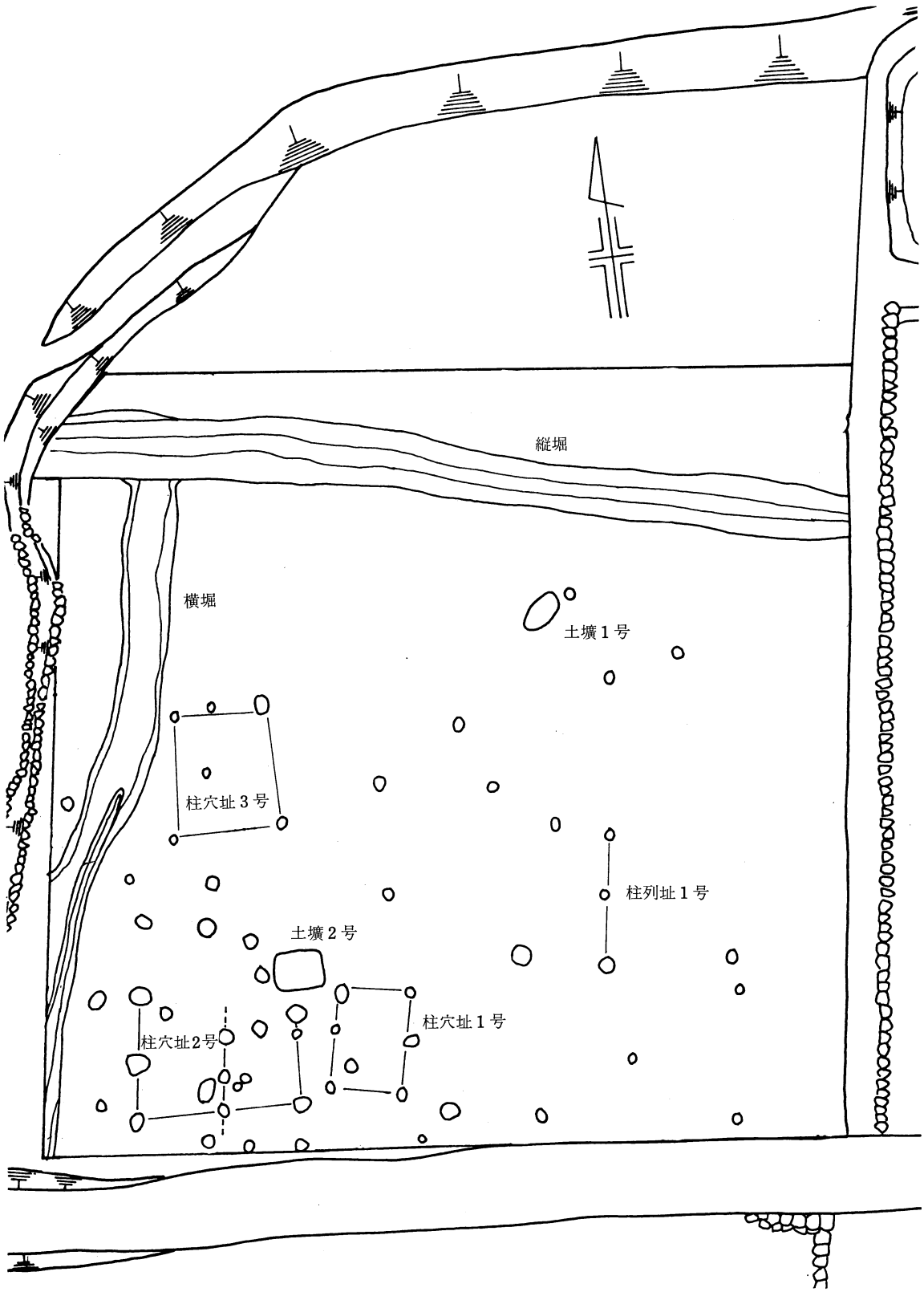


第1図　青木城遺跡位置図(S＝1/25,000)

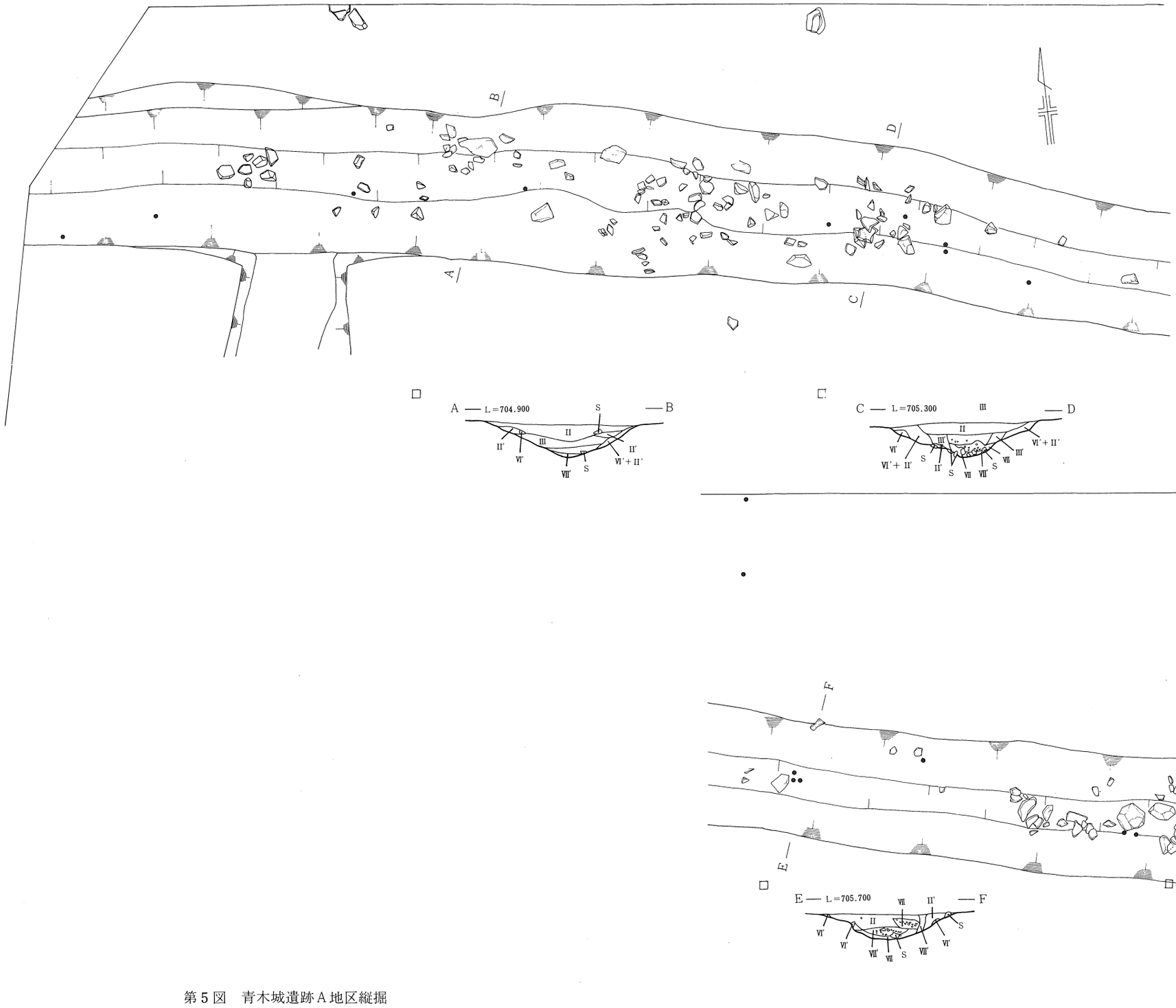


第2図　青木城遺跡及び周辺遺跡分布図(S＝1/25,000)

第3図　青木城遺跡調査A～D地区位置図及びグリット図(S=1/2,000)



第４図　青木城遺跡調査Ａ地区遺構全体図(Ｓ＝1/200)



第5図　青木城遺跡Ａ地区縦掘

第Ⅲ章　発掘調査

第１節　調査概要

発掘調査に先立ち、調査区周辺の桑畑、畑地の表面採集を行い灰釉、天目茶碗破片、青磁器片、鉄釉、黒曜石剝片等を採集する。

遺跡面積は、20,000㎡と広範囲に及ぶが遺跡地が傾斜地に立地していること、桑畑・野菜畑の耕作物が残っていること、調査体制の不備、期間・予算の制約等から部分的な発掘調査を実施せざるを得なかった。

調査区は、第３図の様に、「城の郭」と推定される第一段目の段丘より約150m、通称「かまとり線」の東側の桑畑を調査Ａ地区、南西に向って、調査Ｂ地区、調査Ｃ地区と設定した。各地区ともに、５m×５mのグリットとし、南より北へ向いＡ・Ｂ・Ｃグリットと付した。層位を確認する為のベルトは、グリットに沿って十文字に設け、基本的にはＷ－Ｅ、Ｓ－Ｎとした。

出土遺物は、攪乱層内、整層の遺物包含層内を問わず、比較的堆積土が浅い状態であることから全点ドットを行い、平板測量・レベル実測を行った。

断面実測は、ベルト・遺構を中心として行った。

写真撮影は、全景、調査風景、遺構・ベルトの断面、出土遺物・遺構について実施した。

調査面積は、調査Ａ地区で630㎡、調査Ｂ地区で400㎡、調査Ｃ地区で350㎡である。

なお、調査Ｃ地区については、焼土集中箇所（黒褐色土中）を除き、ローム面までの遺物包含層まで完掘することができず、出土遺物のドット・平板測量・レベル実測と礫群の実測、写真撮影の調査に限られてしまった。

第２節　調査Ａ地区遺構と遺物

縦堀（第5・6・10図、図版2・3）

遺構　本跡は、Ａ地区の北端より検出され、主軸は西北をとるが中心部よりやや西に折れ曲がる状態である。検出された規模は長さ約25ｍで、東と西へ延びることは確実である。東端で幅１m25cm、深さ40cm前後、中央部で幅１m65cm、深さ45cm前後、西端で幅２m、深さ50cm前後を測る。最大幅は２m10cm、最小幅は東端の１m25cmであり、深さは東から西にかけて徐々に増している。堀内の堆積土層は、Ｇ－Ｈ断面で表土を除きII′層（暗褐色土、ロームブロック多し）が15cm前後、III′層（暗茶褐色、ロームブロック多し）が15cm前後、VII層（III＋砂）が10cm前後、VII′層（III＋砂利）が５cm前後堆積している。Ｃ－Ｄ断面では、II層が15cm前後、III層が10cm前後、

Ⅶ層が10cm前後、Ⅶ′層が５cm前後堆積している。中央部より東側にはⅢ層の整層はなく、西側には顕著に見られる。

堀の断面形（掘り込み）は、全体的に見て底部が丸味を帯びた薬研状をなしているが、上幅に対して深さがないので舟底形と言った方が適切である。掘り込み底部には、こぶし大を平均に人頭大の花崗岩・花崗閃緑岩が主体をなす自然礫群が堆積しており、東側部分は基盤に露出している状態であった。最下層部には、Ⅲ層（暗茶褐色土）と砂利の混土層が堆積していたことは、自然ないし人為的にしろ、流水・導水した痕跡として考えられる。

遺物　縦堀の中から出土した遺物は、上層から下層にかけて内耳土器片が主体を占め、灰釉陶器、天目茶碗の小破片も出土している。また、縄文時代前期土器片（無文、擦痕、条線文等をもつ薄手の土器）、縄文前期末～中期初頭（籠畑～梨久保式系）土器片、打製石斧破片、黒曜石剝片が出土している。

特に、内耳土器は、調査範囲の東端と中央部やや西側の地点Ⅲ層（暗茶褐色）内より集中して出土した。

第６図中１～５は、復元実測のできた内耳土器である。実測図には、内耳部分の出土がなかったため復元してないが、内耳部は付くものと考えられる。成形は、器壁内外面及び底部を横ナデし、胴部の一部は縦のナデ行い調整している。器壁外面はいずれも煤が付着し黒褐色をしているが、内面は１・３・５が暗褐色、２が明褐色、４が褐色である。内面におこげ及び煤が付着している資料は出土していない。

１は、ほぼ2/3個体分の破片の復元実測である。口径28.6cm、高さ16.4cm、底径22.8cm、器壁厚５～８mmを測る。器壁はやや内彎しながら直線的に頸部に至り口縁部はやや外傾する。口唇部は外側が低く、頸部内面の溝は浅い。底部は内面が波状をなし、やや上げ底である。

２は、口径34.0cmで、器壁厚は５～９mmを測る。口縁部はやや内彎気味である。口唇部は肥厚し外屈するが内側が低い。頸部内面の溝は深い。頸部のくびれは弱い。

３は、口径29.4cmで、器壁厚は８mm前後を測る。口縁部は外傾し、胴部下は１に似て直線的である。口唇部は内側が低く、頸部内面の溝は深い。

４は、口径24.4cmで、器壁厚は4.5mm～８mmを測るが、他のものに比べ薄手である。口縁部は内彎し、口唇ぶは肥厚するが、平らでなく断面形が山形状をなす。頸部内面の溝はなく、頸部のくびれは強く、胴下半は外傾して立ち上るものと考えられる。

５は、底径（推定）22.6cmで、器壁厚は６～８mmを測る。底部は平坦をなすと考えられる。

胎土は、いずれも１mm以下の細かい長石・英石・雲母粒を含むが、５の底部片のみ４mmの小砂利を含む。

第10図中７～10、13・15は縦堀出土の縄文時代の遺物である。７は幅の広い隆帯を貼り付け、直径１cm位の半截竹管で爪形の刺突を施し、下方には幅の狭い半截竹管で連続押引をしている。あまり類例を見ないが、縄文前期末から中期初頭に位置付けられる。８・９は、ともに半截竹管

で、横位と斜位の平行沈線文を施す。8は口縁部片、9は胴部片である。前期末から中期初頭の籠畑～梨久保式に位置付けられる。13は、礫器で石材は砂岩である。長さ8.7cm、幅5.5cm、厚さ2.3cm、重さ166gである。上端部は、強い打撃の後に弱い打撃を1度行い、下端部は2度の強打撃の後に弱打撃を数回行っている。縄文早期の押型文等の伴出はないが、形状等からみて早期～前期頃の石器である可能性が強い。15は、敲打器で、石材は砂岩である。長さ10.4cm、幅5.7cm、厚さ3.1cm、重さは281gである。平面形は楕円形、断面形は木葉状で、細身側の側縁部と胴部を敲打している。時代判定は難しいが、縄文前期以降の石器と考えたい。

横堀（第7図、図版2）

遺構　本跡は、縦堀西端南壁に接して、主軸を南西にとって掘り込まれている。が、実際には、掘り込みが10～20cmと浅く掘り込むと言うよりは削土した状態と言う方が適切である。検出された規模は、長さ約22mで、さらに南西に延びることは確実である。北端で幅1m30cm、深さは東壁で20cm、西壁で10cm、中央部で幅1m10cm、深さは東壁で25cm、西壁で7cmであり、南端は土手際の為、未調査で全容は明らかでない。中央部から東壁に沿って小溝がある。確認された範囲では幅25～40cm、深さ5～12cmを測り中央部から南に向い徐々に深くなっている。堀内の堆積土はIII層（暗茶褐色土）で埋まり、底は割合軟かく礫を含む砂質ローム層が基盤をなす。縦堀に対して深さ・形態ともに劣るが、攪乱の遺構ではないことから、区画・導水等の意味付けをし横堀として位置付けた。

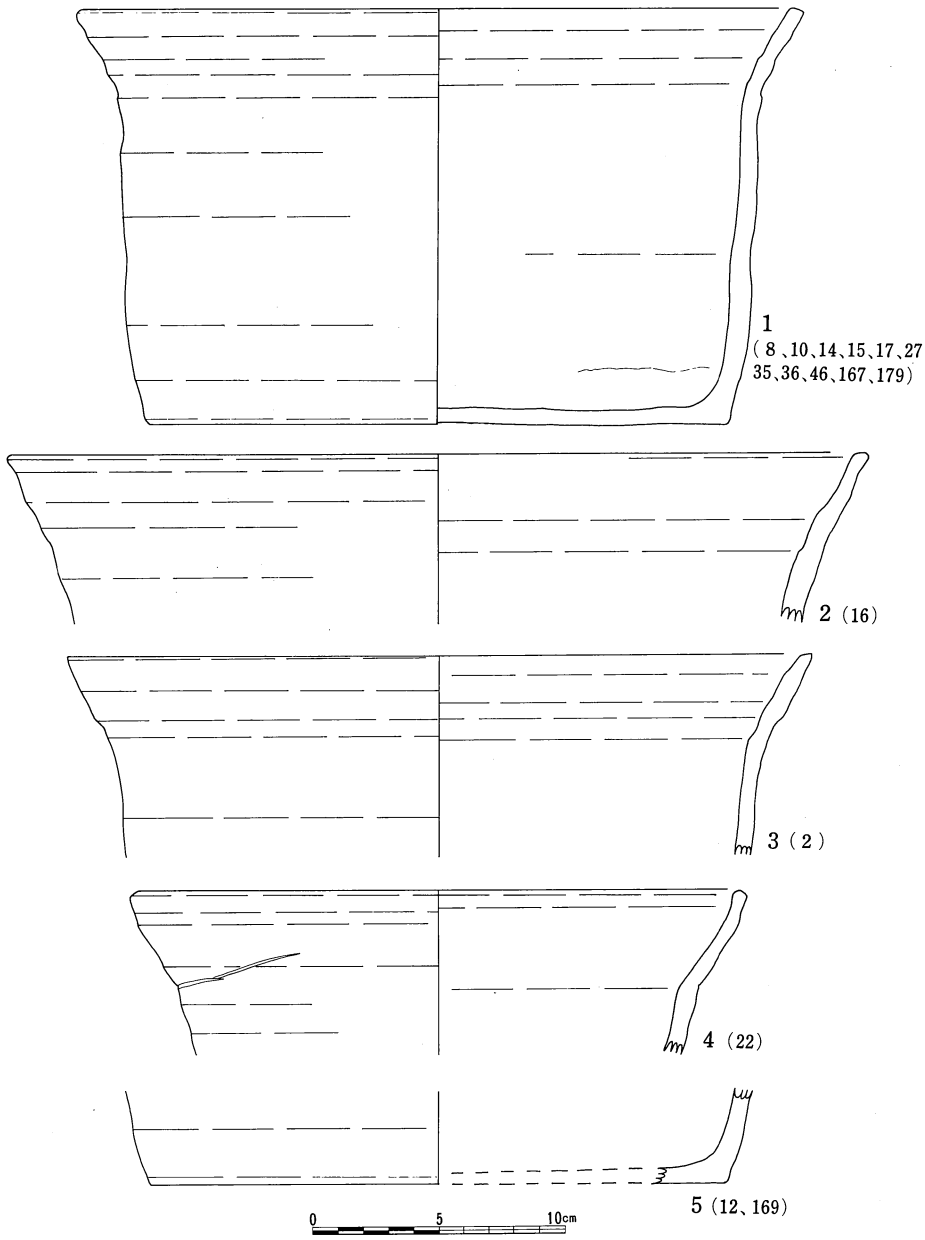
遺物　横堀の中から出土した遺物は、緑泥片岩の小剝片1点のみである。

柱穴址群（第7・8・10・11図、図版2・4）

遺構　柱穴は総数で57本検出され、縦堀と横堀に囲まれて、ほぼ全域に分布しているが、特に南西域と南東域に集中している。平面形は円形、楕円形、不整円形と様々で、深さも最低14cmから最高39cmと統一性がないが、不整円形で深さ25cm前後のものが主体を占める。

柱穴址1号　本跡はP9からP14の6本により構成される。主軸を北北東にもつ長方形で、規模は短軸2m25cm、長軸3mであり、P9とP10の間隔は1m80cm、P10とP11の間隔は1m20cmであり、P12からP14もこれとほぼ対応する。柱穴の平面形はいずれも不整円形で、深さは15～33cmと一定ではない。柱穴の底は、比較的堅い。

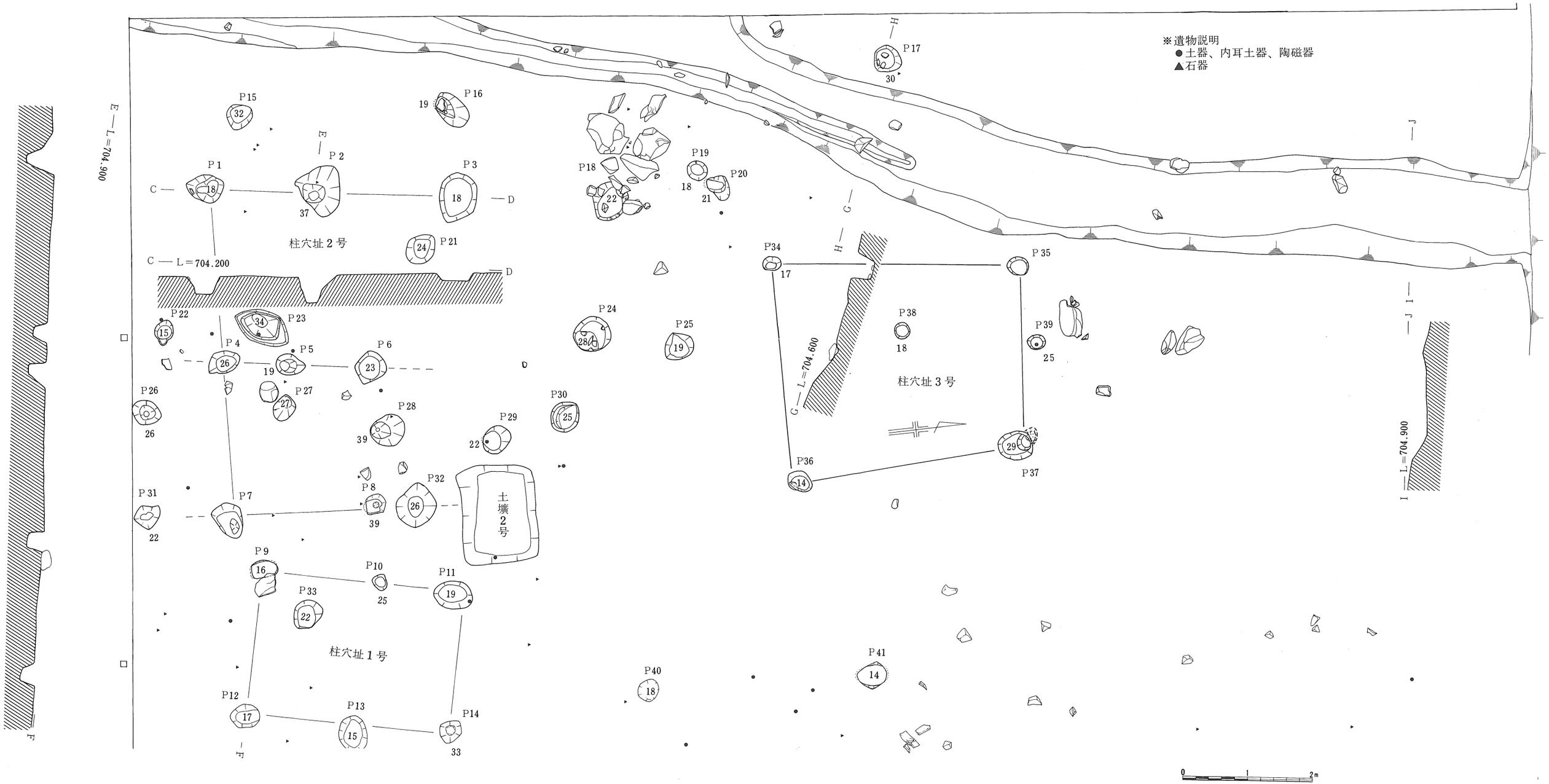
柱穴址2号　本跡はP1からP8までを想定するが整っていない。P1～P3が、P4～P6が、P7・P8とそれぞれ一列に並ぶが相互間の統一性はない。P1とP2の間隔が1m80cm、P2とP3が2m、P4とP5が1m、P5とP6が1m30cm、P7とP8が2m20cmである。P1－P4－P7の間隔はほぼ2m60cmである。柱穴の平面形はいずれも不整円形で、深さは17～39cmを測り一定ではない。P4・P6・P7・P8は間隔がほぼ2m20cmであり整っている。全体的に統一性に欠けるが1柱穴址として把握した。P1～P3の底は軟かく、外は割合堅い。



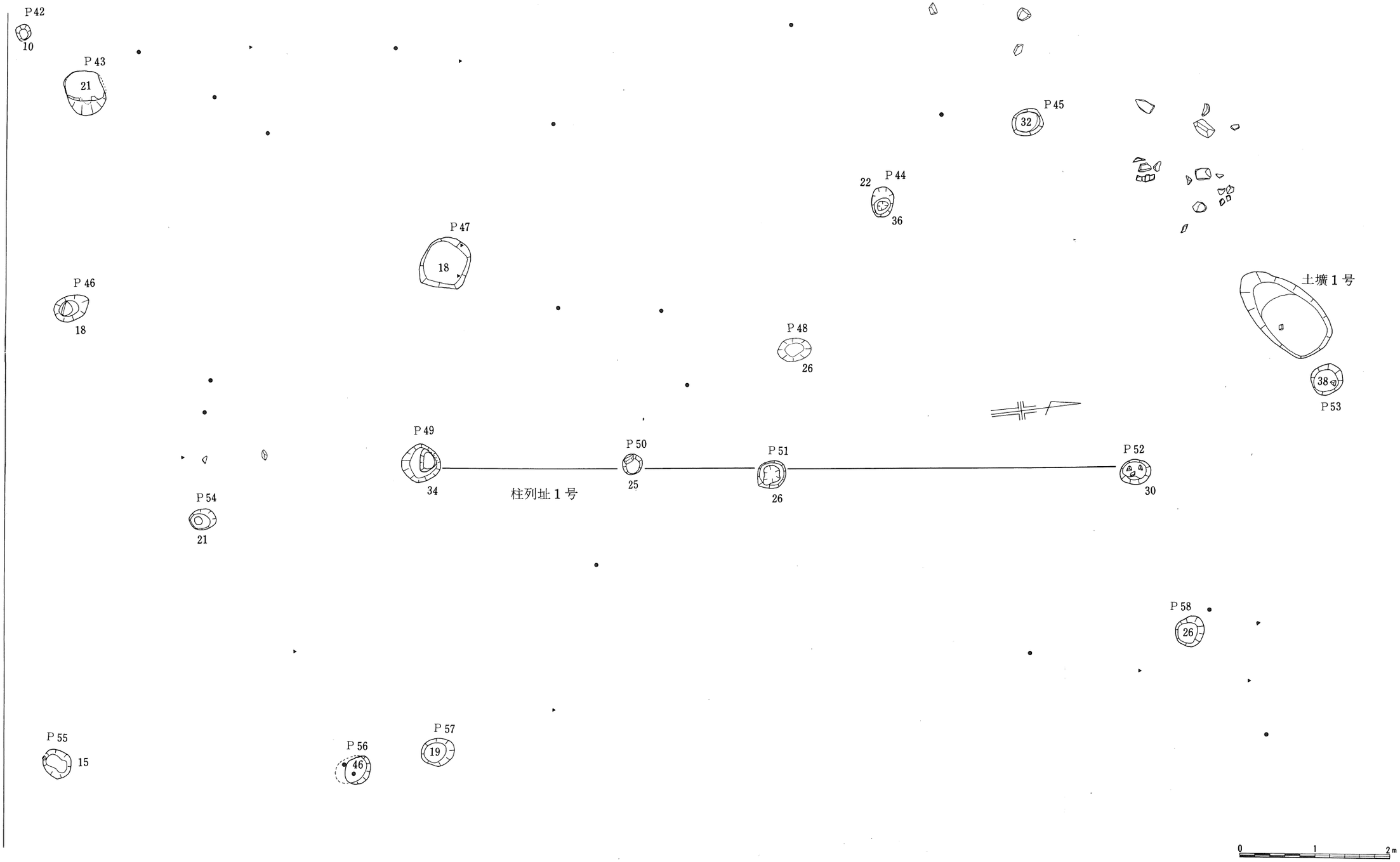
第6図　青木城遺跡A地区縦堀出土遺物実測図（S＝$\frac{1}{3}$）

柱穴址3号　本跡はP34からP37の4本により構成される。主軸をほぼ北にもつ長方形で、規模は短軸（P35—P37）2m80cm、長軸（P34—P35）3m80cmであり、P36は南東方向にずれている。柱穴の平面形は不整円形で、深さは14～29cmを測る。底はいずれも軟かい。

柱列址1号　本跡はP49・P51・P52が想定されP46・P47・P55・P57との関連も考えられる。P49—P51—P52の間隔はほぼ4m80cmである。柱穴の平面形はほぼ円形に近く、深さは26～34cmを測る。底はいずれも堅い。



第 7 図　青木城遺跡 A 地区横堀、土壙 2 号、柱穴址群実測図（S＝$\frac{1}{60}$）



第8図　青木城遺跡A地区土壙1号・柱列址1号実測図(S＝$\frac{1}{60}$)

遺物

柱穴址１・２・３号、及び柱列址１号周辺から出土した遺物は、中世（15～16Ｃ）の常滑甕胴部片、灰釉瓶胴部片、擂鉢胴部片、18Ｃ以降の灰釉陶器片、きせる雁首と、主体を占める縄文時代前期の土器片、打製石斧、スクレイパー、ピエスエスキーユ、黒曜石剝片等である。

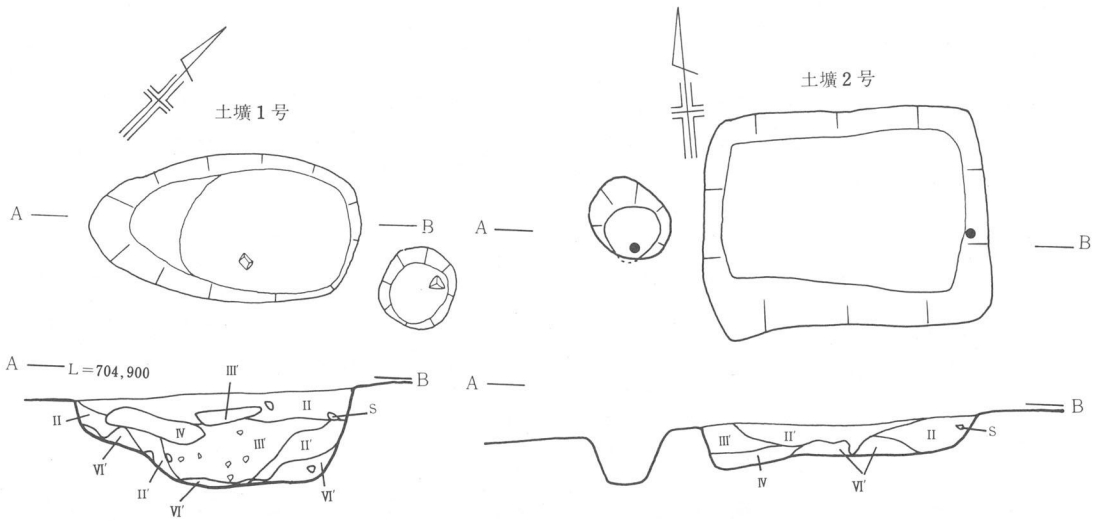
第10図中１～６、11、12、14、16～18、第11図中１～３が、柱穴址群より出土した主な遺物である。第10図中１～６は、縄文時代前期土器片である。１は胴部をやや肥厚させ爪形を施し、上部には半截竹管状の施文具で斜めの条線を付けさらに縦方向にも付けている。無繊維で、３mm前後の長石・石英を多く含む。２・３は同一個体と考えられ、２は隆帯を貼り付け爪形を施し、斜条線を付けている。３は交互に斜条線を施す。４は斜めの条痕を施す。５は交互に斜条線を施す。６は無文土器片で、縦位の擦痕が見られる。１～６はいずれも内面には指頭圧痕が見られ、特に２～５は顕著である。総じて縄文時代前期初頭の東海系の土器として位置付けられる。11は結節縄文を施した上に半截竹管で平行沈線文を付けている。縄文時代中期後半に位置付けられる。12は横位の２条の沈線と孤をなす沈線を施す。中期末から後期初頭に位置する。14は砂岩製の打製石斧頭部片で、片面に自然面を残す。16～18は陶器片である。16は擂鉢胴部で擂り目は７条ありやや磨耗が著しい。釉は薄い鉄釉がかけられ茶褐色をしている。16Ｃ初頭に位置する。17は鉄釉皿底部で推定底径8.6cmを測る。釉は内面が厚く、外面は薄くともに茶褐色である。底部は糸切りをしている。18は灰釉丸碗口縁部片で釉色は灰白色である。推定口径9.8cmである。17･18は18Ｃ以降に位置付けれれる。第11図中１は黒曜石製のサイドスクレイパーで長さ4.3cm、幅２cm、厚さ５mmを測る。弓なりの剝片を利用し片側面のみ調整し自然面が残る。２はピエスエスキーユで長さ2.8cm、幅1.5cm、厚さ８mmを測る。表･裏面はシャープな剝離をしているが上・下端は打撃が加えられている。１・２ともに、縄文時代の所産であり、前期土器の出土等から伴出の可能性もある。３はきせるの雁首で表面は全体に緑青がふいていることや残存状態が良好なことから真鍮製とも考えられる。長さ6.4cm、胴径１cm、詰め口径1.4cm、厚さ0.5mm～１mmを測る。内部に竹管の筒が残存している。

土壙１・２号（第7～9図、図版２）

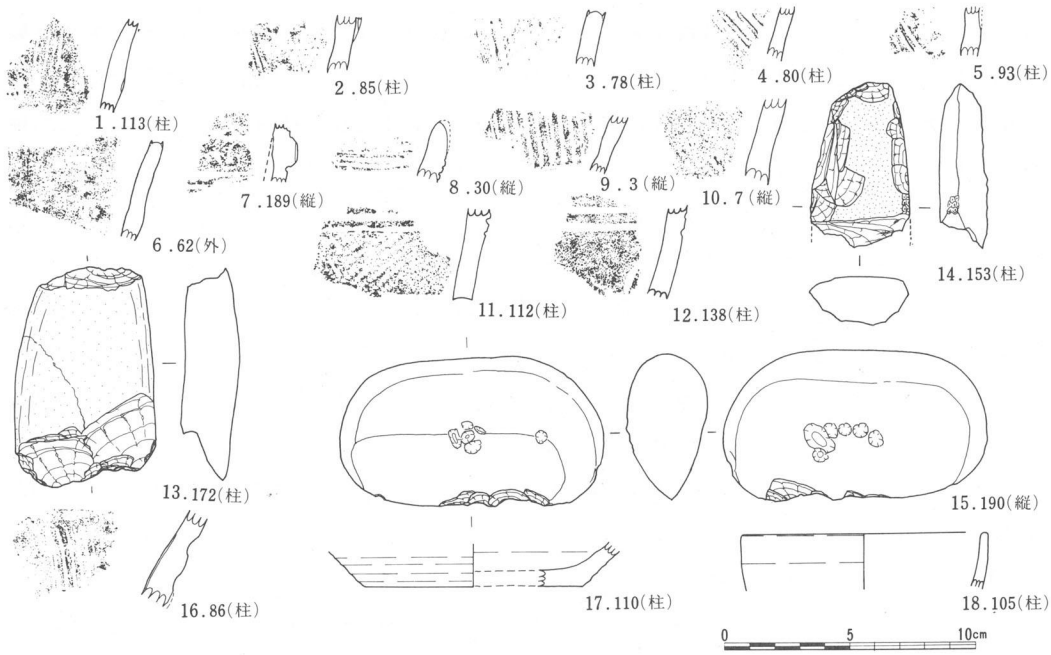
土壙１号　本跡は縦堀南側より検出された。規模は長軸１m40cm、短軸80cm、深さ48cmを測る。平面形は楕円形、断面は鍋底形であるが西南壁は二段となっている。掘り込み、底部ともしっかりしていて、堅い。東側に20cm離れて直径40cm深さ38cmのピットがある。堆積状態は整層をなし、中層以下は小石が混じるIII′層が35cm前後堆積している。

出土遺物はなかった。

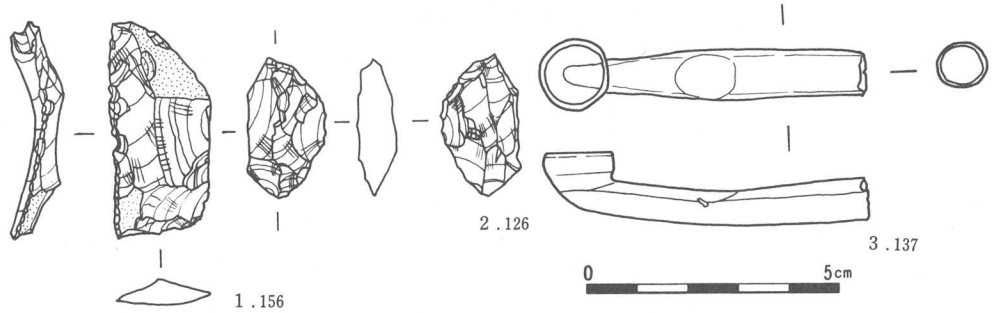
土壙２号　本跡は柱穴址１号と２号の間北側より検出された。規模は長軸１m50cm、短軸１m10cm、深さ20cm前後を測る。平面形は隅丸長方形、断面はタライ状である。掘り込みは浅く、底部は軟弱である。堆積状態は桑畑の耕作等の攪乱を受け、主にII～II′・III′・IV層が堆積する。　出土遺物は縄文前期土器小破片が１点東壁より出土している。



第9図　青木城遺跡A地区土壙1・2号実測図(S=1/40)



第10図　青木城遺跡A地区縦堀及び柱穴址群出土遺物実測図(S=1/3)



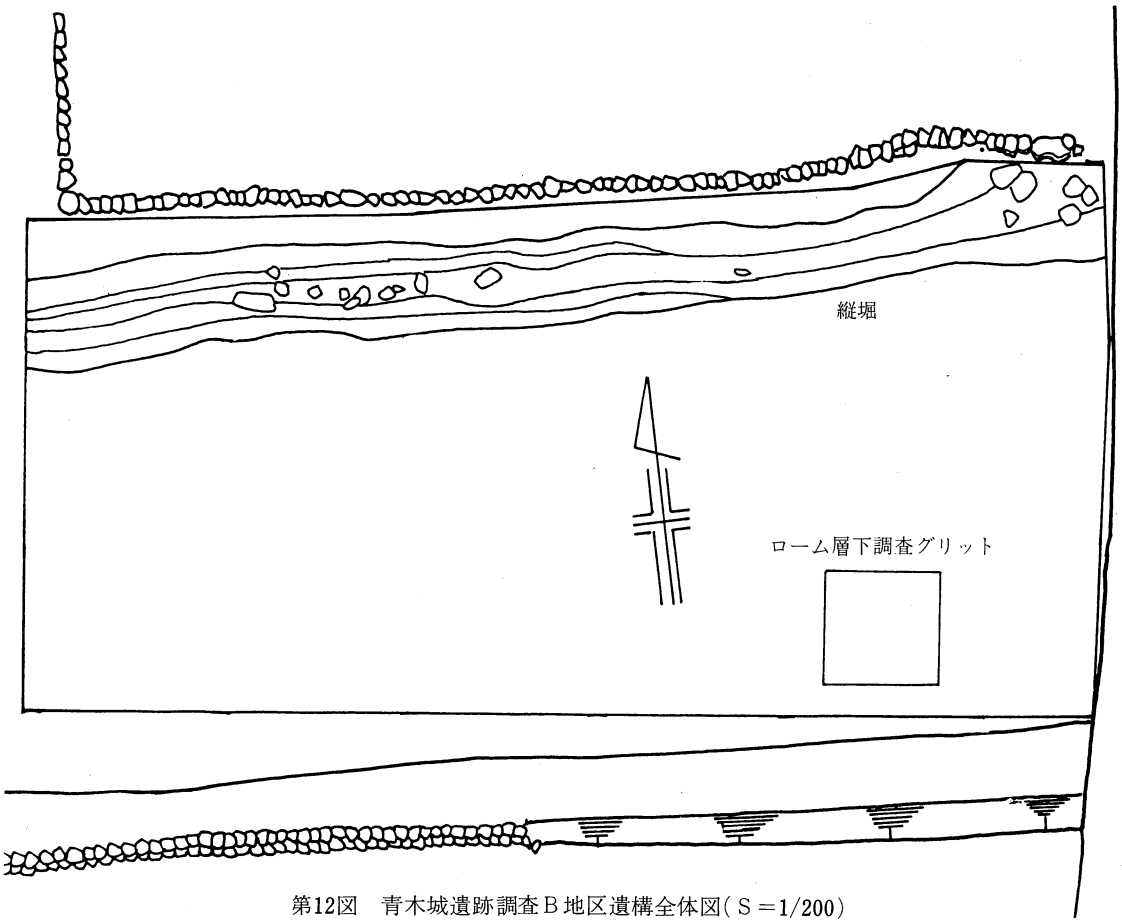
第11図　青木城遺跡柱穴址群周辺出土遺物実測図(S=2/3)

第３節　調査Ｂ地区遺構と遺物

縦堀（第12～14図、図版5・6）

遺構　本跡はＢ地区北域から検出され、現在の桑畑の石垣とほぼ平行しており、主軸を東西軸にもつ。検出された規模は長さ約18mで、東と西へさらに延びると考えられる。東端から西へ４mの地点で幅２m60cm、深さ70cm前後、中央部で２m15cm、深さ90cm前後、西端で２m20cm、深さ80cm前後を測る。最大幅は２m60cmで、最小幅は１m55cmである。東から西へかけて徐々に深くなる傾向であるものの、中央部が他に比べ15cm前後深くなっている。

堀内の堆積土層はＥ－Ｆ断面で表土を除きII層が35cm前後、II′層が10cm前後、VII層が25cm前後堆積している。E—F断面内北側は大礫（60cm×80cm前後）が自然露出していて堀底の状態は詳細でない。Ｃ－Ｄ断面ではII層が15cm前後、III層が10cm前後、III′＋VII層が10cm前後、Ｖ層が10cm前後、VI層が10cm前後—同レベルでVII層が15cm前後、VII′層（礫混）が30cm前後堆積している。



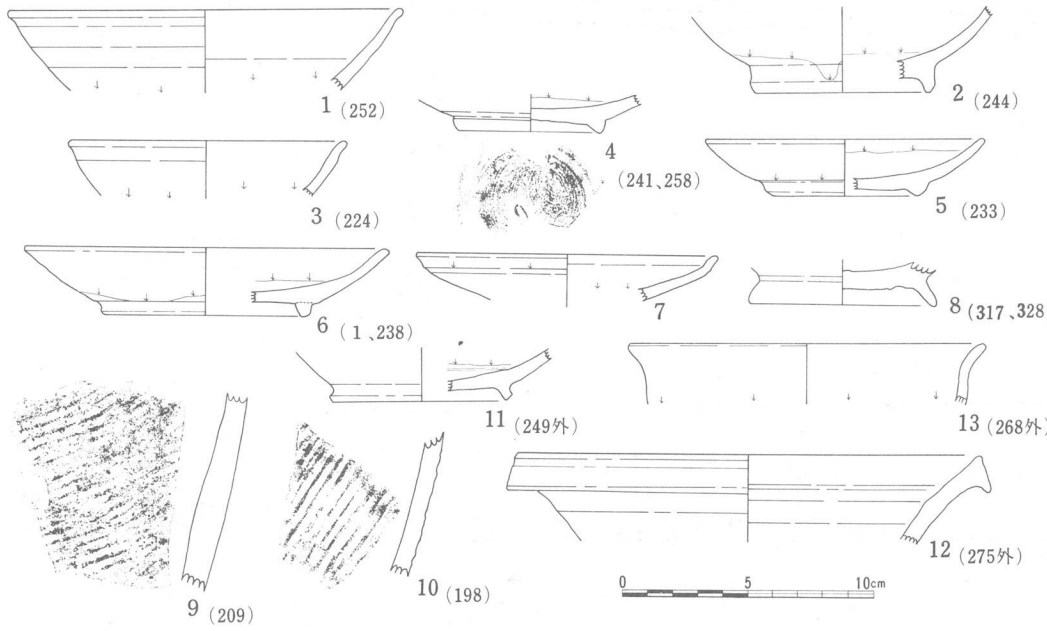
第12図　青木城遺跡調査Ｂ地区遺構全体図（Ｓ＝1/200）

A－B断面では、II層が15cm前後、III層が20cm前後、IV層が10cm前後―同レベルでVII層が15cm前後、VII層（礫混）が30cm前後堆積している。推積状態を見ると、E－F断面を除き、III層（暗茶褐色土）の下にVII層（III＋砂）があり、さらにIV′層（黒褐色土）の下にVII′層（III＋砂利・礫）が堆積している。このことは、常に流水があったのではなく一度流水がなく腐植土が堆積し、その後、再び流水したことを表している。特に、C－D断面の内、北壁側にはVI′＋VII、IV＋VII、VII＋VI′、IV＋VIIという層の堆積が見られ、IV（黒褐色）とVII（III＋砂利）が混じりながら交互に堆積し整層をなしている点は注目される。

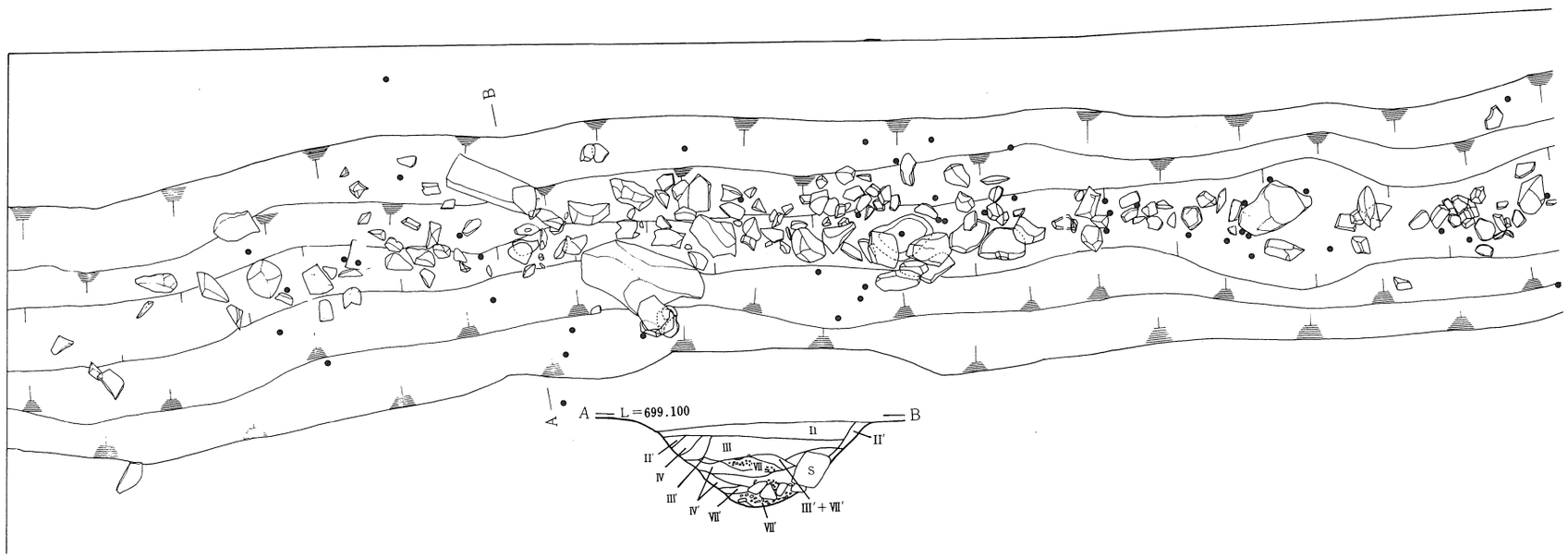
堀の断面形は東側で舟底形、中央部で鍋底形、西側で薬研形をしており、一見規則性に欠けると考えられるが、堆積土の状態や花崗岩・花崗閃緑岩を主とする自然礫を含む基盤までの人為的な堀り込みから判断すると、流水時の水力を調整しながら構築していると考えられる。また、堀の幅と深さとの関係、堀底の蛇行からも裏付けられるのではないか。

遺物　縦堀の中からはIII層及び最下層のVII及びVII′層の直上から遺物は出土している。

第13図中１～７は灰釉陶器、８は内黒土師器、９・10は須恵器で堀より出土し、11～13は遺構外出土である。１～３は碗で１はゆるやかな立上がりをし口唇部を肥厚する。３も同様重ね焼きの痕跡が残る。２は丸味を帯びる貼り付け高台をもつ。１は堅致な胎土で２・３はひびが入るほど粗雑で釉は灰白色である。１～３は漬け釉である。４～７・11は皿である。４は内反する付高台をもち糸切り底である。５はゆるやかに立上がり丸みを帯びた付高台をもつ。６も同様の立上りを見せるが高台がシャープにつけられている。７は口唇部下が稜をもち外面はヘラ削りである。11は６と同様の高台をもつが、外反する。重ね焼痕が内面に残る。４～６・11は胎土は堅致であるが、７は夾雑物を含む。総体的には、10C半ば～11C初に位置付けられ、東濃産が主であるが、



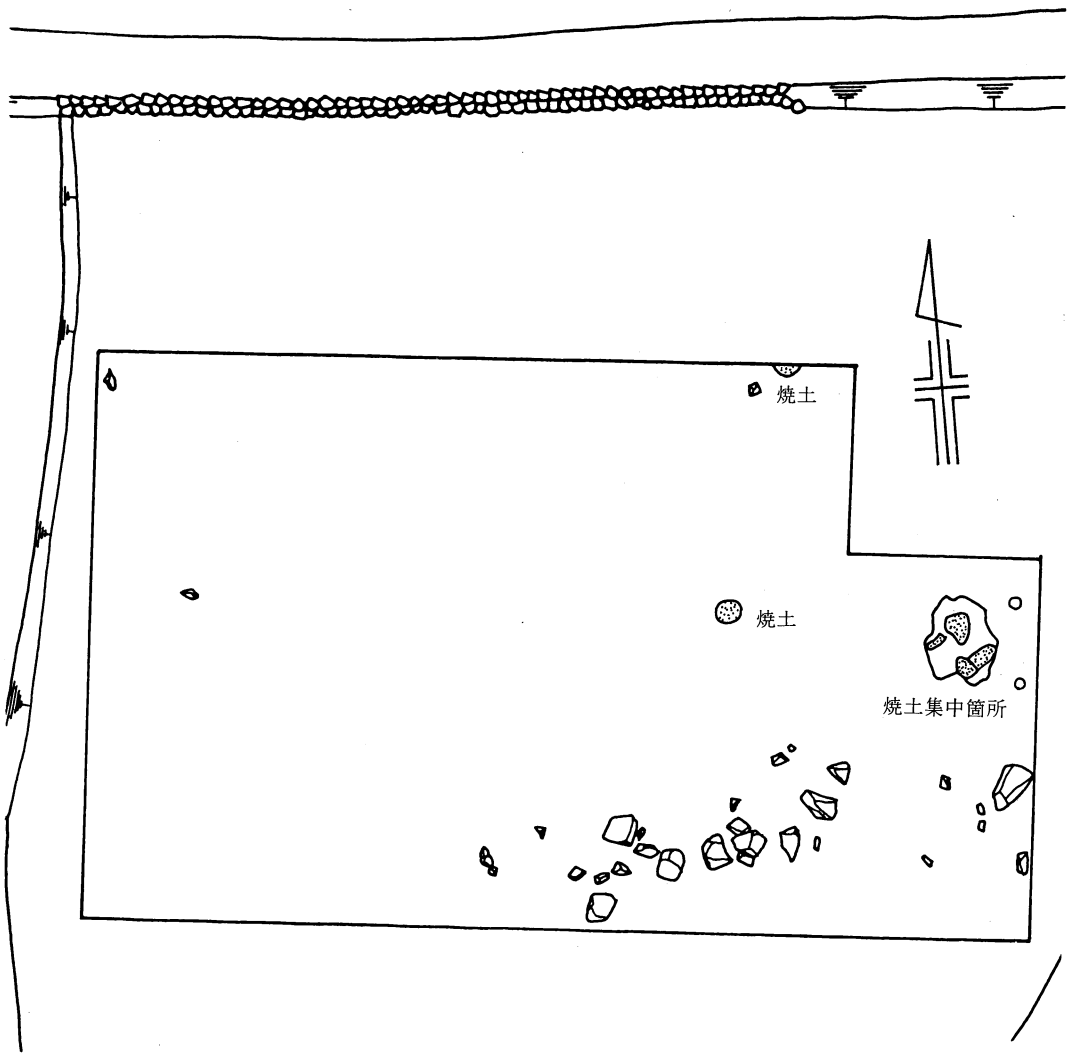
第13図　青木城遺跡Ｂ地区縦堀及び遺構外出土遺物実測図（Ｓ＝$\frac{1}{3}$）



第14図　青木城遺跡Ｂ地区縦堀実測図（Ｓ＝$\frac{1}{60}$）

11は古く７は新しいところに位置付けられる。８は黒色土師器底部で、外反する付高台をもちヘラ削り後ナデている。内面には雑な暗文を施す。10Ｃ半ばに位置付けられる。９・10・12は須恵器甕で、９・10は平行叩き目を外面に施す。12は外反する口唇部をもち反り割合シャープである。総じて９Ｃ半ばに位置付けられる。13は青磁碗口縁部で、推定口径13.8cm、器壁厚は３～４mmで、釉色は濃緑色で、釉は0.5mm前後である。口唇部はやや肥厚する。罅入はない。宋～元に位置付けられる。第20図１の打製石斧は遺構外から出土している。自然面はないが刃部を欠く。硬砂岩製。

調査Ｂ地区から縦堀以外の遺構が検出されなかったため、南域にローム層下調査グリット（２m×２m）を設定して堀り下げてみたが、北壁で70cm、南壁で35cmの地点から自然の角礫群が露出したのみで、出土遺物はなく砂質ローム・礫の混土層が基盤となった。



第15図　青木城遺跡Ｃ地区遺構全体図（Ｓ＝1/200）

第４節　調査Ｃ地区遺構と遺物

焼土集中箇所（第16～20図、図版7・8）

遺構　本跡は調査Ｃ地区の東域より検出され、東西１m80cm前後、南北２m前後の範囲にわたって、焼土・木炭の分布が見られ、焼土はその中央部と南側に３～５cmの厚さで遺存していた。北寄りには15cm角から30cm角の大小５の礫が置かれており、いずれも花崗閃緑岩で焼けていた。30cm東南に離れて60cm×80cm位の範囲に焼土・木炭の分布も見られた。この分布の中に、直径20cm深さ30cmの円形のピットがあり、北に１m70cm離れて直径20cm深さ28cmの同様のピットも検出された。両ピットともに底は割合に堅い。焼土集中箇所の基盤は黒褐色土層で、ピット寄りから東はローム層である。

遺物　第18図が出土した主な遺物である。１～３は灰釉陶器、４・５・11～14が土師器、６～10が黒色土師器である。１・２は碗で、１はゆるやかな立上りを見せ、内外全面につやのある灰釉（淡灰緑色）をハケ塗りしている。２は丸みを帯びた付高台をもつ。釉は灰色釉が内外面に施されている。３は皿で器壁は２～３mmと薄く口唇部は外反しくびれをもつ。釉色は灰青色である。１～３はいずれもナデ整形である。２・３は11Ｃ半ばに位置付けられ、１はやや古く位置付けられる。４・５は坏口縁部、11～14は坏底部である。４は口唇部が肥厚し外面に指ナデ調整痕が顕著で、内面はヘラナデである。５は一定の厚さでやや内湾気味の口縁部である。内面口唇部１cm幅位が黒色をしている。内外ともにナデ整形。11～14はいずれも糸切底で、11は上げ底で内外ともに炭化物が付着している。内面ナデ整形。12は底部の調整が悪く丸底状になっている。外面に炭化物付着。13・14は、11・12に比べて、底部の立上りがシャープである。13は雲母を多く含む。14は、明黄褐色をしていて長石・石英を多く含む。ともに、内外ナデ整形である。６～８は坏口縁部で、９は皿口縁部、10は坏底部である。６・７は口縁部がや外傾し、８は外反する。いずれも暗文はなく、内外ともにナデ整形で外面には指ナデ痕が顕著である。９は口縁部半ばが肥厚し、直線的に外傾している。内外ナデ整形である。10は糸切り底で、底部中心部が盛り上がっている。立上りは丸みを帯び、内外ナデ整形で、外面には指ナデ痕が顕著である。土師器・黒色土師器は総じて、10Ｃ後半にかけて位置付けられる。

なお、焼土集中箇所から西へ５m地点には、直径45cmの円状に４cm前後焼土が遺存し、又、さらに北西へ８mの地点には、グリット際から直径55cmの半円部分のみの検出であったが３cm前後焼土が遺存していた。前者の周辺からは第20図中20の土師器坏底部が出土している。糸切り底部で上げ底をなす。立上りはゆるやかで、外面ナデ、内面ヘラでかき上げている。10Ｃ後半に位置付けられる。焼土集中箇所及び周辺の遺物分布状態は第19図を参照されたい。

遺構外出土遺物（第20・21図、図版８）

焼土集中箇所及び周辺を除き西域黒褐色土層上位から出土したものが主あり、北西域はローム

N

焼土

※遺物表示
■黒色土師器
▲土師器
△灰釉陶器(10～11C)
○陶磁器(16C～　)

W

E

焼土

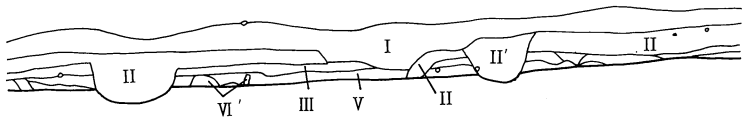
焼土・木炭分布

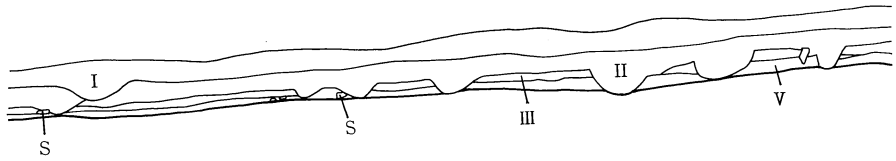
焼土集中

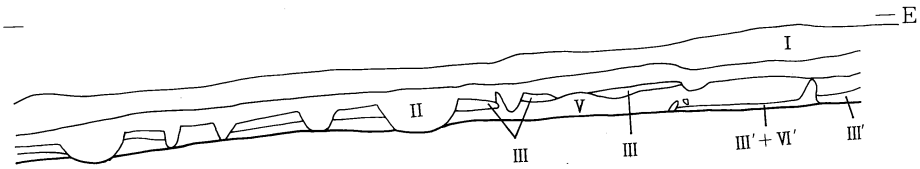
S

第16図　青木城遺跡調査C地区遺構実測図及び遺物分布図(S＝$\frac{1}{60}$)

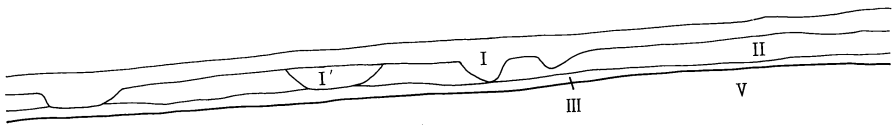
W－L＝698.500

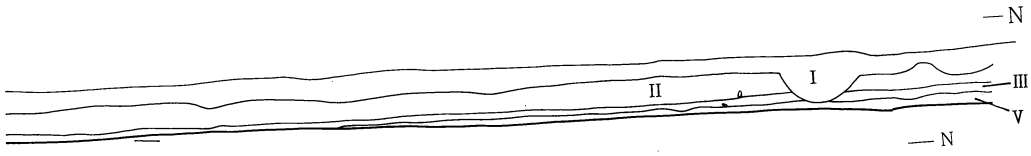




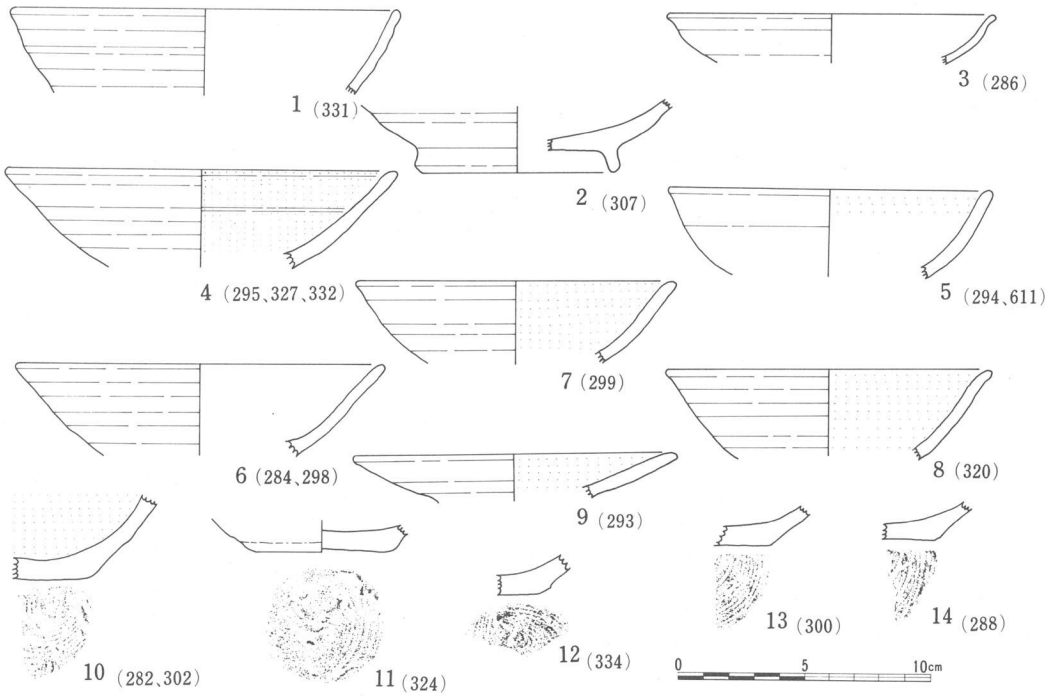


S－L＝697.800

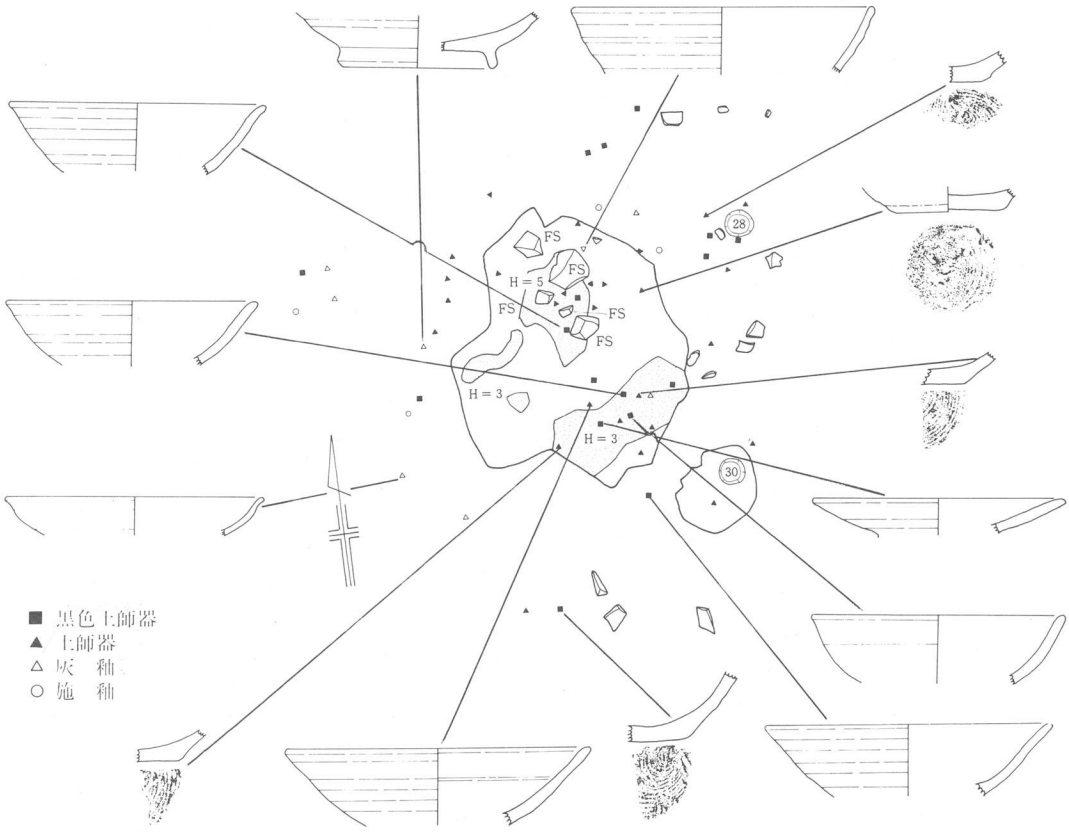




第17図　青木城遺跡Ｃ地区土層断面図（Ｓ＝$\frac{1}{60}$）



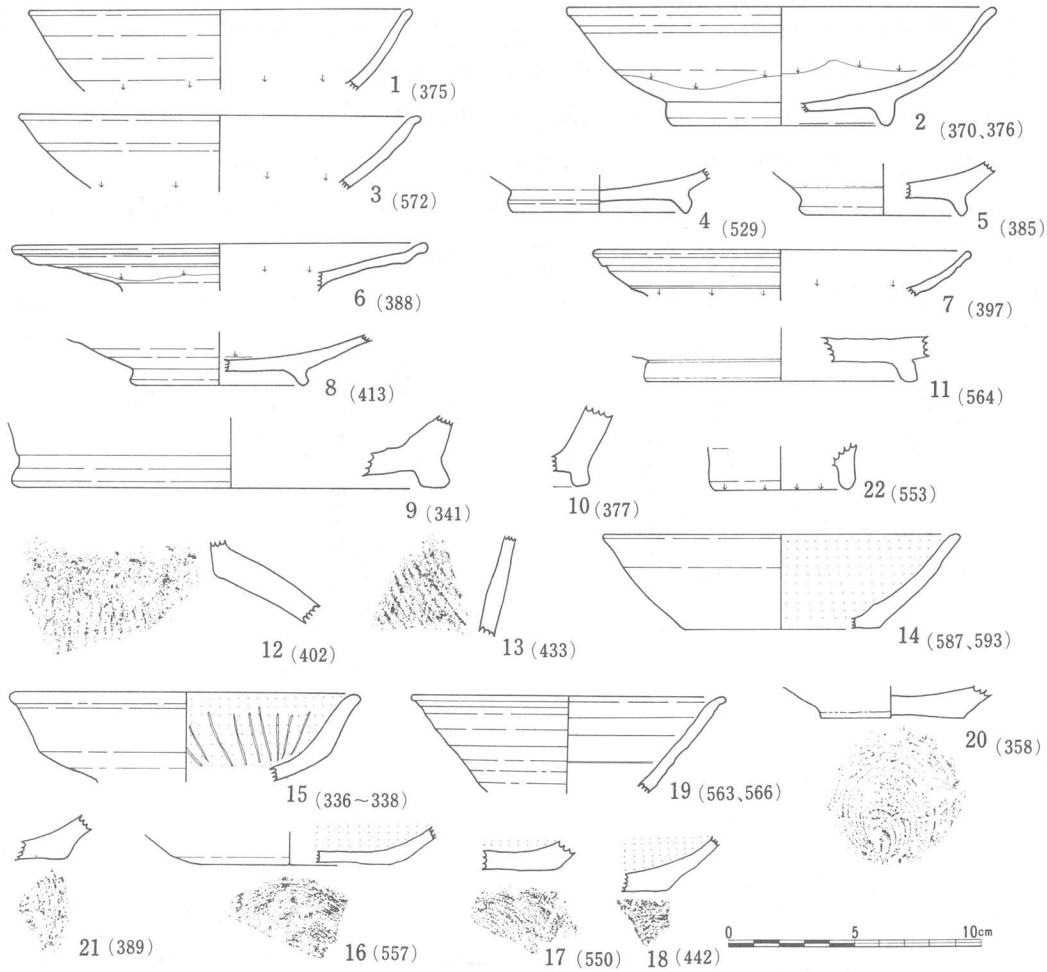
第18図　青木城Ｃ地区焼土集中箇所出土遺物実測図（Ｓ＝$\frac{1}{3}$）



第19図　青木城遺跡Ｃ地区焼土集中箇所遺物分布図

面上から出土している。

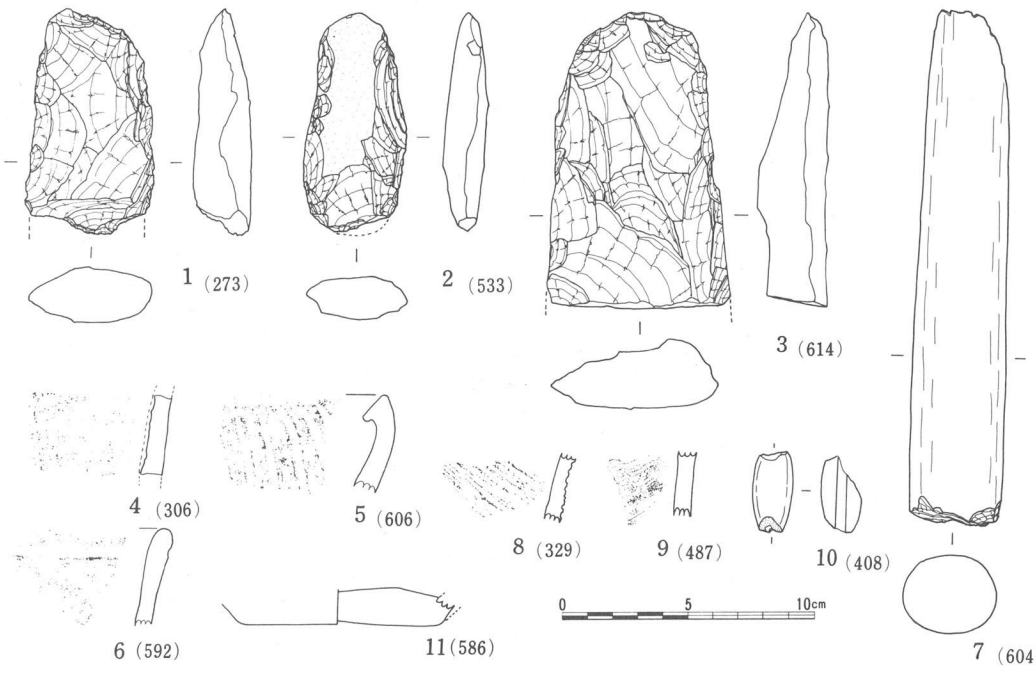
第20図１～５は灰釉陶器碗、６～８は灰釉陶器皿である。１は口唇部がやや肥厚する。２は1/6個体で、丸みを帯びた付高台をもち底部内面は厚く、口縁部にかけて細身となり口唇に至り肥厚しやや外傾する。３は口唇部が外反し胴部にかけて肥厚する。１～３は釉色が灰白色であり、漬け釉である。４・５は高台が外傾し稜をもつ。ともに破片部分に釉は見られない。６は底部上端から外反しながら立上りを見せ口唇部は外屈する。７はやや内湾気味の口縁部で、口縁部に沈線状の凹線をもつ。８は稜をもつ高台が付けられ胴部は内湾しながらくびれて外屈する口縁部をもつと考えられる。４・５・８は高台内は削り後、ナデている。碗・皿ともに内外ナデ整形である。４～８はいずれも漬け釉で胴下半部までの施釉である。９・10は瓶の底部片で、付高台をもつ。９は胎土は堅致であるが、10は夾雑物が多く空洞が生じている。灰釉陶器は総じて10Ｃ末～11Ｃ半ばに位置付けられる。11・12・13は須恵器で、11は付高台をもち瓶の底部と考えられる。12・13は甕胴部片で12は平行叩き目、13は格子目文が施され調整されている。９Ｃ半ばに位置付けら



第20図　青木城遺跡Ｃ地区遺構外出土遺物実測図（Ｓ＝$\frac{1}{3}$）

れる。14～18は黒色土師器坏である。14は1/5個体で、口唇部はやや外反する。底部はシャープに立上る。15は口縁部1/2個体で、内面には雑な暗文が付けられている。内外面ともにナデ整形であるが、外面胴部下半にはヘラ削り痕も残る。胴部は肥厚し、口唇部はやや外反する。16～18は底部片で、いずれも糸切り底である。16は丸みを帯びて立上り、17、18はややくびれて立上る。暗文はない。10C半ばに位置付けられる。19は土師器坏で直線的な立上りをし、口唇部は外反する。外面には指ナデ整形痕が顕著に残り、内面は4条の沈線状の平行線が見られる。器形から判断すると高台が付くものと考えられ、10C末に位置するものであろう。20・21は坏底部である。22は青磁碗の底部高台部分と考えられる。釉色は淡緑色で、胎土は堅致であるが夾雑物を含み灰白色をしている。釉は、高台内側半ばまでかけられている。中国南宋～明（12～14C）にかけての所産であろう。

第21図中1～3は打製石斧で、短冊形である。1・2は硬砂岩製で、1は刃部を欠き、2は若干刃部を欠く。2には自然面が残る。3は石材が片状ホルンフェルスに属すると思われる。刃部を欠く。縄文時代中期以降に位置付けられる。4はヘラナデの上に半截竹管による縦位の連続押引文が施される。胎土には雲母・長石を多く含む。縄文前期に属する。5は折り返し口縁部で棒状施文具で斜条線を施す。縄文中期後半に属する。6は口唇部に沿って平行沈線文を施す。色調は黄白色である。縄文晩期に属する。7は、石剣の胴部片である。部分的にススけている。緑泥片岩製。8は半截竹管で何度も平行沈線を施し条痕文状にまねている。縄文晩期～弥生初頭に属する。9は櫛状施文具で波状文を施す。弥生後期に属する。10は土錘で、両端を欠くが表面には指紋が残る。孔は円形で筒状の植物等に粘土を巻きつけて製作したものと考えられる。11は土師器甕底



第21図　青木城遺跡B、C地区遺構外出土遺物実測図〈No.1のみB地区〉

部で内面には指ナデ痕が残る。10・11はC地区出土の土師器の年代—10C半ばに位置付けられよう。

第V章　まとめ

昨年度の青木遺跡の発掘調査に続いて、本年度は青木城の本拠地へと下る台地中央部の調査を実施した。青木遺跡では、台地を東西に3分割する縦堀2条と、15世紀から16世紀にかけての住居跡1軒、同時代の柱穴址群、焼土・木炭集中箇所、配石遺構、礎石などの遺構が検出され、遺物では古瀬戸灰釉、天目、内耳土器等が出土したが、青木城館主と推定される牛山道賢に関する記述「天正元年牛山道賢、當郡東伊那村青木城に居し、同二年本城（富県村牛ケ城をさす）へ轉移す。」（『長野県町村誌　南信編』）、東伊那火山の高山神社棟札（天正十六年銘）等を実証するまでには至らなかった。

本調査（南信土地改良事務所受託事業分）では、青木遺跡から検出された北側の縦堀がさらに西へ延びてきたものと推定できる堀（A地区）、台地を傾斜面の変化点（段差をもつ）で南西に区画していたと考えられる横堀（A地区）、さらには蛇行しながら台地の南側に構築されてきたと考えられる縦堀（B地区）が主要な遺構として検出された。A地区の縦堀とB地区の縦堀との間隔は約40mを測る。A地区の縦堀は上幅1m25cm～1m65cm、深さ40～45cm、B地区の縦堀は上幅2m15cm～2m60cm、深さ80～90cmを測る。この2条の縦堀を数値比較すると同地形でないのに上幅は1：1.6～1.8、深さ1：2となる。また、堀り込みの断面形はA地区で舟底形、B地区で薬研形として把握でき、前者は堀底の蛇行が弱く、後者は強い。さらに堀の堆積土状態は深さとも関連するがA地区縦堀はⅦ層上にⅡ層が一次堆積し、B地区縦堀はⅦ′層上にⅣ′層の一次堆積、Ⅶ′層上にⅢ層が二次堆積している。これらのことは台地上に構築された堀と台地南端に構築された堀の差のみでなく、導水の目的に加えて、生活・生産領域等までも意識して、規則性をもって構築されたことを意味していると考えられる。なお、A地区縦堀からは内耳土器が、B地区縦堀からは灰釉陶器がそれぞれ主体を占めて出土したことは、堀の性格を別にして、自然や歴史の成せる技であるとして興味を引く。両堀の明確な時代判定は困難であるが、15～16世紀に位置付けられる。

その他の遺構としては柱穴址群、柱列址、土壙が中世期のものとして想定できるが、特に周辺からの縄文時代前期土器の伴出は当遺跡内に生活—集落跡の存在を暗に示すものである。

C地区より検出された焼土集中箇所とこれに伴う土師器・黒色土師器（10C半ば—末）、灰釉陶器（10C前半—11C初。主体は東濃産古くは猿投新しくは中津川産）等の遺物の検出は、城館址の前時代の人々の生活跡として位置付けられ、遺跡の継続性を研究する資料として貴重である。

最後に、当遺跡の陶磁器鑑定をしていただいた瀬戸市歴史民俗資料館長宮石宗弘氏、同学芸員藤澤良祐氏両名に心から感謝申し上げると同時に、既刊行の青木遺跡報告書中の記述で、「古瀬戸」を「黄瀬戸」と誤謬し御両名に御迷惑をおかけしたことをおわび致します。　（小原晃一）

出 土 遺 物 一 覧 表

※計測値の単位は、重さのみがｇで、外はcmである。

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
1	第13図	灰釉	口縁部	15~16C	2.6	14.3		7.9	色調―白灰色、胎土―砂粒をほとんど含まず粘土のキメは比較的細かい、焼成―良好
2	第6図	内耳	〃	〃		29.4			色調―暗褐色(外オコゲ)、胎土―1.5mmのあらい長石粒まじる、焼成―良好
3	第10図	土器	〃	〃					色調―褐色、胎土―雲母・長石多し、焼成―良好、文様―半截竹管による斜めの平行沈線文下位末端に横位平行沈線あり
4		内耳	胴部	〃					
5		〃	〃	〃					
6		〃	口縁部	〃					
7	第10図	土器	深鉢、胴部	縄文中期					色調―暗褐色、胎土―粗い長石・石英・こまかい雲母、焼成―良、文様―斜縄文
8	第6図	内耳	底部	15~16C	16.4	28	25	22.8	色調―暗褐色、胎土―やや粗い(２mm以下)砂粒、こまかい長石・石英・雲母含む焼成―良好
9		〃	〃	〃					
10	第6図	〃	口縁部	〃					No.８と同一個体
11		〃	頸部	〃					〃
12	第6図	〃	底部	〃				22.8	色調―暗褐色、胎土―こまかいが４mmの小砂利含む、焼成―良好
13		土器	深鉢、胴部	縄文中期					無文
14	第6図	内耳	口縁部	15~16C					No.８と同一個体、１/５個体
15	〃	〃	〃	〃					No.８と同一個体
16	〃	〃	〃	〃		34			色調―明褐色、胎土―１mm以下の長石・石英、焼成―良好
17	〃	〃	底部	〃					No.８と同一個体
18		石器	打製石斧、剝片	縄文中期					硬砂岩
19			黒曜石、剝片	〃					
20			〃	〃					
21		内耳	頸部	15~16C					
22	第6図	〃	口縁部	〃		24.4			色調―褐色、胎土―１mm以下の長石・石英(砂粒)、焼成―良好
23		〃	胴部	〃					
24		〃	底部	〃					No.17と同一個体
25		〃	胴部	〃					
26		〃	底部	〃					
27	第6図	〃	〃	〃					No.８と同一個体
28		――	――	――					
29		内耳	胴部	15~16C					
30	第10図	土器	深鉢、口縁部	縄文中期					色調―褐色、胎土―金雲母・長石多し、焼成―良好、文様―半截竹管による平行沈線を横走
31		石器	打製石斧、短冊形						硬砂岩、完形
32		内耳	底部	15~16C					
33		〃	頸部	〃					
34		石器	打製石斧、短冊形	縄文中期					胴部のみ
35	第6図	内耳	底部	15~16C					No.８と同一個体
36	〃	〃	〃	〃					〃
37		土器	深鉢、胴部	縄文					無文
38		内耳	底部	15~16C					
39		灰釉	小形鉢、口縁部	中世					
40		内耳	胴部	15~16C					
41		〃	〃	〃					
42		〃	〃	〃					
43		〃	〃	〃					
44		〃	〃	〃					
45		〃	口縁部	〃					

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
46	第6図	内耳	胴部	15~16C					No.8と同一個体
47		〃	底部	〃					
48		土器	深鉢、胴部	縄文					
49		内耳	底部	15~16C					
50		〃	〃	〃					
51			黒曜石	縄文中期					サイドスクレイパー
52		石器	敲打器、剝片						硬砂岩
53		土器	深鉢、胴部						無文
54		内耳	口縁部	15~16C					
55		〃	胴部	〃					
56			硬砂岩、剝片	縄文					
57		土器	深鉢、胴部	〃					無文
58		石器	打製石斧、短冊形	縄文中期					刃部欠く、緑泥片岩
59		〃	敲打器、剝片	〃					硬砂岩
60		〃	打製石斧、剝片	〃					〃、胴部のみ
61			剝片	〃					
62	第10図	土器	深鉢、胴部	縄文前期					色調—明褐色、胎土—やや粗い長石多し、センイ若干、焼成—良好、文様—縦位の擦痕あり、内面ナデ
63			石英	縄文					
64			黒曜石、剝片	縄文					
65		内耳	胴部	15~16C					
66		〃	頸部	〃					
67		〃	〃	〃					
68			黒曜石、剝片	縄文中期					
69		土器	深鉢、胴部	〃					竹管文
70		内耳	胴部	15~16C					
71		〃	〃	〃					
72		〃	〃	〃					
73		天目	茶碗口縁部	15C					
74		石器	打製石斧、短冊形	縄文中期					完形、砂石
75			硬砂岩、剝片	〃					
76		石器	と石破片	中世					安山岩
77		〃	敲打器	縄文中期					完形、硬砂岩一部する
78	第10図	土器	深鉢、胴部	〃 前期					色調—褐色、表面褐色、胎土—0.5~2.0の長石・石英を含む、焼成—良好、文様—条線文
79		石器	すり石	〃 中期					砂岩
80	第10図	土器	深鉢、胴部	〃 前期					色調—明褐色、胎土—石英多し、無センイ、焼成—良好、文様—条痕文
81		〃	〃	〃					
82		石器	打製石斧、短冊	〃 中期					刃部のみ、硬砂岩
83		施釉	碗、口縁部	16C					
84		石器	長石破片						
85	第10図	土器	深鉢、胴部	縄文前期					色調—褐色、表面炭火物付着、胎土—4㎜~1㎜の粗い長石含むセンイ若干、焼成—良好、文様—瓜形十条線文
86	〃	施釉	すり鉢、胴部	16C					色調—褐色、胎土—灰黄色、焼成—良好、調整—外…ヘラ、内…ナデ
87		土器	深鉢、胴部	縄文前期					条線文
88		天目	胴部	15C					
89		土器	深鉢、胴部	縄文前期					条線文
90		〃	〃	〃					沈線文
91		灰釉	瓶、胴部	11C					
92		石器	すり石	縄文中期					硬砂岩
93	第10図	土器	深鉢、胴部	縄文前期末~中期					色調—明褐色、胎土—1㎜~3.5㎜あらい長石含む、センイ若干、焼成—良好
94		常滑	甕	15C半					

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
95		施釉	碗、胴部	16C					
96		石器	緑泥片岩、剝片	縄文中期					
97			砂岩						
98			〃						
99		石器	長石 塊	中世					
100		施釉	碗、胴部	18C以降					
101			黒曜石、剝片	縄文中期					
102			輝緑岩						
103		土器	深鉢、胴部	縄文前期					
104			チャート	〃					
105	第10図	施釉	茶碗、口縁部	18C以降					
106		土器	深鉢、胴部	縄文前期					
107			黒曜石、剝片	〃 中期					
108			硬砂岩、剝片	〃					
109		施釉	碗、口縁部	15C					
110	第10図	施釉	鉄釉、鉢、底部	18C以降				8.6	釉一茶褐色、全面、胎土一灰白色、爽雑物多し、焼成一良、底部糸切り
111		石器	花崗岩						
112	第10図	土器	深鉢、胴部	縄文中期後半					色調一赤褐色、胎土一径0.2～3.0㎜の長石・石英などをやや多目に含む、焼成一良好 結節縄文
113	〃	〃	〃	縄文前期					色調一明黄褐色、胎土一径0.2～2.0㎜の長石・石英などをやや多目に含む、焼成一良 爪形十条線文
114		施釉	碗、胴部	18C					
115			頁岩	縄文					
116		内耳	胴 部	16C					
117			黒曜石	縄文中期					タッチあり
118		石器	輝緑岩						
119		土器	鉄釉皿、胴部	18C					
120			黒曜石	縄文中期					タッチあり
121		石器	すり石	〃					硬砂岩
122		土師器	甕、底部	10C					
123		土器	深鉢、胴部	縄文前期					擦痕あり
124		〃	〃	〃					指痕
125		〃	〃	〃					〃
126	第11図	石器	ピエスエスキーエ	縄文	2.8	1.5	0.8	2	黒曜石
127		石器	礫 器	〃					硬砂岩、一部する
128			花崗岩						
129		石器	すり石	縄文中期					花崗岩
130		土器	深鉢、胴部	〃					無文
131		〃	〃	縄文前期					指痕あり
132		石器	すり石	縄文中期					硬砂岩
133			黒曜石、剝片	〃					
134		天目	碗、胴部	15C					タッチあり
135			硬砂岩、剝片	縄文中期					
136		土師器	甕、胴部	10C					
137	第11図		キセルがん首						内部に木質部の小片残存。表面は全体にわたってロクショウをふく
138	第10図	土器	深鉢、胴部	縄文後期					色調一淡黄褐色、胎土一径0.2～2.0㎜の長石・石英・金雲母などをやや少な目に含む 焼成一良好、文様一沈線文
139		〃	〃	縄文前期					指痕あり
140		〃	〃	〃					〃
141		〃	〃	〃					〃
142		〃	〃	〃					〃
143		石器	すり石						輝緑岩、棒状

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
144		土器	深鉢、胴部	縄文前期					指痕あり
145			硬砂岩、剝片	縄文中期					
146			黒曜石、剝片	〃					
147		石器	石英						
148			黒曜石、剝片	縄文中期					
149		土器	深鉢、胴部	縄文前期					沈線＋指痕
150		石器	すり石	縄文中期					硬砂岩
151			黒曜石、剝片	〃					
152			すり石	〃					硬砂岩、一部たたく
153		石器	打製石斧、短冊形	〃	(6.5)	3.9	1.8	57	硬砂岩
154		〃	長石	中世					かたまり
155		〃	すり石	縄文中期					硬砂岩
156	第11図	〃	黒曜石	〃	4.3	2	0.5	5	サイドスクレイパー
157		土器	深鉢、胴部	縄文前期					指痕あり
158		内耳	口縁部	15~16C					
159		〃	底部	〃					
160		〃	胴部	〃					
161		〃	〃	〃					
162		土器	深鉢、胴部	縄文前期					擦痕あり
163		〃	〃	〃					
164		内耳	底部	15~16C					
165		〃	〃	〃					
166		〃	胴部	〃					
167	第6図	〃	底部	〃					No.8と同一
168		土器	深鉢、胴部	縄文前期					
169	第6図	内耳	底部	15~16C					No.12と同一
170		土器	深鉢	縄文					
171		内耳	胴部	15~16C					
172		石器	礫器	縄文前期	8.7	5.5	2.3	166	砂岩、
173		土器	深鉢、胴部	縄文					
174		内耳	底部	15~16C					
175		〃	胴部	〃					
176		土器	深鉢、胴部	縄文前期					指痕あり
177		内耳	胴部	15~16C					
178		〃	〃	〃					
179	第6図	〃	底部	〃					No.8と同一個体
180		〃	胴部	〃					
181		〃	〃	〃					
182			黒曜石、剝片	縄文中期					
183		土器	深鉢・胴部	縄文前期					無文
184			黒曜石・剝片	縄文中期					
185		土器	深鉢・口縁部	〃 初					蛇体貼りつけ
186		〃	深鉢・胴部	縄文前期					擦痕あり
187			黒曜石・剝片	縄文中期					
188			〃	〃					
189		土器	深鉢・口縁部	〃 初					色調―暗褐色、胎土―径0.2~1.5mmの長石・石英・金雲母などをやや少な目に含む、焼成―ややあまい、文様―隆帯＋竹管
190	第10図	石器	敲打器	〃	10.4	5.7	3.1	281	硬砂岩
191			硬砂岩・剝片	〃					
192			緑泥片岩・剝片	〃					

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
193			硬砂岩・剝片	縄文中期					
									〈以上調査A地区出土〉
194		灰釉	碗・胴部	11C					色調—黒色、胎土—径0.2～2.0㎜砂粒をごく少量含む、焼成—良好、平行叩き目
195			黒曜石・剝片	縄文中期					
196		灰釉	碗・口縁部	11C					
197		〃	碗・胴部	〃					
198	第13図	須恵器	甕・胴部	〃					
199		灰釉	碗・口縁部	〃					
200		〃	〃・胴部	〃					
201		〃	〃・底部	〃					
202		〃	〃・胴部	〃					No.197と同一個体
203		〃	〃・〃	〃					
204		施釉	〃・〃	16C末					
205		〃	〃・口縁部	〃					
206		〃	〃・胴部	〃					
207		天目	〃・〃	15C					
208		灰釉	〃・〃	11C					
209	第13図	須恵器	甕・胴部						色調—暗青灰色、胎土—径0.2～1.5㎜の砂粒をやや多目に含む、焼成—良好、平行叩き目
210		灰釉	碗・胴部	11C					
211		内耳	胴部	15～16C					
212			黒曜石・剝片	縄文中期					タッチあり
213		灰釉	瓶・胴部	11C					
214		〃	碗・口縁部	〃					
215		〃	〃	〃					
216		須恵器	甕・胴部						
217		〃	〃						格子目
218		〃	〃						平行叩き目
219		灰釉	碗・底部	11C					
220		〃	碗・胴部	〃					
221		土師器	杯・胴部						
222		灰釉	碗・胴部	11C					
223		〃	〃	〃					
224	第13図	〃	〃	〃		10.7			色調—灰白色、胎土—砂粒をほとんど含まず、粘土のキメは比較的細かい、焼成—良好
225		土師器	杯・胴部						
226		土器	深鉢・胴部	縄文前期					
227		灰釉	碗・胴部	11C					
228		土器	深鉢・胴部	縄文中期					
229		灰釉	口縁部	11C					
230		〃	〃	〃					
231		土器	深鉢・胴部	縄文					
232		〃	〃	〃					
233	第13図	灰釉	皿	11C	2.2	10.8		5.6	色調—白灰色、胎土—砂粒はほとんど含まず、粘土のキメは非常に細かい、焼成—良好、1/4個体
234		土器	深鉢・胴部	縄文					
235		土師器	杯・胴部						
236		灰釉	碗・胴部	11C					
237		土器	深鉢・胴部	縄文					
238	第13図	灰釉	皿	11C					No.1と同一個体
239		施釉	碗・胴部	18C					

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
240		土器	皿	11C					No.233と同一個体、1/4個体
241	第13図	灰釉	碗・胴部					5.6	色調—灰白色、胎土—砂粒をほとんど含まず、粘土のキメは非常に細かく良質 焼成—良好
242	———	———	———	———					
243		内耳	胴部						
244	第13図	灰釉	碗・底部	11C				6.9	色調—灰白色、胎土—砂粒をほとんど含まず、粘土のキメは比較的細かい 焼成—良好
245		〃	碗・胴部	〃					
246		〃	〃	〃					
247		〃	皿・底部						No.241と同一個体
248		〃	〃	11C					
249	第13図	〃	碗・底部	〃 初				6.9	色調—灰色、胎土—砂粒をほとんど含まず、粘土もかなりキメが細かい 焼成—良好
250		土器	深鉢・胴部	縄文					
251		灰釉	碗・底部	11C					
252	第13図	〃	碗・口縁部	〃		15.3			色調—灰白色、胎土—砂粒をほとんど含まず、粘土はキメの非常に細かく良質 焼成—良好
253		内耳	胴部	15~16C					
254			黒曜石・剝片	縄文					
255		土器	深鉢・胴部	〃					
256		〃	〃	〃					
257	———	———	———	———					
258	第14図	灰釉	皿・底部	11C初					No.241と同一個体
259			硬破岩・剝片	縄文					
260			チャート・剝片	〃					
261		土師器	坏・胴部						
262		施釉		17C以降					
263		〃	茶碗・口縁部	18C以降					
264		土器	鉄釉茶碗	〃					
265		土師器	小形甕・口縁部						
266		石器	すり石	縄文					砂岩、スス付着
267	———	———	———	———					
268	第13図	青磁	碗・口縁部	14C		13.8			色調—濃緑色、胎土—暗灰色夾雑物混じる、焼成—良好
269		灰釉	〃	18C					
270		天目	小壺・胴部	15C					
271		石器	長石、塊	中世					
272		施釉	碗・口縁部	17C以降					
273	第21図	石器	打製石斧・短冊形	縄文中期	(8.8)	5	2.1	124	硬砂岩、刃部欠く
274		施釉	碗・胴部	17C					
275	第13図	須恵器	甕・口縁部	9C		18.3			色調—暗青灰色、胎土—径0.2~3.0mmの白色砂粒を少量含む、焼成—良好
276		内耳	胴部	16C					
277			硬砂岩・剝片	縄文					
278		施釉	碗・胴部	17C以降					
									〈以上調査B地区出土〉
279		土器	鉄釉壺・胴部	18C					
280		土師器	甕・口縁部	11C					
281		〃	坏・胴部						
282	第18図	〃	内黒坏・胴部	11C					色調—褐色、胎土—径0.2~1.0mmの長石・石英・金雲母などを少量含む、焼成—良好
283		灰釉	碗・胴部	〃					
284	第18図	土師器	内黒坏・胴部	〃		14.2			色調—淡赤褐色、胎土—径0.2~1.5mmの長石・石英・金雲母などを多目に含む 焼成—良好
285		〃	坏・底部	〃					糸切り
286	第18図	灰釉	碗・口縁部	〃		12.6			色調—灰白色、胎土—砂粒をほとんど含まず、粘土は比較的キメが細かい 焼成—良好

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
287		石 器	長石・塊	中世					
288	第18図	土師器	坏・底部	11C					色調—赤黄褐色、胎土—径0.2～1.5㎜の長石・石英など暗赤褐色粒を中程度含む 焼成—良好、糸切り
289	——	——	——	——					
290		土師器	甕・胴部	11C					
291		〃	坏・口縁部	〃					
292		〃	甕・胴部	〃					
293	第18図	〃	内黒、皿・口縁部	〃		12.6			色調—褐色、胎土—径0.2～1.0㎜の長石・石英・金雲母をやや多目に含む、焼成—良好
294	第18図	〃	内黒・坏・口縁部	〃		12.6			色調—表…明赤褐色、内面…暗黄褐色、胎土—径0.2～1.5㎜の長石・石英・金雲母などをやや多目に含む、焼成—ややあまい
295	第18図	〃	内黒・坏・胴部	〃		15.2			色調—赤褐色、胎土—径0.2～1.5㎜の長石・石英・金雲母を少量含む、焼成—良好
296		施 釉	すり鉢・胴部	15C					
297		土師器	内黒、坏・胴部	11C					
298	第18図	〃	〃	〃					No.284と同一
299	第18図	〃	内黒、坏・口縁部	〃		12.5			色調—褐色、胎土—径0.2～1.5㎜の長石・石英・金雲母などをやや多目に含む 焼成—良好
300	第18図	〃	坏・底部						色調—暗赤褐色、胎土—径0.1～0.2㎜の長石・石英・金雲母などを中程度含む 焼成—良好
301		灰 釉	碗・口線部	11～12C					
302	第18図	土師器	内黒・坏・底部						No.282と同一
303		〃	甕・口縁部						
304		石 器	安山岩剝片						
305		〃	輝緑岩						やり石
306	第21図	〃	深鉢・胴部	縄文中期初					色調—褐色、胎土—径0.2～2.5㎜の長石・石英・金雲母などかなり多く繊維を少量含む 焼成—良、文様—竹管押引文
307	第18図	灰 釉	碗・底部	11C				7.4	色調—灰白色、胎土—砂粒をほとんど含まず、粘土は非常にキメが細かく良質 焼成—良好
308		土師器	小形壺						
309		土 器	深鉢・胴部	縄文中期後半					沈線文
310		灰 釉	碗・胴部	12C					
311		土師器	内黒、坏胴部						
312		灰 釉	碗・胴部	11C					
313		土師器	坏・底部						
314		〃	甕・胴部						
315		〃	坏						1/10個体、No.313と同一個体
316		〃	甕・口縁部	11C					
317	第18図	〃	内黒、坏・口縁部	〃					色調—淡褐色、胎土—径0.2～1.5㎜の長石・石英・金雲母などをかなり多く含む 焼成—良好
318		〃	甕・胴部						
319		〃	〃						No.318と同一個体
320	第18図	〃	内黒、坏・口縁部	11C					No.317と同一個体
321		〃	坏・胴部						
322		〃	坏・口縁部	11C					
323		〃	〃	〃					No.322と同一個体
324	第18図	〃	坏・底部	〃				5.1	色調—暗赤黄褐色、胎土—径0.2～1.5㎜の長石・石英・金雲母などをやや多目に含む 焼成—良好、糸切り、No.322と同一個体
325		〃	甕・胴部						
326		〃	内黒、坏・口縁部	11C					No.296と同一個体
327	第18図	〃	〃	〃					No.295と同一個体
328		〃	〃	〃					
329	第21図	土 器	壺形・胴部	縄文晩期					色調—褐色、胎土—径0.2～1.0㎜の長石・石英・金雲母などを中程度含む、焼成—良
330		土師器	甕・胴部						No.319と同一個体
331	第18図	灰 釉	碗・口縁部	11C					色調—灰緑色、胎土—砂粒をほとんど含まず、粘土のキメは比較的細かい 焼成—良好
332	〃	土師器	内黒・坏・口縁部	〃					No.295と同一
333		土 器	深鉢・胴部	縄文晩期					
334	第18図	土師器	坏・底部	11C					色調—赤褐色、胎土—径0.2～1.0㎜の長石・石英・金雲母などを少量含む 焼成—良好、糸切り、スス付着
335		〃	坏・口縁部	〃					

番号	種図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
336	第20図	土師器	内黒坏・口縁部	11C		13.2			色調一暗褐色～赤黒褐色、胎土一径0.2～1.5㎜の長石・石英・金雲母をやや多目に含む 焼成一良
337	〃		〃	〃					No.336と同一個体
338	〃	土師器	〃	〃					No.336と同一個体
339		施釉	燈明皿・口縁部	18C					
340		土師器	甕・底部						
341	第20図	土器	甕・底部	11C				16.8	色調一淡灰色、胎土一径0.2～1.0㎜の白色砂粒をごく少量含み、粘土のキメは非常に細かく良質、焼成一良好
342		〃	深鉢・胴部	縄文中期前半					竹管文
343		土師器	坏・胴部						
344		灰釉	碗・胴部	11C					
345		施釉	鉄釉、碗・胴部	18C以降					
346		土器	深鉢・口縁部	縄文中期前半					連続爪形文
347		土師器	甕・頸部						
348		〃	内黒坏・胴部						
349		〃	甕・胴部						
350		〃	坏・底部						糸切り
351		〃	内黒坏・胴部						
352		内耳	底部	15～16C					
353		土師器	甕・口縁部	11C					
354		土器	深鉢・胴部	縄文中期前半					竹管文
355		灰釉	碗・胴部	11C					
356	———	———	———	———					
357		土師器	甕・胴部						
358	第20図	〃	坏・底部	10C				5.6	色調一黄褐色、胎土一径0.2～1.5㎜の長石・石英などを中程度含む 焼成一良好、糸切り
359		〃	内黒坏・口縁部						
360		〃	坏・胴部						
361		〃	〃						No.360と同一個体
362		〃	内黒坏・胴部						
363		〃	坏・胴部						
364		〃	〃						
365		須恵器	高台付坏	10C					
366		灰釉	碗・胴部						
367		土師器	坏・胴部						
368		〃	内黒坏・底部	11C					糸切り
369		土器	小形壺・胴部						
370	第20図	灰釉	碗・底部	11C	4.7	16.7		8.5	色調一灰白色、胎土一砂粒をほとんど含まず、粘土は非常にキメが細かい 焼成一良好
371		土師器	内黒碗・底部						色調一赤褐色、胎土一径0.1～1.0㎜の長石・石英・金雲母などを少量含む、焼成一良
372		〃	坏・胴部						
373		〃	甕・胴部						
374		〃	小形壺・胴部						No.369と同一個体
375	第20図	灰釉	碗・口縁部	11C		15			色調一灰白色、胎土一砂粒をほとんど含まず、粘土は非常にキメ細かく良質 焼成一良好
376	〃	〃	〃	〃					No.370と同一個体
377	〃	〃	瓶・底部						色調一灰色、胎土一径0.2～1.0㎜の砂粒をごく少量含み、粘土は比較的キメが細かい 焼成一良
378		土師器	甕・胴部	10C末～11C					
379		〃	内黒坏・口縁部						
380		〃	小形壺・胴部						
381		〃	坏・口縁部						
382		〃	甕・頸部						
383		〃	坏・胴部						
384		〃	内黒坏・胴部						

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値				特徴
					高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	
385	第20図	灰釉	碗・底部	11C				6.2	色調—淡黄白色、胎土—径0.2～0.5mmの白色砂粒をごく少量含み、粘土は比較的細かい、焼成—他に比してややあまい
386		土師器	内黒坏・口縁部						
387		灰釉	碗・胴部						
388	第20図	〃	皿・口縁部			16.1			色調—白灰色、胎土—径0.2～1.0mmの白色砂粒をごく少量含み、粘土のキメは他の灰釉に比してやや粗い、焼成—良好
389	〃	土師器	坏・底部						色調—明黄褐色、胎土—径0.2～0.5mmの長石・石英・金雲母などを少量、暗赤褐色粒を中程度含む、糸切り
390		〃	坏・胴部						No.389と同一個体
391		磁器	坏・胴部	18C以降					
392		土師器	小形壺・胴部						
393		〃	小形壺・底部						
394		土器	壺・胴部	縄文中期後半					沈線文
395		〃	深鉢・胴部	縄文晩期					
396			黒曜石・剥片	縄文					
397	第20図	灰釉	皿・口縁部	11C		14.6			色調—灰白色、胎土—砂粒をほとんど含まず、粘土はキメが非常に細かく良質 焼成—良好
398		土師器	甕・胴部						内面灰化物付着
399		施釉	碗、口縁部	18C					
400		土師器	坏・底部						糸切り
401		〃	坏・胴部						
402	第20図	須恵器	甕・底部						色調—暗青灰色、胎土—径0.3～2.0mmの砂粒を中程度含む、焼成—良好
403		灰釉	碗・胴部						
404		土師器	坏・口縁部						
404		〃	内黒坏・口縁部						
406		〃	内黒坏・胴部						
407		〃	甕・胴部						
408	第21図		土錘	11C	3.2	1.5	1.6	7	孔径4㎜、上・下端欠く
409		灰釉	碗・胴部	11C					
410		土師器	坏・底部						糸切り
411		〃	小形甕						
412		〃	坏・胴部						
413	第20図	灰釉	皿・底部	11C				6.7	色調—白灰色、胎土—径0.3～1.0mmの白色砂粒をごく少量含み、粘土のキメは他の灰釉に比してやや粗い、焼成—良好
414		土師器	内黒坏・胴部						
415		〃	小形甕・胴部						
416		灰釉	碗・胴部	11C					
417		土師器	坏・胴部						
418		〃	小形甕・胴部						
419		灰釉	碗・口縁部						
420		土師器	小形甕・口縁部						
421		灰釉	碗・胴部						
422		土器	深鉢・胴部	縄文中期前半					隆帯＋連続爪形文
423		灰釉	碗・口縁部	11C					
424			頁岩・剥片	縄文					
425		土師器	坏・底部						
426		〃	内黒坏・底部						糸切り
427		施釉	茶碗・胴部	18C					
428		灰釉	碗・胴部	11C					
429		土師器	小形甕・胴部						
430		〃	〃						
431		〃	〃						
432		〃	〃						はけめ
433	第20図	土器	瓶・胴部						色調—青灰色、胎土—径0.3～2.0mmの砂粒少量含む、焼成—良好、格子目

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
434		灰釉	碗・口縁部						
435		土師器	坏・底部						
436		〃	小形甕・胴部						
437		灰釉	碗・底部	11C					
438			花崗岩						
439		土師器	甕・底部						
440		〃	内黒坏・胴部						
441		〃	〃 口縁部						
442	第20図	〃	〃 底部						色調一淡赤褐色、胎土一径0.2～2.0㎜の長石・石英・金雲母などをやや少目に含む 焼成一良好、糸切り
443		石器	敲打器	縄文					硬砂岩
444		土師器	甕・胴部						
445		土器	碗・口縁部	11C					
446		土師器	甕・頸部						
447		〃	甕・胴部						
448		〃	甕、頸部						
449		〃	小形甕・口縁部						
450		〃	内黒坏・口縁部						
451		天目	胴部						
452		土師器	小形甕・胴部						外面おこげ付着
453		灰釉	碗・口縁部						
454		土師器	内黒坏・胴部						
455		須恵器	瓶・胴部						外面格子目、内面青海波
456		土師器	坏・胴部						
457		〃	甕・胴部						
458		〃	〃						
459		〃	小形甕・胴部						
460		〃	〃						
461		〃	〃						縦のはけめ
462		施釉	鉄釉皿・口縁部						
463		土師器	甕・胴部						
464		〃	坏・胴部						
465		〃	小形甕・胴部						
466		〃	坏・底部						糸切り
467		灰釉	碗・胴部						
468		土師器	内黒碗・底部						糸切り
469		〃	内黒坏・底部						
470			坏・胴部						
471		土器	深鉢・胴部	縄文中期					無文
472		〃	〃	〃					〃
473		土師器	甕・胴部						
474			安山岩・砂片						
475		灰釉	碗・口縁部	11C					
476		土師器	坏・底部						糸切り
477		〃	小形・胴部						
478		石器	敲打器・破片						硬砂岩
479		土師器	坏・底部						糸切り
480		〃	小形甕・胴部						内面…爪形あり、外面…スス付着
481		灰釉	碗・胴部						
482		土師器	甕・胴部						内面はけめ

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	計測値 口径(幅)	計測値 胴径(厚さ)	計測値 底径(重さ)	特徴
483		灰 釉	碗・胴部						No.481と同一個体
484			黒曜石・剝片	縄文					
485		灰 釉	皿・口縁部						
486		土師器	甕・口縁部						
487	第21図	土 器	鉢・胴部	弥生後期					色調―褐色、胎土―径0.1～0.5mmの砂粒を少量含む 焼成―良好、文様―波状文
488		灰 釉	皿・胴部						
489		土 器	鉢・胴部	弥生後期					波状文、No.487と同一個体
490		土師器	甕・胴部						
491		灰 釉	碗・胴部						
492		土師器	甕・胴部						
493		〃	内黒坏・口縁部						
494		〃	坏・胴部						
495		〃	小形甕・胴部						
496		〃	甕・胴部	10C					
497		〃	小形甕・胴部	10C					横はけめ
498		〃	〃	〃					No.497と同一個体
499		〃	〃	〃					〃
500		〃	甕・胴部						
501		〃	〃						外縦のはけめ
502		〃	内黒坏・底部						
503		灰 釉	瓶・胴部						
504		〃	〃						No.503と同一個体
505		〃	碗・口縁部						
506		土師器	坏・底部						糸切り
507		灰 釉	碗・口縁部						
508		土師器	小形甕・胴部						No.497と同一個体
509		須恵器	胴 部						
510		灰 釉	碗・胴部						No.481と同一個体
511		土 器	鉄釉碗・胴部						
512		染 付	茶碗・底部	17C以降					
513		施 釉	皿・底部						糸切り
514		灰 釉	碗・口縁部						
515		土師器	内黒坏・胴部						
516		須恵器	坏・底部						
517		土師器	内黒坏・口縁部	10C					
518		〃	〃	〃					
519		須恵器	坏・胴部						
520		土師器	内黒坏・底部						
521		〃	甕・底部						
522		〃	坏・胴部						
523		〃	小形甕						
524		灰 釉	皿・底部						
525		土師器							
526			硬砂岩						
527		土師器	小形甕・胴部						
528		〃	内黒坏・底部						
529	第20図	灰 釉	碗・底部	11C				7	色調―灰色、胎土―砂粒をほとんど含まず、粘土は比較的キメ細かい、焼成―良好
530		土師器	甕・口縁部						
531		〃	甕・胴部	10C					

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値				特徴
					高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	
532		須恵器	坏・胴部						
533	第21図	石器	打製石斧・短冊形	縄文	(8.7)	4	1.7	74	硬砂岩
534		施釉	茶碗・口縁部						
535		須恵器	高台付坏・口縁部						
536		土師器	内黒坏・胴部						
537		〃	〃						
538		施釉	碗・胴部						
539		須恵器	坏・口縁部						
540		土師器	小形甕・胴部	10C					
541			硬砂岩・剝片						
542		施釉	鉄釉鉢・胴部	17C以降					
543		土師器	内黒坏・口縁部	9C					暗文あり
544		須恵器	坏・口縁部						
545		土師器	坏・胴部						
546		〃	内黒坏・底部						
547		〃	〃						糸切り
548		〃	坏・口縁部						
549		〃	内黒坏・底部						糸切り
550	第20図	〃	〃						色調―暗褐色、胎土―径0.2～1.0mmの長石・石英などを小量含む、焼成―良好
551		〃	小形甕・胴部						
552		〃	内黒坏・口縁部						
553	第20図	青磁	碗・底部	南宋～元				5.2	釉―淡緑色、胎土―胎土のキメが非常に細かく良質、焼成―良好
554		土師器	坏・底部						
555		〃	〃						糸切り
556		土器	深鉢・胴部	縄文後期					
557	第20図	土師器	内黒碗・底部	9～10C					色調―暗褐色、胎土―径0.2～1.0mmの長石・石英などを少量含む、焼成―良好 1/3個体、糸切り
558		〃	内黒坏・口縁部	〃					
559		〃	内黒坏・胴部	10C					
560		灰釉	坏・底部						
561		土師器	坏・胴部						
562		〃	甕・口縁部	10C					
563	第20図	〃	坏・口縁部			12.2			色調―ややすんだ赤褐色、胎土―径0.2～1.5mmの長石・石英・金雲母などをやや多目に含む、焼成―良好
564		須恵器	瓶：底部					10.6	色調―青灰色、胎土―径0.2～1.5mmの砂粒をごく少量含む、焼成―良
565		土師器	甕・胴部						
566	第20図	〃	坏・口縁部	11C					No.563と同一個体、1/8個体
567		灰釉	碗・口縁部	〃					
568		須恵器	瓶・胴部	9～10C					
569		灰釉	碗・口縁部						
570		〃	碗・胴部						
571		土師器	甕・胴部						
572	第20図	灰釉	碗・口縁部			15.7			色調―灰白色、胎土―砂粒をほとんど含まず、粘土は非常にキメが細かく良質 焼成―良好
573		土器	鉢・胴部	弥生後期					波状文
574		施釉	茶碗・口縁部						
575		土器	深鉢・胴部	縄文後期					沈線文
576		須恵器	坏・口縁部						
577		灰釉	碗・胴部						
578		土師器	小形甕・胴部						
579		〃	坏・胴部						
580		施釉	碗・胴部						

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
581		土師器	坏・胴部						
582		土器	深鉢・胴部	縄文中期					
583		土師器	小形甕・胴部						
584		土器	深鉢・胴部	縄文後期					無文
585		施釉	碗・胴部						
586	第21図	土師器	甕・底部					7.4	色調―褐色、胎土―径0.2～2.0㎜の長石・石英・金雲母などを中程度含む、焼成―良
587	第20図	〃	内黒坏・底部		3.7	13.8		7.6	色調―明赤褐色、胎土―径0.2～0.5㎜の長石・石英が少量含む、焼成―ややあまい
588		〃	坏・胴部						
589		〃	小形甕・胴部	10C					No.497と同一個体
590		〃	坏・底部						
591		灰釉	瓶・胴部						No.503と同一個体
592	第21図	土器	深鉢・口縁部	縄文晩期					色調―淡褐色、胎土―径0.2～1.0㎜の長石・石英などをやや多目に含む 焼成―良好、横走沈線
593		土師器	内黒坏・口縁部						No.587と同一個体
594		〃	小形甕・胴部						
595		土器	深鉢・胴部	縄文					
596			硬砂岩・剝片	〃					
597		土師器	小形甕・胴部						
598		〃	〃						No.497と同一個体
599		施釉	皿・底部	18C以降					
600		土師器	坏・底部						糸切り
601		〃	〃						〃
602		〃	内黒・胴部						
603		施釉	皿・底部						
604		石器	石剣・胴部のみ	縄文後期～晩期	(21)	3.7	3	412	緑泥片岩、スス付着
605		土師器	坏・底部						糸切り
606	第21図	土器	深鉢・口縁部	縄文中期後半					色調―明赤褐色、胎土―径0.2～1.5㎜の長石・石英・金雲母などかなり多く含む 焼成―良好
607			黒曜石・剝片	縄文					
608		土師器	甕・胴部						
609		灰釉	碗・口縁部						
610		土師器	甕・胴部						
611	第18図	土器	内黒坏・口縁部	9～10C					No.294と同一
612		土師器	深鉢・胴部	縄文前期					
613		〃	深鉢・頸部	弥生後期					波状文
614	第21図	石器	打製石斧・短冊形	縄文	(11.6)	7.3	2.7	294	刃部欠く、片状フォルンフェルス
615		〃	すり石・破片	〃					硬砂岩
									〈以上　調査C地区出土〉
									〈以下　調査D地区出土・青木城II参照〉
616			硬砂岩・剝片	縄文					
617			〃						
618		灰釉	香炉・口縁部						
619			黒曜石・剝片	縄文					
620		灰釉	皿・口縁部	15C					
621			黒曜石・剝片	縄文					
622		土器	深鉢・胴部	〃					
623		〃	〃	〃 中期後半					色調―赤褐色、胎土―径0.2～2.5㎜の長石・石英・金雲母などを非常に多く含む 焼成―良好、文様―隆帯＋状線文
624		〃	〃	〃 〃					色調―赤褐色、胎土―径0.2～2.5㎜の長石・石英・金雲母などを中程度含む、 焼成―良好
625		〃	〃	〃 中期					無文
626		〃	〃	〃 中期後半					色調―暗褐色、胎土―径0.2～1.5㎜の長石・石英などをやや多目に含む 焼成―良好、文様―沈線文
627		天目	胴部						

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
628		天目	碗・胴部	18C					
629		常滑	大甕・胴部	14~15C					
630			黒曜石・剥片	縄文					
631		灰釉	瓶・胴部						
632		石器	すり石	縄文					緑泥片岩
633		青磁		中国					No.1321と同一個体
634		施釉	皿	18C~		10.2			釉一暗褐色、胎土一砂粒をほとんど含まず、粘土のキメは比較的細かい 焼成一良好、1/5個体
635			黒曜石・剥片	縄文					
636		灰釉	瓶・胴部						淡緑色
637		天目	茶碗・胴部	16C半ば					
638			硬砂岩・剥片	縄文					
639		灰釉	瓶・胴部	18C~					淡緑色
640			黒曜石・石核	縄文					
641		灰釉	深皿・胴部	15C					
642		〃	皿・口縁部	15C末					
643		石器	頁岩・剥片	縄文					
644		灰釉	瓶・頸部						
645		内耳	頸部	15~16C					No.849と同一個体
646		土器	花瓶・口縁部	18C~					
647		石器	すり石	中世					砂岩
648		灰釉	碗・底部	11C					
649		土器	深鉢・胴部	縄文					
650		〃	〃	縄文中期後半					沈線文、隆帯
651		灰釉	碗・胴部	15C					
652		常滑	大甕・胴部	15C半ば					
653			黒曜石・石核	縄文					
654		内耳	胴部						
655			長石塊						
656			〃						
657		磁器	磁器現代	18C~					
658		石器	火打ち石	中世	6.7	5.7	3.8	157	石英
659			硬砂岩・剥片	縄文					
660		灰釉	瓶・胴部	15C半ば					緑色
661		〃	碗・口縁部	15C					淡緑色
662		土器	鉄釉碗・胴部						
663		内耳	口縁部						色調一暗褐色、胎土一こまかい、焼成一良好
664		石器	緑泥片岩・剥片	縄文					
665		〃	凹石	〃					輝緑花崗岩
666		灰釉	碗・胴部						淡緑色
667		〃	小形碗・口縁部						
668		〃	筒茶碗口縁部	18C					
669		石器	スクレイパー	縄文					黒曜石
670		古銭	元祐通寶	鎌倉末~室町					私鋳銭
671		土器	深鉢・胴部	縄文中期					縦の沈線文
672			硬砂岩・剥片	〃					
673			硬砂岩・剥片	縄文					
674		石器	砥石						凝灰岩
675		土器	深鉢・口縁部	縄文中期後半					結節縄文
676		内耳	胴部						

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
677		石器	打製石斧・撥形	縄文					緑泥片岩
678		内耳	胴部						
679		古銭	開元通寶	鎌倉末～室町					私鋳銭
680			黒曜石・石核	縄文					
681			〃 剝片	〃					
682		内耳	胴部	15～16C					
683		〃	口縁部	〃					
684		〃	〃	〃					No.683と同一個体
685		〃	胴部	〃					
686		〃	底部	〃				23.4	色調―暗褐色、胎土―こまかい、焼成―良好
687		〃	胴部	〃					
688		〃	底部	〃					
689		〃	〃	〃					
690		〃	胴部	〃					
691		〃	〃	〃					
692		〃	口縁部	〃					
693		〃	〃 内耳部	〃	15.7	27.1		27.4	色調―外面…暗褐色、内面…淡褐色、胎土―径0.5㎜前後の砂粒をやや多目に含む 焼成―良好
694		〃	胴部	〃					
695		〃	〃	〃					
696		〃	口縁部内耳部	〃					No.683と同一個体
697		〃	底部	〃					
698		〃	口縁部	〃					
699		〃	胴部	〃					
700		灰釉	水滴	14C	3.6	1.7		3.3	釉―暗緑灰色、胎土―砂粒をほとんど含まず、粘土のキメも細かく良質 焼成―良好、1/2個体
701		常滑	大甕、口縁部	14～15C					色調―黒灰色、胎土―径0.3～3.0㎜の砂粒を少量含み、粘土のキメはかなり細かい 焼成―良好
702		〃	大甕・胴部						
703		天目	茶碗	15C半ば	5.5	12.2		4.7	釉―黒褐色を基調に褐色斑が点状に散る、胎土―砂粒をほとんど含まず、粘土のキメも非常に細かく良質、焼成―良好、1/5個体
704			長石塊						
705			〃						
706		土器	深鉢・口縁部	縄文中期後半					沈線文
707		〃	〃 突起部	〃					〃
708		〃	〃 胴部	〃					条痕文
709		土師器	坏・胴部						
710		灰釉	碗、底部	18C～				3.2	色調―やや褐色味を帯びた白灰色、胎土―砂粒をほとんど含まず、粘土のキメはややあらい、焼成―良好
711		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					隆帯、沈線文
712		〃	白磁釉碗・胴部						
713			焼石						砂岩
714		内耳	胴部						
715		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					隆帯懸垂文
716		〃	〃	〃					隆帯懸垂文＋斜状文
717		鉄釉	筒茶碗口縁部						
718		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					沈線・綾杉文
719		〃	壺形・頸部	〃					色調―淡褐色、胎土―径0.2～3.0㎜の長石・石英・金雲母などがかなり多く含む 焼成―良好、円形刺突＋わらび平文
720			頁岩						
721		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					無文、スス付着
722		灰釉	碗・胴部						
723		常滑	大甕・胴部	14～15C					
724		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					唐草文
725		石器	石棒		19.2	12	11.2		

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
726		灰釉	碗・胴部						
727		灰釉	筒茶碗	18C～					灰白色釉
728		土器	深鉢、胴部	縄文中期後半					隆帯、縄文
729		石器	ピエスエスキーユ	〃	2.6	1.4	1	3	黒曜石
730		灰釉	おろし皿					15.7	釉一緑灰色、胎土一砂粒をほとんど含まず、粘土のキメは非常に細かく良質 焼成一良好
731			黒曜石	縄文					タッチあり
732		灰釉	深皿・口縁部	15C	8	37.5		12	色調一やや黄色味を帯びた白色、胎土一砂粒をほとんど含まず、粘土のキメは非常に細かく良質、焼成一良好、折縁
733		〃	〃	〃					No.732と同一個体
734			硬砂岩・剥片	縄文					
735		灰釉	おろし皿・口縁部						No.730と同一個体、1 /5個体
736		土器	深鉢、胴部	縄文中期後半					隆帯、刺突文
737		須恵器	坏蓋	9～10C					
738		灰釉	碗・口縁部						淡緑色
739		灰釉	無釉甕・胴部						
740		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					無節・斜縄文
741		〃	〃	〃					隆帯・無節斜縄文
742		〃	〃	〃					隆帯文
743		〃	深鉢・底部	〃					無文
744		灰釉	碗・胴部					5.4	色調一灰色～黄灰色、胎土一砂粒をほとんど含まず、粘土のキメも比較的細かい 焼成一良好
745		土器	無釉甕・胴部						No.739と同一個体
746		〃	〃						〃
747		〃	深鉢・口縁部	縄文中期後半					色調一明赤褐色、胎土一径0.2～2.0㎜の長石・石英・金雲母などをかなり多く含む 焼成一良好、隆帯・斜縄文
748			黒曜石・剥片	〃					タッチあり
749			黒曜石・剥片	〃					〃
750		灰釉	深皿・口縁部	15C前半					No.732と同一個体、1/10個体
751		〃	〃						〃
752		鉄釉	壺・口縁部	18C～		6.1			色調一黒色、胎土一砂粒をほとんど含まず、粘土のキメは比較的細かい、焼成一良好
753		灰釉	小形坏・底部	18C～				2.6	釉一淡緑青灰色、胎土一砂粒をほとんど含まず、粘土のキメは非常に細かく良質 焼成一良好
754		〃	深皿・胴部	15C					No.732と同一個体
755		〃	〃	〃					〃
756			黒曜石・剥片	縄文					
757		鉄製品	鉄片						
758		灰釉	深皿・胴部	15C					No.732と同一個体
759		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					隆帯沈線文
760		〃	〃						無文
761		灰釉	碗・胴部						
762		須恵器	坏蓋						No.737と同一個体
763		土器	深鉢・胴部	縄文中期					隆帯十条線
764		鉄製品	板状	中世					
765			長石塊						
766		内耳	口縁部						色調一明褐色、胎土一1㎜前後の長石・石英含む、焼成一良好
767		施釉	瓶子・胴部						
768			長石塊						
769		鉄釉	灯明皿口縁部						
770		常滑	甕・胴部	14～15C					
771			長石塊						
772		土器	深鉢・胴部	縄文中期					無文
773		灰釉	壺・肩部						
774		天目	茶碗・底部	15C半ば				3.5	釉一黒色～暗褐色、胎土一砂粒をほとんど含まず、粘土のキメは非常に細かく良質 焼成一良好、ヘラ切り

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
775		灰釉	茶碗胴底部	15C				4.4	釉一黄緑色、胎土一砂粒をほとんど含まず、粘土のキメもかなり細かく良質 焼成一良質、1/3個体、糸切り＋ヘラ切り、ススける
776		灰釉	花瓶・胴部	17C					
777			黒曜石・剥片	縄文					
778		青磁	碗・口縁部						蓮華文
779		内耳	口縁部	15~16C					
780		石器	長石塊						
781			硬砂岩・剥片						
782		灰釉	平碗・口縁部						
783			黒曜石・剥片						
784		灰釉	碗・口縁部	15C		18.2			色調一やや黄味を帯びた灰白色、胎土一砂粒をほとんど含まず、粘土のキメは比較的細かい、焼成一良好
785		鉄釉	小壺・胴部						
786		灰釉	皿・口縁部						
787		〃	〃						No.786と同一個体
788			黒曜石・剥片	縄文					タッチあり
789		灰釉	皿・口縁部						No.786と同一個体
790		鉄釉	瓶子・胴部					9.6	色調一外面…暗灰白色、内面…淡褐色、胎土一砂粒をほとんど含まず、粘土のキメはかなり細かい、焼成一ややあまい
791		石器	長石塊						
792		内耳	胴部	15~16C					
793		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					色調一赤褐色、胎土一径0.2~3.0mmの長石・石英などを少なめに含む、焼成一良 隆帯＋斜縄文
794		〃	〃	〃					沈線による楕円文
795		石器	敲打器	縄文					棒状、硬砂岩
796			硬砂岩・剥片	〃					
797		内耳	内耳部破片	15~16C					
798			硬砂岩・剥片	縄文					
799		石器	打製石斧、短冊形	〃					頭部・刃部少し欠く
800		古銭	天禧通寶	宋					眞宋、天禧年間（997~1022）
801		内耳	胴部	15~16C					
802		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					色調一淡赤褐色、胎土一径0.2~2.0mmの長石・石英などをかなり多く含む 焼成一良好、縦の綾節縄文
803		〃	〃	縄文					
804		〃	深鉢・底部	〃					
805			黒曜石・剥片	〃					
806		石器	敲打器						一部する、貢岩
807		土器	深鉢・胴部	縄文中期					斜縄文
808		灰釉	皿・胴部						貫入、灰白色釉
809		土器	深鉢・胴部	縄文後半					沈線文、おこげ付着
810			黒曜石・剥片	〃					
811			長石塊						
812			輝緑花崗岩						
813		鉄釉	筒茶碗口縁部	18C~					
814		須恵器	甕・胴部						美　農
815		土器	深鉢・胴部	縄文中期					隆帯＋条線
816		須恵器	坏蓋・破片						No.737と同一個体
817		灰釉	皿・底部						糸切り
818		土器	深鉢・胴部	縄文					無　文
819		〃	深鉢・胴部	縄文中期					色調一淡褐色、胎土一径0.3~3.0mmの長石・石英などをやや多目に含む 焼成一良、沈線区画文＋斜縄文
820			黒曜石・剥片	縄文					タッチあり
821		内耳	胴部	15~16C					
822		土器	深鉢・胴部	縄文中期					無　文
823			硬砂岩・剥片	縄文					

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値				特徴
					高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	
824			黒曜石・剥片	縄文中期					タッチあり
825		灰釉	皿・口縁部						
826		石器	すり石						輝緑花崗岩
827		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					唐草文
828			黒曜石・剥片	〃					
829		内耳	胴部	15~16C					
830		石器	敲打器						一部する、緑泥片岩
831		〃	長石塊						
832		常滑	大甕・胴部	14~15C					
833			長石塊						
834		内耳	胴部	15~16C					
835			長石塊						
836		内耳	底部	15~16C					No.849と同一個体
837		石器	と石						安山岩、1/2個体
838			花崗岩						
839		常滑	大甕・胴部	14~15C					
840		〃	〃	〃					
841		古銭	天聖元寶	鎌倉末~室町					私鋳銭
842			黒曜石・石核	縄文					
843			長石塊						
844		〃	打製石斧・破片	縄文					緑泥片岩
845		内耳	胴部	15~16C					
846		鉄釉	碗・胴部						
847		内耳	胴部	15~16C					
848			鉄滓						
849		内耳	胴部	15~16C	15.4	32.1		24.8	色調一外面…淡黄褐色~暗褐色、内面…淡褐色~褐色、胎土一径0.3~1.5㎜の砂粒を中程度含む、焼成一良好
850		土器	深鉢・頸部	縄文					横走沈線文
851		〃	深鉢・口縁部	縄文中期					色調一赤黄褐色、胎土一径0.2~2.5㎜の長石・石英・金雲母などを非常に多く含む焼成一良好、口唇部に縦の沈線
852		〃	深鉢・胴部	〃					横走沈線+縦の条線
853		内耳	口縁部	15~16C					
854			硬砂岩・原石	縄文					
855		灰釉	四耳壺・胴部	15C					No.1341と同一個体？
856		〃	碗・胴部						
857		石器	磨製石斧	縄文	6.1	2.8	0.8	30	定角形、貢岩
858			長石塊						
859		内耳	口縁部	15~16C					No.849と同一個体
860		〃	〃	〃					〃
861		〃	〃	〃					
862		石器	すり石	縄文					砂岩
863		内耳	胴部	15~16C					
864			貢岩・剥片						
865		土器	深鉢・胴部	縄文					
866			長石塊						
867		石器	と石						安山岩
868			溶解物						
869		常滑	大甕・胴部	14~15C					
870		灰釉	花瓶・胴部						No.776と同一個体
871		〃	皿・口縁部						すすける
872		内耳	胴部	15~16C					

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	
873		陶器	器形不明	18C～					
874		石器	緑泥片岩・剥片						
875		土器	無頸甕・口縁部	縄文中期後半					二重口縁、隆帯貼り付け、刻み目
876		石器	黒曜石・剥片	〃					タッチあり
877		〃	石灰岩						
878		内耳	胴部	15～16C					
879		石器	有脚石鏃黒曜石	縄文	(1.7)	1.3	0.3		
880		灰釉	壺・胴部						
881		石器	長石塊						
882		内耳	胴部	15～16C					
883		〃	〃	〃					No.882と同一個体
884		石器	長石剥片						
885		内耳	胴部	15～16C					
886		〃	底部	〃					
887		〃	〃	〃					No.703と同一個体
888		石器	すり石						硬砂岩
889		〃	長石塊						
890		〃	〃						
891		内耳	底部	15～16C					
892		石器	輝緑花崗岩						
893		内耳	胴部	15～16C					
894		古銭							腐蝕が著しい
895	——	——	——————	——————					
896		内耳	内耳部	15～16C					
897		灰釉	四耳壺・胴部	15C半ば					No.1341と同一個体？
898		内耳	胴部						
899		天目	口縁部						
900		土器	深鉢・胴部	縄文中期					隆帯文
901		〃	〃	〃					無文
902		内耳	胴部						
903		石器	石英剥片						
904		〃	〃						
905		石器	石英火打石		5.4	3.6	2.7	64	石英
906		灰釉	碗・口縁部	18C					灰白色釉
907		内耳	底部						
908		灰釉	皿・底部	11C					
909		内耳	底部						
910		石器	打製石斧・短冊形	縄文	11.4	3.7	1.8	116	完形、雲母片岩
911			黒曜石・剥片						
912		石器	石英火打石						
913			黒曜石・石核						
914		石器	粘板岩						
915			スクレイパー		3.1	1.5	0.3	1	黒曜石
916		石器	磨製石斧・定角形	縄文	9.6	4.8	2.1	208	完形、緑泥片岩
917		灰釉	碗・底部	15C					No.744と同一個体
918		石器	長石剥片						
919			鉄滓						
920		石器	縦形石匙						硬砂岩
921		常滑	大甕・胴部片	14～15C					

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
922		石器	と石		8.1	2.6	2	79	安山岩、No.837と同一個体
923		灰釉	碗・胴部	17C～					
924		青磁	〃	中国・北宋					釉一やや暗い緑灰色、胎土一堅致暗灰色、焼成一良好、文様一唐草文？耀州窯？
925		常滑	大甕・胴部	14～15C					
926		灰釉	皿・底部	11C～				8.3	色調一灰白色、胎土一砂粒をほとんど含まず、粘土のキメは非常に細かく良質 焼成一良
927		内耳	胴底部						No.849と同一個体
928		常滑	大甕・胴部	14～15C		36.4			No.701と同一個体
929		〃	〃	〃					
930			硬砂岩・剝片						
931		灰釉	碗・胴部						No.744、917と同一個体
932		土器	深鉢・胴部	縄文中期初					縦平行沈線
933		〃	砂岩・剝片						
934		灰釉	皿・口縁部						暗灰色釉
935			長石塊						
936									
937		土器	深鉢・胴部	縄文早期					色調一淡褐色、胎土一径0.2～1.0mmの長石・石英をやや少な目に繊維を中程度含む 焼成一良、文様一内外条痕文
938									
939		灰釉	碗・口縁部	15C		11.7			色調一灰白色、胎土一砂粒をほとんど含まず、粘土のキメは非常に細かく良質 焼成一良好
940		鉄釉	壺・胴部						No.972と同一個体
941			石英剝片						
942		石器	黒曜石・石核	縄文					
943			チャート・剝片	〃					
944		内耳	胴部	15～16C					No.849と同一個体
945		〃	口縁部						
946		常滑	大甕・口縁部	14～15C					No.701と同一個体
947		内耳	胴部						
948		〃	〃						No.849と同一個体
949		石器	縦形石匙	縄文					緑泥片岩
950		灰釉	墨書皿	18C～	2.5	9.7		3	釉一白色、胎土一砂粒をほとんど含まず、粘土のキメは非常に細かく良質 焼成一良好
951		内耳	胴部						
952		土器	深鉢・胴部	縄文中期					隆帯＋斜縄文
953		内耳	胴部						
954		〃	〃						No.703と同一個体
955		天目	深鉢・胴部	縄文中期末					粗大な沈線入組文
956		石器	すり石	〃					
957		〃	打製石斧・短冊形	〃	10.8	4.6	1.4	98	完形、緑泥片岩
958		〃	〃						胴部のみ、硬砂岩
959		土器	深鉢・胴部	縄文後期					沈線文
960		内耳	胴部						
961		常滑	大甕・胴部	14～15C					
962		灰釉	小形碗・口縁部						灰白色釉
963		内耳	底部						
964		石器	打製石斧・撥形	縄文					貢岩、刃部欠く
965		〃	すり石礫岩	〃					
966		土器	深鉢・胴部	縄文前期					センイ含む
967		石器	黒曜石・剝片	縄文					
968		灰釉	碗・胴部						No.917と同一個体
969		石器	縦形石匙	縄文					ほぼ完形、貢岩
970			黒曜石・剝片	〃					

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
971		土器	深鉢・胴部	縄文早期～前期					斜め格子目文
972		鉄釉	壺・胴部	15C 半ば					No.940と同一個体
973		土器	深鉢・胴部	縄文					斜縄文
974		内耳	胴底部	15～16C					No.849と同一個体
975			黒曜石・剥片	縄文					タッチあり
976		常滑	大甕・胴部	14～15C					
977		石器	すり石	縄文					粘板岩
978			石英塊						
979			〃						
980			〃						
981			〃						
982		土器	釣手土器釣手部	縄文中期後半					刺突文＋綾杉文
983			石英塊						
984			緑泥片岩・剥片						
985			石英塊						
986			〃						
987			〃						
988		鉄製品							
989		灰釉	深皿・胴部						
990			鉄滓						
991		内耳	胴部						
992			長石塊						
993			硬砂岩・剥片						
994		青磁	碗・胴部	南宋～元					
995		石器	石包丁	縄文					硬砂岩
996		土器	深鉢・胴部	縄文後期					無文
997		灰釉	深皿・口縁部	15C前半					No.750と同一個体
998		須恵器	坏・底部						ヘラ切り
999		土器	深鉢・胴部	縄文中期					無文
1000		石器	長石塊						火打石原石
1001		〃	打製石斧・短冊形	縄文					完形、貢岩
1002		陶器	急須	18C～					注口部片
1003		石器	深鉢・胴部	縄文中期後半					沈線文
1004			長石塊						
1005		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					無文
1006			硬砂岩・剥片	縄文					
1007			黒曜石・剥片	〃					
1008		石器	打製石斧・撥形	〃					刃部のみ、硬砂岩
1009		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					唐草文
1010		〃	深鉢・把手部	〃					色調—淡黄褐色、胎土—径0.2～1.5mmの長石・石英・金雲母などをかなり多く含む 焼成—良
1011		〃	深鉢・胴部	〃					
1012		〃	〃	〃					
1013		〃	〃	〃					
1014		〃	〃	〃					
1015		〃	〃	〃					唐草文
1016		〃	〃	〃					色調—淡赤褐色～暗褐色、胎土—径0.2～1.5mmの長石・石英・金雲母などをやや多目に含む、焼成—良好、文様—唐草文
1017		〃	〃	〃					唐草文、No.1016と同一個体
1018		〃	〃	〃					〃
1019		〃	〃	〃					〃

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
1020		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					唐草文
1021			黒曜石	縄文	4.2	1.3	0.4	2	タッチあり
1022		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					唐草文
1023		〃	〃	〃					〃
1024		〃	〃	〃					〃
1025		〃	〃	〃					〃
1026		〃	〃	〃					〃
1027		〃	〃	〃					色調—赤褐色、胎土—径0.3～3.0mmの長石・石英などを少量含む、焼成—良好 文様—唐草文
1028		〃	〃	〃					唐草文
1029		〃	〃	〃					〃
1030		〃	〃	〃					色調—淡赤褐色、胎土—径0.2～1.5mmの長石・石英・金雲母などをやや少な目に含む 焼成—良好、文様—唐草文
1031		〃	〃	〃					色調—淡褐色、胎土—径0.2～1.5mmの長石・石英・金雲母をかなり多く含む 焼成—良好、文様—唐草文
1032		灰釉	瓶・胴部	15C					
1033		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					隆帯＋斜縄文
1034		灰釉	碗・胴底部						
1035		〃	碗・胴部	18C～					
1036		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					色調—褐色、胎土—３mm前後の砂利含む、長石・石英・雲母こまかい、焼成—良好
1037		〃	〃	〃					唐草文
1038		〃	〃	〃					〃
1039		〃	〃	〃					〃
1040		〃	〃	〃					〃
1041		〃	〃	〃					〃
1042		鉄釉	合子・胴部						淡緑色釉
1043		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					
1044		石器	打製石斧・未製品	〃					硬砂岩
1045			粘土焼成塊						
1046		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					唐草文
1047		〃	〃	〃					〃
1048		〃	〃	〃					〃
1049		〃	〃	〃					〃　No.1036と同一個体
1050		〃	〃	〃					〃
1051			黒曜石・剥片	縄文					
1052		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					唐草文
1053		〃	〃	〃					〃　No.1036と同一個体
1054		〃	〃	〃					〃
1055		〃	〃	〃					〃
1056		〃	台付部	〃					色調—淡赤褐色、胎土—径0.2～2.0mmの砂粒を中程度含む、焼成—良好 文様—唐草文
1057		〃	深鉢・胴部	〃					
1058		〃	〃	〃					No.1016と同一個体
1059		〃	〃	〃					〃
1060		石器	打製石斧・短冊形	縄文	10.1	4.7	2.1	138	完形、砂岩
1061		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					唐草文、砂岩
1062			すずり破片	中世					
1063		石器	黒曜石・石核	縄文	3	3.2	1.9	16	
1064		常滑	大甕・底部	14～15C					
1065		灰釉	筒茶碗・口縁部	18C～					
1066		土器	深鉢・口縁部	縄文中期後半					色調—赤褐色、胎土—0.2～2.0mmの長石・石英・金雲母などをやや多目に含む 焼成—ややあまい、文様—沈線文
1067		石器	黒曜石・剥片	縄文					タッチあり
1068		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					唐草文

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
1069		土器	無頸甕二重口縁部	縄文中期後半					無文、ススける
1070		〃	深鉢・胴部	縄文中期					〃
1071		灰釉	皿・口縁部	18C～					
1072			輝緑花崗岩						
1073		天目	口縁部	15C					
1074			輝緑花崗岩						ススける
1075			黒曜石・剝片	縄文					
1076		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					色調―褐色、胎土―径0.2～3.0mmの長石・石英などをやや少な目に含む 焼成―良好、文様―結節縄文＋列点文
1077		〃	〃	縄文中期					色調―赤褐色、胎土―径0.2～2.5mmの長石・石英・金雲母などをやや多目に含む 焼成―良好、文様―蛇行隆帯文
1078		〃	〃	縄文中期後半					綾杉文
1079		〃	〃	〃					結節縄文№1076と同一個体
1080		〃	〃	〃					無文
1081			黒曜石・剝片	縄文					
1082		土器	深鉢・胴部	縄文中期					無文
1083		〃	〃	〃					〃
1084		〃	〃	縄文中期後半					隆帯＋列点文
1085		鉄釉	合子・胴部						
1086		灰釉	筒茶碗・口縁部	18C～					
1087		〃	筒茶碗・胴部	〃					
1088		土器	深鉢・胴部	縄文中期					隆帯文
1089		石器	打製石斧・未製品	縄文					硬砂岩
1090		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					隆帯文
1091		〃	〃	〃					磨消縄文＋沈線
1092		〃	釣手土器・口縁部	〃					沈線文＋列点文
1093		石器	打製石斧・短冊形	縄文	15.8	6.6	3.2	340	完形、砂岩
1094		鉄釉	広口壺・頸部	15C 半ば					
1095		〃	無釉壺・底部						ヘラ切り
1096		〃	壺・胴部						
1097		土器	深鉢・胴部	縄文中期					隆帯文
1098		〃	釣手土器・釣平部	縄文中期後半					列点文＋綾杉文、№982と同一個体
1099		〃	台付部	〃					
1000			輝緑花崗岩						
1101		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					色調―淡黄褐色、胎土―径0.2～0.5mmの長石・石英などを少量含む 焼成―良好、文様―唐草文
1102		〃	深鉢・口縁部	〃					刺突文
1103			瓦・破片	18C～					
1104		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					結節縄文
1105			キセルすい口						
1106		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					唐草文
1107		〃	〃	〃					色調―褐色、胎土―径0.2～3.0mmの長石・石英・金雲母などをやや少な目に含む 焼成―良好、文様―結節縄文
1108		〃	〃	〃					唐草文
1109		石器	貢岩・剝片	縄文					
1110		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					色調―淡黄褐色、胎土―径0.2～2.0mmの長石・石英・金雲母などをやや多目に含む 焼成―良好、隆帯＋斜縄文
1111			硬砂岩・剝片	縄文					
1112		灰釉	碗						
1113		鉄釉	碗・胴部	18C～					
1114		灰釉	皿・胴部						淡緑色釉
1115			黒曜石・剝片	縄文					
1116		灰釉	碗・口縁部	15C 前半	5.9	15.2		4.7	釉―暗緑黄色、胎土―砂粒をほとんど含まず、粘土のキメは非常に細かく良質 焼成―良好、№1511と同一個体
1117		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					唐草文

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
1118			長石塊						
1119		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					唐草文
1120		石器	打製石斧・短冊形	縄文					硬砂岩
1121		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					結節縄文
1122		〃	〃	〃					色調―赤褐色、胎土―径0.2～3.0㎜の砂粒を非常に多く含む、焼成―良 文様―唐草文
1123		〃	釣手土器・口縁部	〃					釣手部
1124		内耳	胴部						
1125		鉄釉	碗・口縁部	15C半ば		14.6			釉―褐色、胎土―砂粒をほとんど含まず粘土のキメは比較的細かい 焼成―良好、1/8個体
1126		〃	深鉢・胴部	縄文中期					斜縄文
1127		〃	〃	〃					
1128		常滑	大甕・胴部	14～15C					
1129		鉄釉	碗・口縁部						
1130			黒曜石・剥片	縄文					
1131		灰釉	碗・胴部						緑色釉
1132		土器	深鉢・胴部	縄文中期					沈線文
1133		〃	〃	〃					斜縄文
1134		〃	〃	〃					色調―淡褐色、胎土―径0.2～2.0㎜の長石・石英などをかなり多く含む 焼成―良、文様―沈線＋斜縄文
1135		陶器	無釉甕・胴部						
1136		天目	碗・口縁部						
1137		土器	深鉢・胴部	縄文中期					隆帯文
1138		〃	〃	〃					
1139		〃	〃	〃 後半					結節縄文
1140		施釉	碗・胴部						灰白色釉
1141		土器	深鉢・胴部	縄文					無　文
1142		青磁	碗・胴部	南宋～元					刻文・蓮華文
1143		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					色調―淡褐色、胎土―径0.2～2.0㎜の長石・石英・金雲母などを非常に多く含む 焼成―良好、文様―隆帯文＋結節縄文
1144		〃	〃	〃					唐草文
1145		鉄釉	碗・胴部						
1146		土器	釣手土器	縄文中期後半					釣手部
1147		〃	〃	〃					〃 、剥落
1148		〃	深鉢・胴部	〃					条線文＋隆帯
1149		〃	〃	縄文中期					無　文
1150			黒曜石・剥片	〃					
1151		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					条線文＋隆帯
1152		〃	〃	〃					結節縄文
1153		灰釉	碗・胴部						淡黄色釉
1154		土器	深鉢・胴部	縄文中期					隆帯文
1155		常滑	大甕・胴部	14～15C					
1156		石器	打製石斧・短冊形	縄文	(10.8)	4.3	1.7	125	緑泥片岩
1157		土器	深鉢・胴部	縄文中期					沈線＋斜縄文
1158		〃	〃	縄文					無　文
1159		石器	打製石斧・短冊形	〃	9.5	4.7	1.8	110	完形、礫岩
1160		〃	緑泥片岩・剥片	〃					
1161		土器	深鉢・口縁部	縄文中期					無　文
1162		石器	砂岩・剥片						
1163		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					唐草文
1164		〃	〃	〃					色調―黄褐色、胎土―径0.2～2.0㎜の長石・石英などをやや少な目に含む 焼成―良好、文様―結節縄文
1165		〃	〃	〃					縦の沈線文
1166		鉄釉	碗・胴部	18C～					

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
1167			黒曜石・剥片	縄文					タッチあり
1168			〃	〃					〃
1169		土器	深鉢・胴部	〃					無文
1170		〃	〃	〃					唐草文
1171		石器	打製石斧・短冊形	〃					刃部のみ、硬砂岩
1172		土器	深鉢・胴部	縄文中期					沈線文
1173		〃	〃	縄文中期後半					隆帯＋斜縄文
1174		〃	〃	〃					結節縄文
1175			黒曜石・剥片	縄文					
1176		土器	深鉢・胴部	縄文中期					隆帯
1177		〃	〃	〃					無文
1178		〃	〃	〃					隆帯文
1179		〃	〃	〃					無文
1180			黒曜石・剥片	縄文					タッチあり
1181			頁岩・剥片	〃					
1182		土器	深鉢・胴部	縄文中期					隆帯文
1183		〃	〃	〃					平行沈線文
1184		〃	〃	〃					無文
1185		〃	〃	〃					沈線文
1186		〃	〃	〃					無文
1187		灰釉	筒茶碗・口縁部						灰白色釉
1188		土器	深鉢・胴部	縄文中期					隆帯文
1189		灰釉	瓶・胴部						ただれ
1190		土器	釣手土器	縄文中期					刺突文
1191		〃	深鉢・胴部	縄文					無文
1192		灰釉	筒茶碗・口縁部						灰白色釉
1193		土器	深鉢・胴部	縄文中期					隆帯文
1194		〃	〃	縄文					無文
1195		〃	〃	〃					
1196		鉄釉	すり鉢・胴部	18C～					
1197		灰釉	筒茶碗・口縁部						灰白色釉
1198		灰釉	大甕・胴部						
1199		鉄釉	皿・底部					4.6	色調―やや黄味を帯びた灰白色、胎土―砂粒をほとんど含まず、粘土のキメは比較的細かい、焼成―良好、糸切り底
1200			砂岩						
1201		土器	深鉢・胴部	縄文					無文
1202		〃	〃	〃					〃
1203		石器	黒曜石・剥片	〃					
1204		灰釉	碗・底部	15C半ば				5.1	色調―灰白色、胎土―砂粒をほとんど含まず、粘土のキメも非常に細かく良質焼成―良好、淡黄色釉
1205		土器	深鉢・口縁部	縄文中期					
1206		〃	〃	〃					No.1205と同一個体
1207		鉄釉	碗・胴部						
1208		土器	深鉢・口縁部	縄文中期					隆帯＋刺突文、No.1205と同一個体
1209		常滑	大甕・胴部	14～15C					
1210		灰釉	皿・口縁部						緑色釉
1211		土器	深鉢・胴部	縄文中期					縦の隆帯文
1212		〃	〃	〃					無文
1213		〃	〃	〃					隆帯＋斜縄文
1214		〃	〃	〃					〃 、No.1213と同一個体
1215			硬砂岩・剥片	縄文					

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
1216		土器	深鉢・胴部	縄文中期					無文
1217		石器	長石塊						
1218		灰釉	四耳壺・胴部	15C					緑色釉、No.1341と同一個体？
1219		石器	長石塊						
1220		常滑	大甕・胴部	14～15C					
1221		土器	深鉢・胴部	縄文中期					沈線＋斜縄文
1222		〃	〃	〃					沈線文
1223		鉄釉	壺・胴部	18C～					内面灰白色釉、外面鉄釉沈線あり
1224		土器	釣手土器・釣手部	縄文中期					色調―淡褐色、胎土―径0.2～1.5mmの砂粒をごく少量含む、焼成―良好、文様―刺突文
1225		〃	深鉢・胴部	縄文中期後半					隆帯＋斜縄文
1226			長石塊						
1227			〃						
1228			〃						
1229			と石						
1230		土器	深鉢・胴部	縄文中期					隆帯＋条線文
1231		天目	碗・胴部						
1232		灰釉	碗・口縁部						淡緑色釉
1233		鉄釉	壺・胴部						沈線文あり
1234		〃	碗、口縁部	18C					茶褐色釉(外)、白色釉
1235		灰釉	皿・口縁部						暗灰色釉
1236		土器	深鉢・胴部	縄文					条痕文
1237		灰釉	筒茶碗・口縁部						黄白色釉
1238		鉄釉	碗・胴部						
1239		天目	碗・口縁部						
1240		灰釉	〃						
1241		天目	碗・胴部						黄白色釉
1242		土器	鉄釉皿・底部	16C前半					画花文
1243		石器	貢岩・剥片	縄文					
1244		〃	雲母片岩						
1245		〃	緑泥片岩・剥岩						
1246		〃	雲母片岩						
1247		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					隆帯＋刺突文
1248		〃	〃						隆帯文
1249		〃	〃	縄文中期後半					唐草文
1250			粘土塊						
1251		土器	深鉢・口縁部						唐草文、No.1016と同一個体
1252		〃	深鉢・胴部	縄文中期後半					唐草文、No.1251と同一個体
1253		〃	〃	〃					唐草文
1254		〃	〃	〃					唐草文、No.1016と同一個体
1255		〃	〃	〃					〃
1256		〃	深鉢・口縁部	縄文					
1257		〃	深鉢・胴部	縄文中期後半					唐草文、No.1016と同一個体
1258		〃	〃	縄文中期					無文
1259		〃	〃	〃					〃
1260		〃	〃	〃 後半					〃
1261		〃	〃	〃					隆帯文
1262		〃	〃	〃 後半					結節縄文
1263		――	――	――					
1264			長石塊						

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
1265		土器	深鉢・胴部	縄文中期					沈線文
1266		〃	〃	〃					隆帯文
1267		〃	〃	縄文中期後半					隆帯＋斜縄文
1268		石器	剝片石器						硬砂岩
1269		常滑	大甕・底部	14～15C				13.6	色調―緑灰色、胎土―砂粒をほとんど含まず、粘土のキメは非常に細かく良質 焼成―良好
1270			黒曜石	縄文					エンドスフレイパー
1271		土器	深鉢・底部	〃	3.1	1.3	0.5	2	
1272		〃	深鉢・胴部	縄文中期後半					唐草文
1273		〃	深鉢・胴底部	縄文中期					無文
1274		石器	すり石・砂岩	縄文					
1275		土器	深鉢・胴部	縄文中期					沈線文
1276		内耳	口縁部	15～16C					
1277		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					結節縄文
1278		〃	深鉢・底部	縄文中期					無文
1279		〃	深鉢・胴部	縄文中期後半					唐草文
1280		〃	深鉢・口縁部	縄文前期					色調―淡褐色、胎土―径0.2～2.0mmの長石・石英などを中程度含む 焼成―良好、文様―隆帯＋刻み目
1281		〃	深鉢・胴部	縄文中期					唐草文
1282		石器	すり石						輝緑岩、ススける
1283		土器	深鉢・胴部	縄文中期半～後半					色調―赤黄褐色、胎土―径0.2～2.0mmの長石・石英・金雲母などをかなり多く含む 焼成―良、文様―重孤文＋隆帯＋連続刺突文
1284		〃	〃	縄文中期					無文
1285		〃	〃	縄文中期後半					隆帯＋斜縄文
1286		〃	〃	縄文中期					
1287		〃	〃	縄文中期後半					唐草文
1288		石器	磨り石&敲打器	縄文	9.2	11.5	5.2	960	
1289		土器	深鉢・胴部	縄文中期					斜縄文
1290	――	――	――	――					
1291		内耳	胴部						
1292		古銭	嘉祐通寶	鎌倉末～室町					私鋳銭
1293		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					色調―表…黒褐色、裏…褐色、胎土―径0.2～1.5mmの長石・石英・金雲母などをやや多目に含む、焼成―良好、文様―結節縄文
1294	――	――	――	――					
1295			長石塊						
1296		内耳	底部	15～16C					
1297		灰釉	壺・胴部						暗緑色釉
1298		〃	〃						〃 、No.1297と同一個体
1299		〃	四耳壺	15C半ば					釉―明緑色釉、胎土―砂粒をほとんど含まず、粘土のキメはかなり細かく良質 焼成―良好
1300		内耳	胴部						
1301		天目	碗・口縁部1/5	16C前半	4.7	11.7		6.3	釉―褐色、胎土―砂粒をほとんど含まず、粘土のキメも比較的細かく良質 焼成―良好
1302		鉄製品	鏃						
1303		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					隆帯＋斜縄文
1304		灰釉	壺・胴部						ただれ
1305		鉄釉	鉄釉壺・胴部						
1306		内耳	胴部						
1307		古銭	宣和通寶	北宋					徽宗、宣和年間(1100～1125)
1308		土器	深鉢・胴部	縄文中期					無文
1309		鉄釉	茶壺・口縁部	15C		8.6			色調―暗灰褐色、釉―褐色、胎土―砂粒をほとんど含まず、粘土のキメは非常に細かく良質、焼成―良好
1310			黒曜石・剝片	縄文					
1311		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半半ば					色調―淡赤黄褐色、胎土―径0.2～2.0mmの長石・石英などを少量含む 焼成―良好、文様―隆帯＋条線＋爪形文
1312		内耳	底部	15～16C					
1313			すずり縁部						粘板岩

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
1314		石器	長石塊						
1315		〃	と石						
1316		鉄製品							
1317		灰釉	壺・胴部	15C					緑色釉
1318		常滑	大甕・胴部	14～15C					
1319		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					結節縄文
1320		〃	〃	〃					平行沈線文
1321		青磁	碗・口縁部						色調―明緑青色、胎土―堅致、灰青色、焼成―良好、文様―雷文
1322		石器	と石		14.8	4.1	3.5	247	安山岩
1323		内耳	胴部						
1324		鉄釉	碗・胴部	17C					
1325		内耳	底部						
1326		石器	と石		5	4.3	2.2	82	
1327			黒曜石・剝片	縄文					
1328		土器	深鉢・胴部	〃					
1329		常滑	大甕・胴部	14～15C					
1330		鉄釉	筒茶碗・胴部	17C					
1331		灰釉	筒茶碗・胴部	18C～					黄白色釉
1332			黒曜石・剝片	縄文					
1333		石器	と石・剝片	中世					
1334			溶解物						
1335			粘土塊						
1336			黒曜石・剝片	縄文					
1337		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					色調―暗褐色、胎土―径0.2～1.0㎜の長石・石英・金雲母などをやや多目に含む 焼成―良、文様―綾杉文
1338			黒曜石・石核						
1339		石器	すり石	縄文					粘板岩
1340		土器	壺・胴部	縄文					色調―淡褐色、胎土―径0.2～2.0㎜の長石・石英などを中程度含む 焼成―良、文様―条痕文
1341		灰釉	四耳壺	15C					色調―緑灰褐色、胎土―径1.0㎜前後の砂粒を微量含み、粘土のキメはあらい 焼成―良好
1342		灰釉	壺・胴部						緑色釉、No.1317と同一個体
1343		土器	深鉢・胴部	縄文中期					条線文
1344		灰釉	碗・底部	18C～					淡黄白色釉
1345			黒曜石・剝片	縄文					
1346		土器	深鉢・胴部	縄文中期					
1347		〃	〃	縄文中期後半					隆帯＋斜縄文
1348		〃	〃	〃					No.1347と同一個体
1349		石器	砂岩						
1350		土器	深鉢・胴部	縄文中期					色調―赤褐色、胎土―径0.2～3.0㎜の長石・石英・金雲母などをやや多目に含む 焼成―ややあまい、文様―隆帯＋渦巻文
1351									
1352		鉄釉	筒茶碗口縁部	18C～					
1353		〃	深鉢・底部	縄文中期					
1354		石器	石英塊						
1355		〃	硬砂岩						
1356		土器	深鉢・胴部	縄文中期					隆帯文
1357		〃	深鉢・口縁部	〃					
1358		石器	輝緑花崗岩						
1359		灰釉	小形皿・口縁部	16C前半					黄白色釉
1360			黒曜石・剝片	縄文					
1361			溶解物						
1362		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					唐草文

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
1363		天目	鉄釉碗・胴部	15C半ば					
1364		鉄釉	蓋部						No.634と同一個体
1365		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					色調一褐色、胎土一径0.2～3.0mmの砂粒を中程度含む、焼成一良、文様一唐草文
1366		〃	〃	〃					
1367		〃	深鉢・口縁部	〃					
1368		〃	深鉢・胴部	〃					唐草文
1369		〃	〃	〃					沈線文
1370		〃	〃	縄文中期					唐草文
1371		〃	〃	縄文中期後半					〃
1372		〃	深鉢・口縁部	〃					無文、唐草文
1373		〃	深鉢・胴部	〃					
1374		天目	碗・口縁部	15C半ば					
1375		灰釉	碗・胴部	〃					白色釉
1376		内耳	胴部	15C～16C					
1377		〃	〃						
1378		石器	と石 安山岩						
1379		灰釉	坏・胴部						
1380		鉄釉	鉄釉碗・胴部						
1381		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					結節縄文
1382			すずり縁部破片						
1383		鉄釉	壺・胴部	16C					
1384		土器	深鉢・口縁部	縄文中期					色調一赤褐色、胎土一径0.2～2.5mmの長石・石英・金雲母などをやや少な目に含む 焼成一良好、文様一斜縄文
1385		石器	打製石斧・撥形	〃	9	5.7	1	80	刃部少し欠く、緑泥片岩
1386			黒曜石・剝片	〃					タッチあり
1387		灰釉	合子・胴部						黄白色釉
1388		鉄釉	碗・胴部						
1389		〃	深鉢・胴部	縄文中期					隆帯文
1390		〃	〃	〃					〃
1391		石器	すり石						硬砂岩
1392			長石塊						
1393		土器	深鉢・胴部	縄文中期					
1394			硬砂岩・剝片						
1395		天目	碗・口縁部	15C半ば		12.4			色調一黒色、褐色釉・口縁部、胎土一砂粒をほとんど含まず、粘土のキメは非常に細かく良質、焼成一良好
1396			黒曜石・石核						
1397		鉄釉	合子・胴部						
1398		石器	有脚・石鏃	縄文	2.2	1.4	0.4	0.5	チャート
1399		土器	深鉢・胴部	縄文中期					
1400		内耳	胴底部						No.693と同一個体
1401			黒曜石・石鏃	縄文					
1402		土器	深鉢・胴部						色調一明褐色、胎土一2mm前後の長石・石英多し、焼成一良、文様一結節縄文
1403			黒曜石・石鏃	縄文					頭部のみ
1404			長石塊						火打石
1405		土器	深鉢・胴部	縄文中期					
1406		〃	深鉢・口縁部	〃					隆帯＋斜縄文
1407		〃	深鉢・胴部	〃					
1408		石器	打製石斧・短冊形	縄文					粘板岩
1409		土器	深鉢・胴部	縄文中期					色調一赤褐色、胎土一径0.2～1.0mmの長石・石英・金雲母など中程度含む 焼成一ややあまい、文様一隆帯＋斜縄文
1410		〃	〃	縄文中期後半					唐草文
1411		〃	深鉢・口縁部	〃					無文

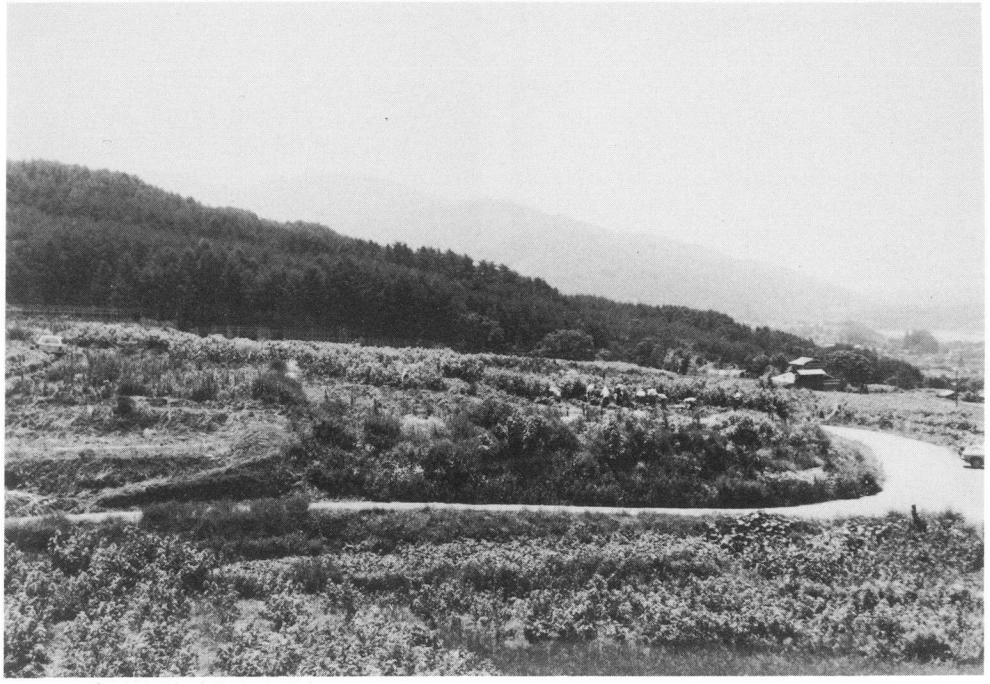
番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
1412		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					ヘラ先の綾杉文
1413		〃	〃	〃					横走隆帯文
1414			硯縁部破片						
1415		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					唐草文
1416			硬砂岩・剝岩	〃					
1417		石器	貢岩・剝片	〃					
1418		灰釉	碗・胴部						黄白色釉
1419		石器	緑泥片岩・剝片	縄文					
1420			瓦・破片	中世～					
1421		〃	深鉢・胴部	縄文中期					隆帯＋沈線文
1422		〃	〃	縄文中期後半					唐草文
1423			黒曜石・剝片	縄文					
1424		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					沈線文
1425			硬砂岩・剝片	縄文					
1426		石器	と石	中世					変輝緑岩
1427	——	——	——	——					
1428			焼成粘土塊						
1429		灰釉	瓶・胴部						
1430		土器	深鉢・胴部	縄文中期					沈線文
1431		〃	深鉢・口縁部	〃					無文
1432		〃	深鉢・胴部	〃					〃
1433		〃	〃	〃					色調—明褐色、胎土—5㎜前後の砂粒を含む、焼成—良好、文様—綾杉文
1434		〃	〃	縄文中期後半					色調—淡赤黄褐色、胎土—径0.2～1.5㎜の長石・石英・金雲母などを多目に含む 焼成—良好、文様—結節縄文
1435		〃	〃	縄文中期					綾杉文
1436			硬砂岩・剝片	縄文					
1437		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					唐草文
1438		〃	〃	〃					色調—明黄褐色、胎土—径0.3～3.0㎜の長石・石英・金雲母などをやや多目に含む 焼成—良好、文様—蛇行隆帯＋短条線文
1439		〃	〃	〃					色調—褐色～暗褐色、胎土—径0.2～3.0㎜の長石・石英・金雲母などをかなり多く含む 焼成—良好、文様—蛇行隆帯＋短条線文
1440		〃	〃	〃					蛇行隆帯＋短条線文、№1439と同一個体
1441		鉄釉	皿・胴部						
1442		土器	深鉢・口縁部	縄文中期後半					色調—明褐色、胎土—3㎜前後の長石・石英を含む、焼成—良好、文様—横走隆帯文
1443		鉄釉	皿・底部						ヘラ切り
1444	——	——	——	——					
1445			砂岩						
1446		石器	黒曜石・石核						
1447		鉄釉	皿・口縁部	16C半ば		11.4			色調—釉—褐色に黒色が斑状にまじる、胎土—砂粒をほとんど含まず、粘土のキメは比較的細かい、焼成—良好
1448			黒曜石・剝片						
1449		土器	深鉢・胴部	縄文中期					
1450		〃	〃	縄文中期半ば後半					隆帯文
1451	——	——	——	——					
1452		土器	深鉢・胴部	縄文中期					無文
1453		〃	〃	〃					〃
1454		〃	〃	〃					隆帯文
1455									
1456		土器	粘土塊	縄文					
1457		〃	深鉢・胴部	縄文中期					色調—淡赤褐色、胎土—径0.2～2.0㎜の長石・石英・金雲母などをかなり多く含む 焼成—良好
1458			深鉢・胴底部	〃					色調—淡赤褐色、胎土—径0.2～1.5㎜の長石・石英などをやや少目に含む 焼成—良
1459			深鉢・胴部	〃					無文
1460		〃	〃	〃					綾杉文

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値 高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	特徴
1461		土器	深鉢・底部	縄文中期					網代底
1462		〃	深鉢・胴部	縄文中期後半					唐草文、No.1016と同一個体
1463		〃	〃	縄文中期					無文
1464		石器	剥片石器	〃					硬砂岩
1465		土器	深鉢・胴部	〃					隆帯文
1466		〃	深鉢・口縁部	〃					無文
1467		石器	硬砂岩・剥片	〃					
1468		〃	輝緑花崗岩						
1469		土器	深鉢・胴部	縄文中期					色調—淡褐色、胎土—径0.2～3.0㎜の長石・石英・金雲母などをかなり多く含む 焼成—良好
1470			輝緑花崗岩						
1471		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					隆帯＋条線文
1472		〃	〃	〃					隆帯文
1473		〃	〃	〃					条線文
1474		石器	すり石	縄文					雲母片麻岩
1475		土器	深鉢・胴部	縄文中期					隆帯渦巻文
1476		〃	〃	〃					斜縄文
1477		〃	〃	〃 初					色調—赤褐色、胎土—径0.2～3.0㎜の長石・石英・金雲母などをかなり多く含む 焼成—良、文様—沈線文、竹管の平行
1478		〃	〃	〃					竹管文
1479		〃	〃	〃 初～半ば					斜縄文
1480		鉄釉	壺・底部	15C					
1481		土器	深鉢・胴部	縄文中期後半					重孤文
1482		古銭	元豊通寶	鎌倉末～室町					私鋳銭
1483		内耳	底部	15～16C					
1484		石器	と石・破片						安山岩
1485			黒曜石・石核	縄文					
1486		石器	貢岩・剥片	〃					
1487		土器	台付土器・器台部	縄文中期					色調—淡黄褐色、胎土—径0.2～2.5㎜の長石・石英・金雲母などを少量含む 焼成—良好
1488		〃	深鉢・胴部	縄文中期後半					色調—褐色、胎土—径0.2～3.0㎜の砂粒をかなり多く含む、焼成—良好
1489		〃	深鉢・口縁部	縄文中期					色調—暗褐色、胎土—2.5㎜前後の長石含む、焼成—良好、文様—無文
1490		〃	〃	〃					色調—灰褐色、胎土—６㎜前後の粗い長石・石英を含む、焼成—良好、 文様—蛇体装飾・刺突文
1491		〃	深鉢・胴部	〃					条線文
1492		灰釉	碗・底部	11C～					
1493		石器	スクレイパー	縄文					黒曜石
1494		石器	長石塊						
1495	——	——	——	——					
1496	——	——	——	——					
1497		土器	深鉢・胴部	縄文中期					沈線文
1498		石器	すり石・破片	縄文					硬砂岩
1499		〃	長石・剥片						
1500		天目	碗・胴部						
1501		染付	碗、胴部						
1502		土器	鉄釉皿・底部						
1503		灰釉	小皿・口縁部	15C初					
1504		石器	長石塊						
1595			溶解物						
1596		石器	打製石斧・短冊形	縄文	15.2	5.6	2.5	288	完形、硬砂岩
1507			黒曜石・剥片						
1508	——	——	——	——					
1509		灰釉	小形坏・口縁部	18C～					灰白色釉

番号	挿図	種別	形態	時代及び時期	計測値				特徴
					高さ(長さ)	口径(幅)	胴径(厚さ)	底径(重さ)	
1510	——	——	——————	——————					
1511		灰釉	茶碗	15C					No.1116と同一個体、1/3個体、ススける
1512		染付	碗、底部					26.8	色調一暗褐色、胎土一こまかく黒雲母含む、焼成一良好
1513		土器	深鉢・胴部	縄文中期					隆帯文
1514		〃	〃	縄文中期後半					色調一淡赤褐色、内面…黒褐色、胎土一径0.2～3.0㎜の長石・石英などをやや多目に含む、焼成一良好、文様一斜縄文＋刺突文
1515		〃	鉄釉・茶入	16C半ば					No.1516と同一個体、1/2個体、糸切り底
1516		〃	〃						
1517		土器	深鉢	縄文中期後半	2.6	10.2		4.7	
1518		灰釉	小皿	15C半ば					色調一灰色、釉一淡緑色、胎土一砂粒をほとんど含まず、粘土のキメは比較的細かく良質、焼成一良好、1/4個体、糸切り底
1519		〃	〃	〃	2.2	11.6		6.3	色調一灰色、釉一やや暗い緑灰色、胎土一径1㎜前後の砂粒を微量含み、粘土のキメはややあらい、焼成一良好、1/4個体、糸切り底
1520		青磁	碗・底部	南宋～元					
1521		石器	すり石	縄文					
1522		土器	深鉢・胴部	〃					結節縄文
1523		灰釉	深皿・底部	15C					No.732と同一個体

図　　版

1．青木城遺跡遠景（東南山麓より）

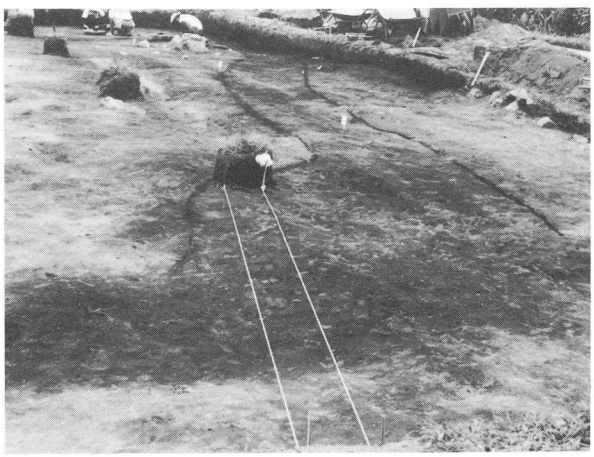


2．　遺跡遠景（北東より）

3．調査A地区グリット掘り下げ状態

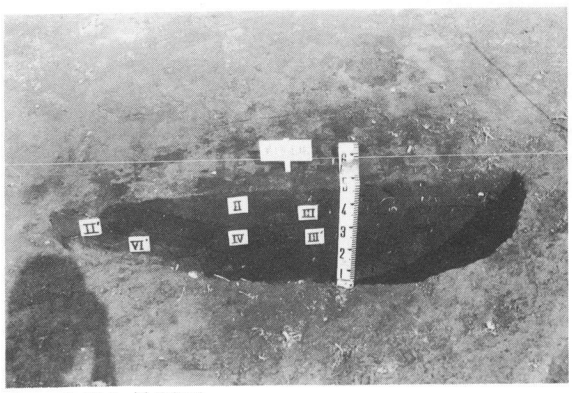
4．調査A地区調査風景

5．縦堀ベルト設定状態

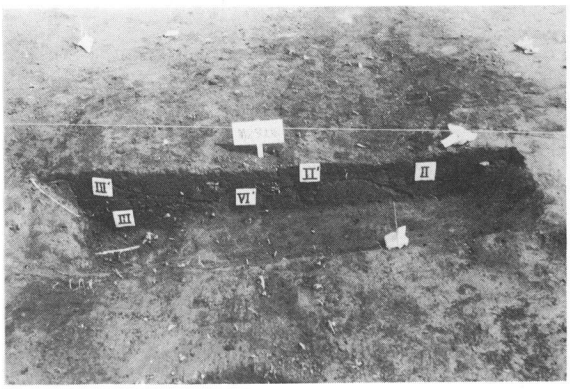


6．縦堀・横堀

7．柱穴址・柱列址

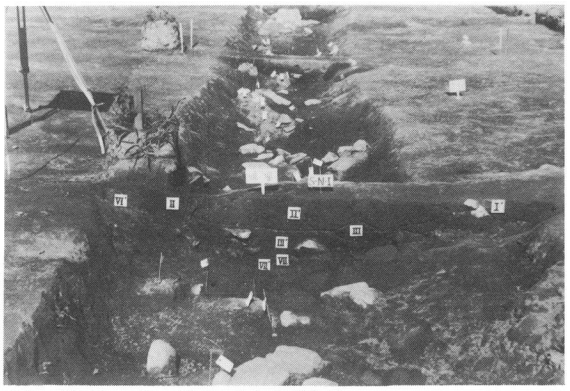


8．土壙1号断面

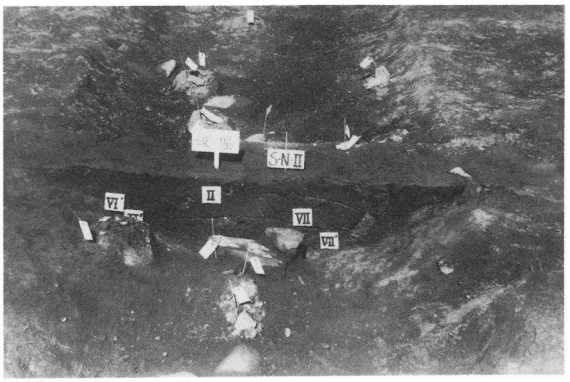


9．土壙2号断面

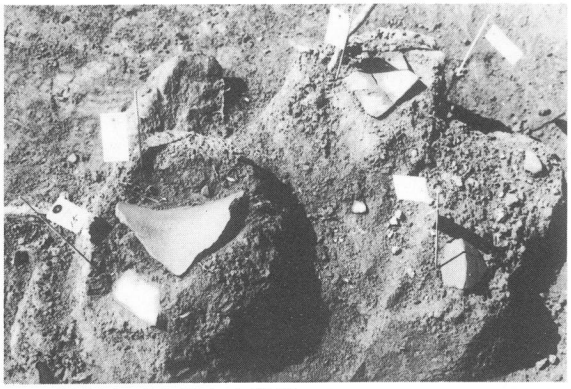
10．縦堀、掘り下げ状態



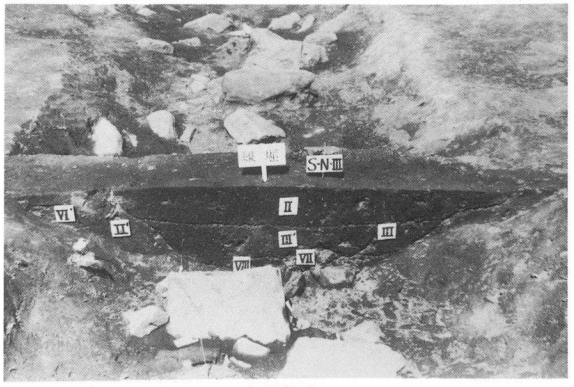
11．縦堀、S—NⅠベルト断面



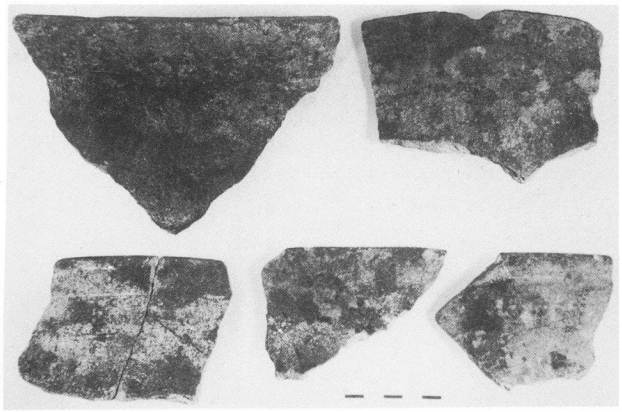
12．同上S—NⅡベルト断面



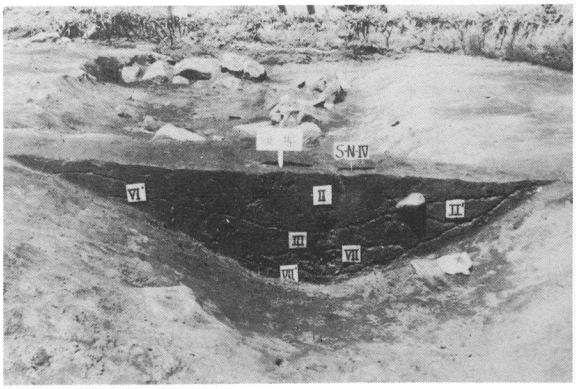
15．縦堀内耳土器出土状態



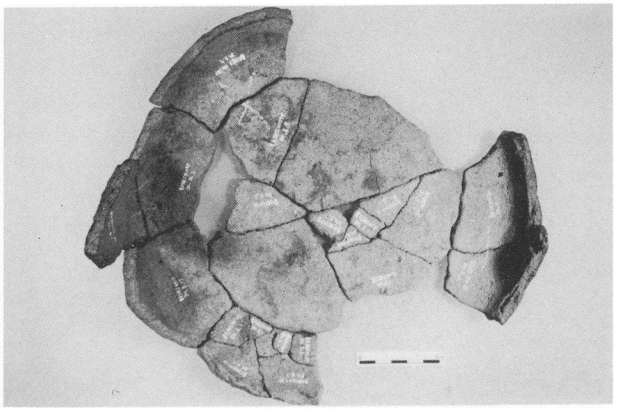
13．同上S—NⅢベルト断面



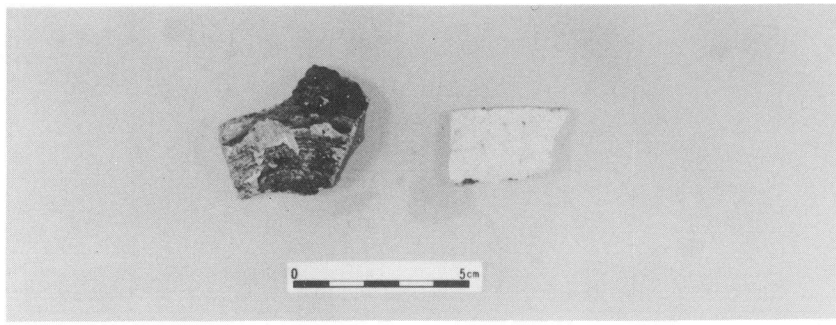
16．縦堀出土内耳土器（口縁部）



14．同上S—NⅣベルト断面

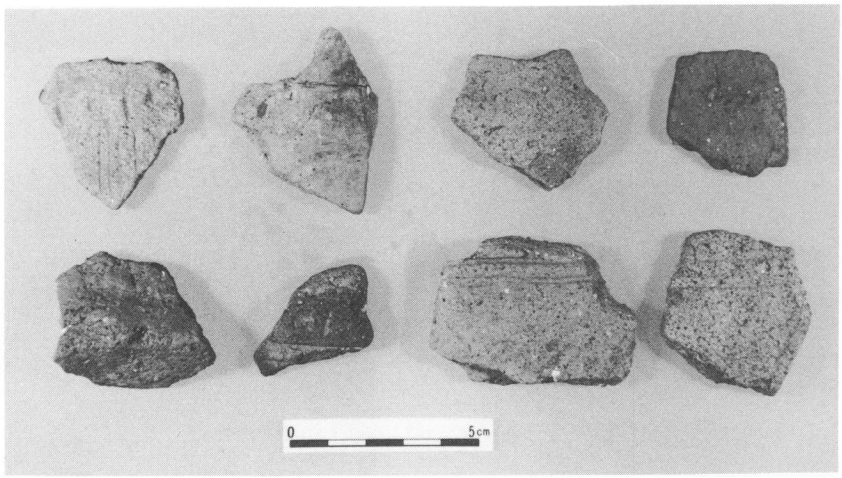


17．縦堀出土内耳土器（底部）

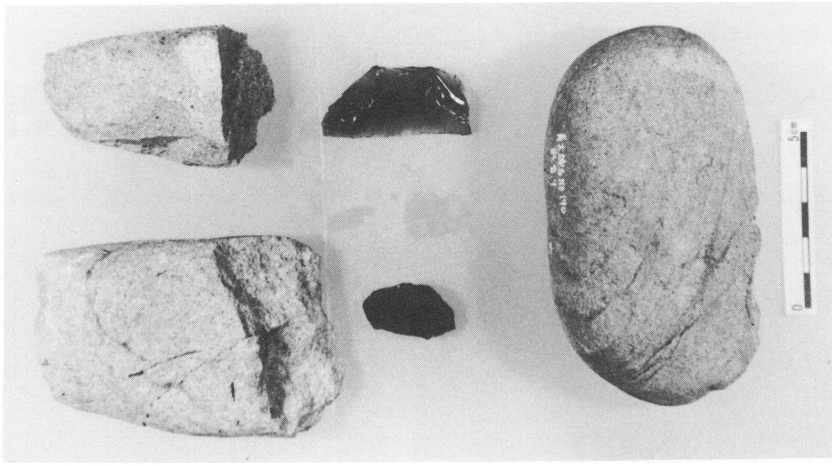


18　縦堀出土陶器

19．柱穴址１号周辺出土きせる雁首



20．同上　出土縄文土器

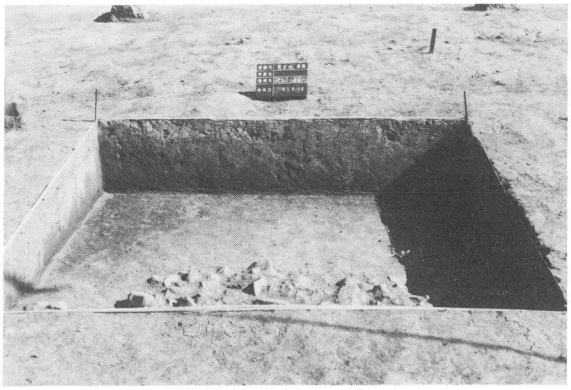


21．同上　出土石器

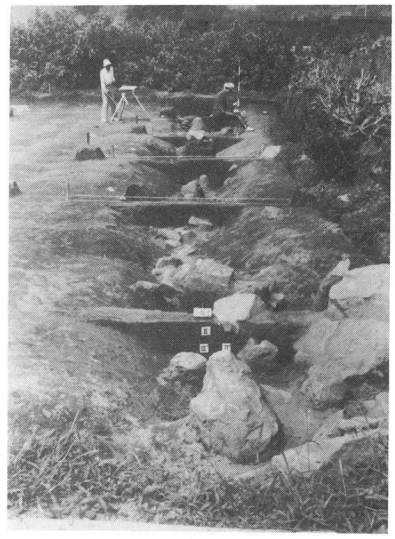
22．調査Ｂ地区グリット掘り下げ風景(東より)

23．同上　調査風景(東より)

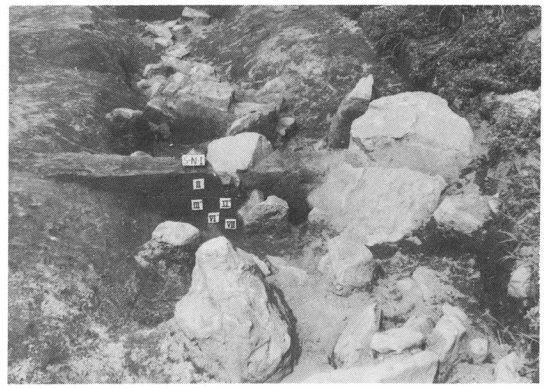
28．調査Ｂ地区調査終了状態(東より)



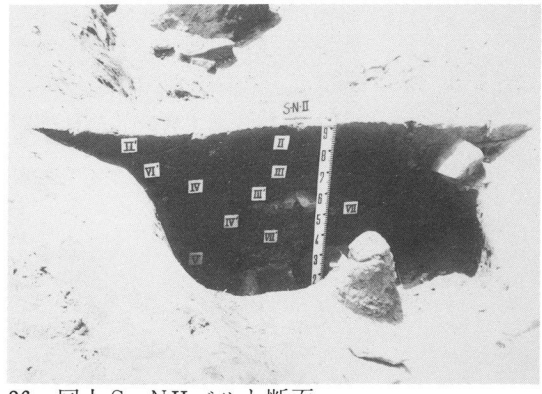
29．ローム層下掘り下げグリット



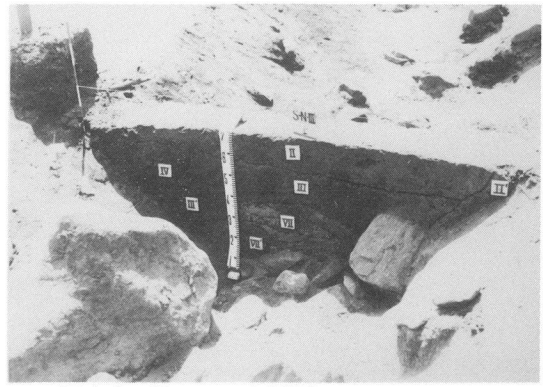
24．縦堀掘り下げ状態



25．同上Ｓ—ＮＩベルト断面

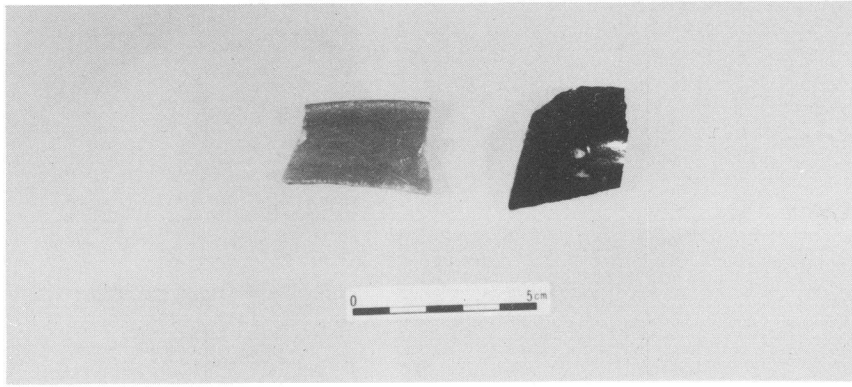


26．同上Ｓ—ＮIIベルト断面

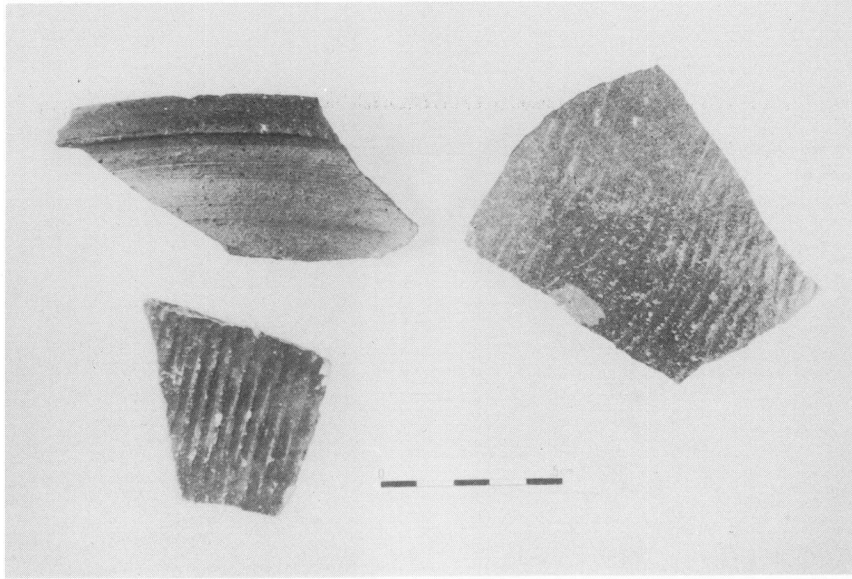


27．同上Ｓ—ＮIIIベルト断面

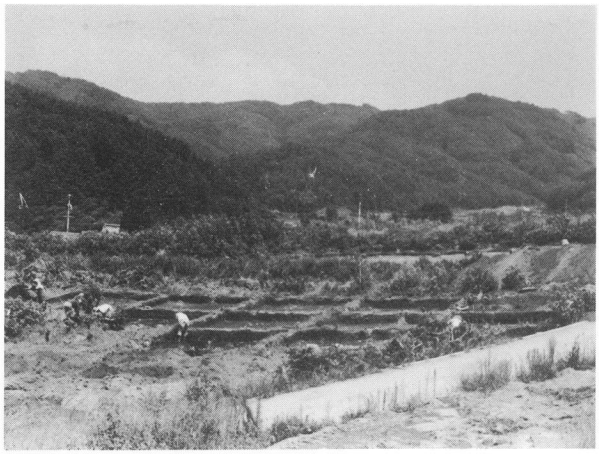
30．調査Ｂ地区縦堀出土灰釉陶器



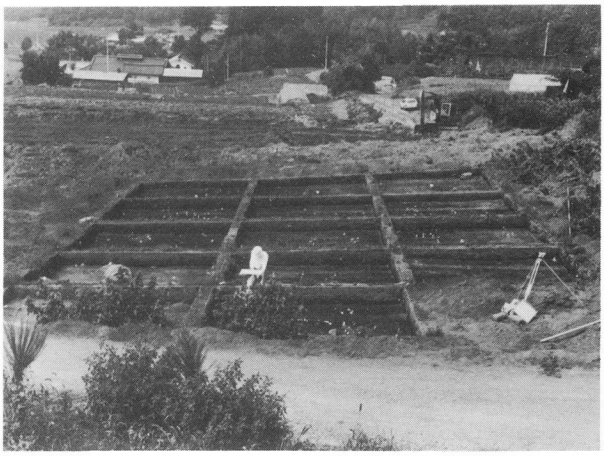
31．同地区出土青磁・鉄釉陶器



32．同地区出土須恵器

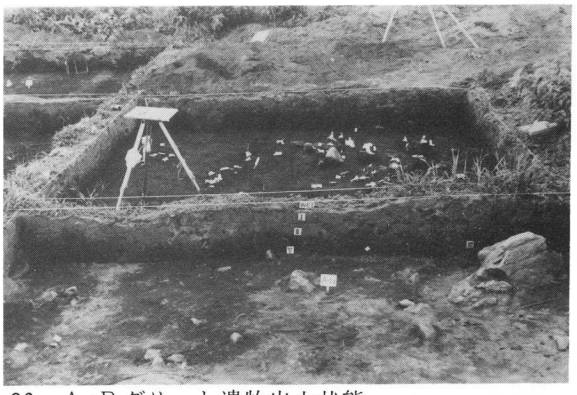


33．調査C地区全景(南東より)



34．グリット掘り下げ状態(東より)

35．E～Gグリット遺物出土状態



36．A・Bグリット遺物出土状態

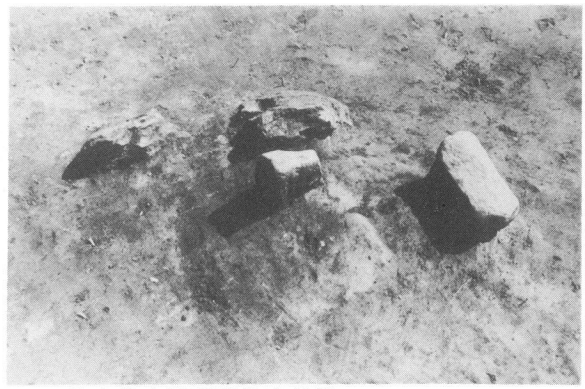
37．Q～Sグリット遺物出土状態

38．M～Oグリット遺物出土状態

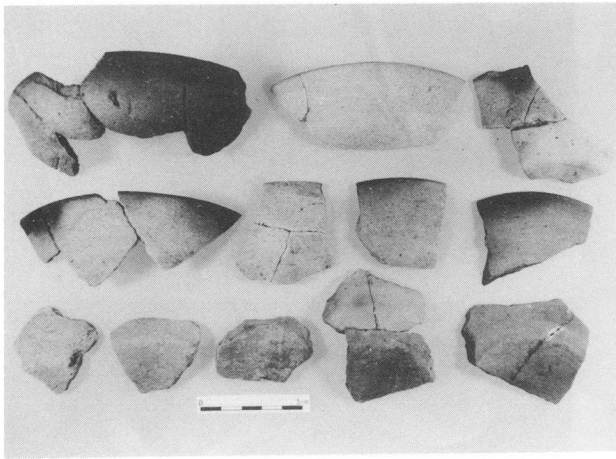
39．焼土集中箇所(B—G)遺物出土状態

40．焼土集中箇所

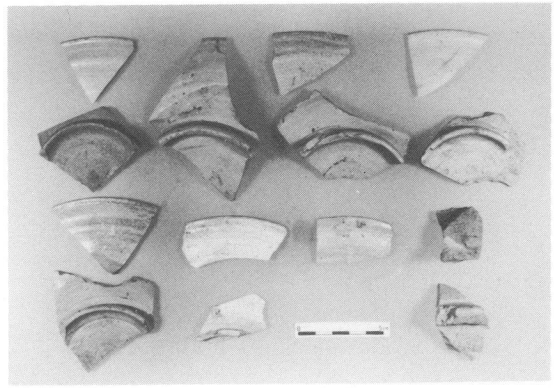
41．焼土集中箇所遺物出土状態



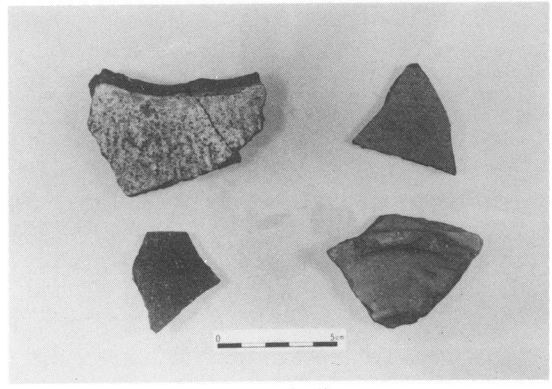
42．焼土集中箇所礫検出状態



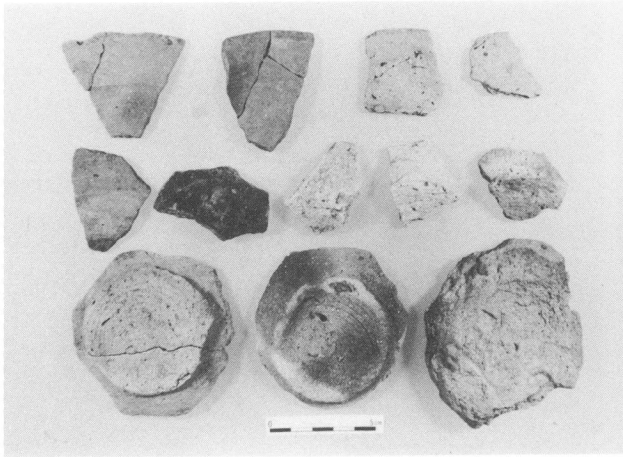
43．焼土集中箇所出土土師器



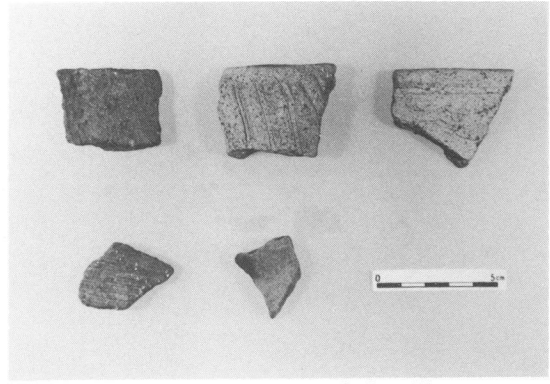
44．焼土集中箇所出土灰釉陶器



45．C地区遺構外出土須恵器



46．C地区遺構外出土土師器



47．C地区遺構外出土縄文・弥生土器

青木城遺跡

II

例　　言

1．本調査は、昭和59年度に実施された駒ヶ根東部土地改良区東部地区県営ほ場整備事業に先立つもので、昭和59年８月20日から9月16日にかけて調査したものである。

2．発掘調査は、国庫・県費補助対象事業として、補助金を得て駒ヶ根市教育委員会が中心となり、駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会を組織して行った。

3．発掘調査の中で、遺構・遺物の実測は、小原晃一、北村英憲、北沢武志が担当し、写真撮影は小原が担当した。

4．遺物整理・報告書作成作業の中で、土器洗いは小町谷杉穂、注記は宮沢美智子が担当した。遺物の復元は小原、拓本は宮沢、遺物の実測は小池幸夫が担当し、遺物及び遺構図のトレースは宮沢、図の作成は小原、小池が担当した。写真撮影は小原が行った。

5．本報告書の執筆は、小原が行った。

6．本書は、調査によって明らかとなった遺構及び遺物をより多く図・表示することに重点をおき、文章記述は簡便にした。

7．遺構・遺物関係の図面の縮尺は、その都度明示してある。

8．遺物の表示については、その都度明示してある。

9．遺構等の断面層位は、次のとおりである。

Ⅰ層―褐色土〈表土〉
Ⅰ′層―　〃　〈耕作土〉（ローム粒含）
Ⅱ層―暗褐色土〈　〃　〉
Ⅱ′層―　〃　〈　〃　〉（ローム粒含）
Ⅲ層―暗茶褐色土（木炭粒含）
Ⅲ′層―　〃　（木炭粒・ローム粒含）
Ⅳ層―黒褐色土（木炭粒含）
Ⅳ′層―　〃　（木炭粒・ローム粒含）
Ⅴ層―黒色土（木炭粒含）
Ⅵ層―ローム層（砂質）
Ⅵ′層―ローム漸移層
Ⅶ層―Ⅲ層＋砂混土
Ⅶ′層―Ⅲ層＋砂・礫混土
Ⅷ層―焼土・木炭
Ⅷ′層―焼土・木炭＋Ⅴ層混土

10．当遺跡の出土遺物及び諸記録・図面は、市立駒ヶ根博物館が保管している。

目　　次

例　　言
目　　次
第Ⅰ章　発掘調査の経過……1
　第１節　発掘調査に至るまでの経過……1
　第２節　調査会の組織……2
　第３節　発掘作業経過（発掘作業日誌）……3
第Ⅱ章　遺跡の環境……5
　第１節　地理的及び歴史的環境……5
第Ⅲ章　発掘調査……6
　第１節　調査概要……6
　第２節　遺構と遺物……6
第Ⅳ章　まとめ……35

挿図目次

第１図　青木城遺跡及び周辺遺跡分布図……6
第２図　青木城遺跡調査Ｄ地区位置図及びグリッド図…8
第３図　青木城遺跡調査Ｄ地区遺構全体図……9
第４図　青木城遺跡Ｄ地区第1号住居跡､横掘実測図…11
第５図　第１号住出土遺物実測図……14
第６図　第１号住出土土器実測図……15
第７図　土壙６・７・９号実測図……15
第８図　土壙３・７・10号出土土器実測図……16
第９図　遺構外出土土器実測図……17
第10図　遺構外出土土器実測図……18
第11図　第２号住及び遺構外出土石器実測図……19
第12図　横堀及び遺構外出土遺物実測図……20
第13図　第２号住及び土壙５・８・10号実測図…21･22
第14図　第２号住出土遺物実測図……23
第15図　第２号住及び竪穴遺構１号出土遺物実測図…24
第16図　竪穴遺構１号実測図……25
第17図　竪穴遺構２号実測図……25
第18図　土壙１～４号、柱穴址１・２号、柱列址１・２号実測図……27･28
第19図　縦堀実測図……29･30
第20図　縦堀、横堀、土壙２号、柱穴址群、遺構外出土遺物実測図……31
第21図　第2号住､竪穴遺構1号､縦堀出土古銭拓影図…32
第22図　青木城周辺小字名分布図……34

図版目次

図版１　青木城遺跡遠景､遺構全景、第１号住居跡、第１号住居跡焼土・木炭・石棒出土状態、炉址
図版２　第1 号住居跡出土深鉢形土器、出土石棒、土壙６・７号、土壙６・７号断面、土壙７号遺物出土状態
図版３　掘立柱平地住居跡、遺物出土状態、内耳土器・天目茶碗・灰釉水滴・平碗・古銭出土状態
図版４　掘立柱平地住居跡四耳壺・墨書陶器皿・磨製石斧出土状態、柱穴址群・柱列址群全景、近景周辺内耳土器・常滑甕出土状態
図版５　竪穴遺構1 号、同ベルト断面、同天目茶碗・四耳壺出土状態、土壙２号、同断面、同鉄鏃出土状態
図版６　縦堀ベルト設定状態、縦堀全景、同ベルト断面、縦堀遺物出土状態、同卸皿・折縁深皿・平碗出土状態
図版７　横堀掘り下げ状態、同遺物出土状態、同W-EI～Ⅲベルト断面、横堀全景、同きせる吸口出土状態
図版８　出土縄文土器、出土石器
図版９　天目茶碗、稜皿、印花文皿、折縁深皿、卸皿、縁釉小皿、灰釉四耳壺、鉄釉・灰釉壺、瓶類、灰釉平碗、鉄釉茶入
図版10　内耳土器、常滑大甕、硯・砥石、鉄鏃、のみ、鉄滓、火打石、灰釉水滴、墨書陶器皿、東伊那公民館郷土史講座見学風景、発掘参加スタッフ

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第1節　発掘調査の経過

青木城遺跡が昭和59年度駒ヶ根東部土地改良区東部地区県営ほ場整備事業施工区域内に入り、保護協議の必要が生じたため、昭和58年9月6日に、長野県教育委員会文化課小林主事、南信土地改良事務所岩崎主任、同丸山主任、駒ヶ根市農林課倉田、市教育委員会北沢、下村、小原出席のもとに事前協議を行い、発掘調査をして記録保存を行うこととなった。調査費用の内訳は、南信土地改良事務所分362.5万円、国県補助対象事業分137.5万円（国庫補助分68.7万円、県費補助分20.6万円、駒ヶ根市負担分48.2万円）で、総額500万円、調査面積1,000㎡以上という内容であった。事務手続きは以下のとおりである。

昭和59年1月6日　昭和59年度文化財関係補助事業計画について（提出）
4月10日　昭和59年度文化財関係国庫補助事業の内容について（通知）
4月10日　昭和59年度文化財保護事業県費補助金の内示について（通知）
5月15日　昭和59年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請について（提出）
5月29日　青木城遺跡の保護について（通知）
5月30日　埋蔵文化財包蔵地青木城遺跡の発掘調査について（通知）
7月6日　昭和59年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知
7月18日　昭和59年度文化財保護事業補助金の交付決定について（通知）
8月1日　埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約
10月27日　埋蔵文化財の収得について（届）・埋蔵文化財保管証
12月5日　埋蔵物の文化財認定について（通知）
昭和60年3月5日　昭和59年度青木城遺跡発掘調査報告書の印刷について
3月30日　埋蔵文化財包蔵地発掘調査請求書の提出について
3月30日　昭和59年度文化財保存事業完了報告書の提出について
3月30日　昭和59年度国宝重要文化財等保存整備費補助金実績報告書・同補助金交付請求書について（提出）
3月30日　昭和59年度文化財保護事業実績報告書・同補助金交付請求書について（提出）
昭和59年度文化財保護事業青木城遺跡発掘調査県費補助金の額の確定について（通知）

第2節　調査会の組織（駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会）

顧　問　鈴木義昭（駒ヶ根市教育委員長）
会　長　木下　衛（市教育長）
理　事　小池金義（市教育長）〈会長職務代理〉
〃　友野良一（駒ヶ根市文化財審議会会長）
〃　松村義也（〃　副会長）
〃　林　赳（〃　委員）
〃　竹村　進（〃　〃）
〃　中山敬及（〃　〃）
〃　下村幸雄（市立駒ヶ根博物館長）
監　事　北原名田造（駒ヶ根郷土研究会会長）
〃　宮下恒男（市収入役）
幹　事　北沢吉三（市教育委員会社会教育係長）
〃　原　茂（〃　社会教育係）
〃　野々村はるゑ（市立駒ヶ根博物館）
〃　斎藤香代（〃）
〃　小原晃一（〃）

・青木城遺跡発掘調査団（事務所　駒ヶ根市上穂南2番15号　市立駒ヶ根博物館内）
団　長　友野良一（日本考古学協会会員）〈発掘担当者〉
調査員　小原晃一（長野県考古学会会員）〈〃〉
〃　小町谷元（上伊那考古学会会員）
作業員　中村文夫、白川仁重、小林正信、宮下三郎、下島清一、渋谷吉子、小林満寿子、佐藤秋子、細田律恵、佐藤慶子、赤羽笑子、渋谷光子、下平チカエ、北村英憲、北沢武志

指導者　小林　孚（長野県教育委員会文化課指導主事）
〃　伝田和良（〃　〃）
〃　樋口昇一（長野県史刊行会専門主事）
〃　桐原　進（〃　〃）
〃　宮下健司（〃　〃）
〃　林　茂樹（日本考古学協会会員）
〃　気賀沢進（〃）

〈順不同、敬称略〉

第３節　発掘作業経過

・発掘作業日誌

８月10日　調査対象区（調査Ｄ地区）内、約1,000㎡を重機により桑畑の抜根、排土を行う。

８月20日　テント設営。５ｍ×５ｍのグリッド設定。Ａ～Ｑ－グリッド（以下Ｇとする）、Ｓ～Ｗ－Ｇの重機排土による残土除去作業。Ｂ・Ｍ＝689.000に設定。地形測量を$\frac{1}{200}$で行う。Ｐ・Ｑ・Ｔ・Ｕ－Ｇより、古銭（元祐通寶）、青磁、内耳、常滑などが出土する。Ｐ・Ｑ－Ｇに柱穴らしき落ち込みが確認される。Ａ～Ｂ－Ｇ内より焼土・木炭集中して出土。住居跡となると思われる。

８月21日　引き続き地形測量を行う。遠景写真撮影。Ｌ・Ｒ、Ｕ～Ｘ、Ｓ′～Ｕ′－Ｇの残土除去作業。Ｕ－Ｇを中心として内耳土器が多く出土する。灰釉水滴破片、天目茶碗破片とともに磨製・打製石斧も出土する。焼土・木炭が集中していることから住居跡と考えられる。

８月22日　Ｕ～Ｘ、Ｕ′～Ｘ′－Ｇの残土除去作業を行う。Ｕ－Ｇより古瀬戸灰釉四耳壺片、Ｖ－Ｇよりタタキ床面が検出される。Ｘ－Ｇからも古瀬戸灰釉四耳壺片が出土。

８月23日　地形測量を行う。Ｌ′・Ｒ′・Ｙ・Ｚ、Ｖ′～Ｘ′－Ｇ残土除去作業。Ｒ′－Ｇより縄文中期後半の土器胴部片出土。Ａ～Ｐ－Ｇの西側、Ａ～Ｓ′－Ｇの南側を拡張して掘り下げる。Ｂ－Ｇより石棒出土。この周辺の落ち込みを第１号住居跡とする。Ａ～Ｒ－Ｇ内を仮清掃する。Ｃ・Ｊ・Ｇ・Ｏ－Ｇに土壙状の落ち込みあり。調査風景、遺物出土状態を写真撮影する。

８月24日　調査区内南側部分Ａ′～Ｓ″－Ｇの清掃。東西に土手に沿って幅約３ｍ位の落ち込みがあり堀状遺構とする。西から５ｍおきにベルトを設けⅠ～Ⅵ区と設定する。Ⅱ区～Ⅳ区掘り下げ。Ⅲ区より古瀬戸灰釉折縁深皿片出土。第１号住上面清掃。焼土・木炭分布状態を平板測量。

８月25日・26日　行事の為、現場作業休み。

８月27日　雨天の為、現場作業休み。

８月28日　堀状遺構Ⅱ～Ⅳ区掘り下げ。南側土手下に堀の底があると思われ、深さはⅡ・Ⅲ区で60～70cm、Ⅳ区で１m10cm前後と深くなる。台地は南・西へ傾斜し、堀は西から東へ徐々に深くなる状態を示している。Ⅱ区より小溝と集石が検出され、折縁深皿、卸皿が出土。Ⅲ区西寄りの北壁から底中央にかけてタタキを行った面が検出される。グリッド内出土遺物平板測量。

８月29日　堀状遺構Ⅱ～Ⅵ区掘り下げ。Ⅱ区底面寄りの集石は焼けている。Ⅳ区Ⅲ層（暗茶褐色土）中より古瀬戸灰釉平碗胴底部片が出土。Ⅱ～Ⅴ区出土遺物平板測量。出土遺物写真撮影。Ⅵ区より古銭（天禧通寶）、内耳、打製石斧が出土する。

８月30日　堀状遺構Ⅱ～Ⅵ区掘り下げ、ほぼ終了する。Ⅰ区掘り下げ開始。第１号住ベルト設定、掘り下げ開始。堀状遺構Ⅰ～Ⅲベルト清掃、判別。写真撮影。Ⅵ区より古銭（天聖元寶）出土。第１号住より縄文中期後半の土器片出土。

８月31日　堀状遺構Ⅰ区掘り下げ。陶器片出土。Ⅱ・Ⅲ区出土遺物及び堀プラン平板測量。Ⅰ～Ⅴベルト断面実測、写真撮影。第１号住掘り下げ。焼土・木炭多く遺存している。

9月1日　堀状遺構Ⅰ～Ⅴベルト取りはずし作業。Ⅳ～Ⅵ区出土遺物・堀プラン平板測量。横堀Ⅰ・Ⅱ区掘り下げ。打製石斧、縄文中期土器片出土。U～W、U′～W′－G掘り下げ。常滑、内耳、墨書陶器皿（東か朿、朿と読める）出土。

9月2日　現場作業休み。

9月3日　堀状遺構Ⅰ～Ⅴベルト取りはずし終了。縦堀と改名する。横堀Ⅰ区掘り下げ。堀底は平らで、徐々に北東へ上がることから入口部分とも考えられる。U～W、U′～W′－G掘り下げ終了。出土遺物等平板測量。横堀Ⅲ・Ⅳ区掘り下げ。礫が中層に多く、陶器、縄文土器等出土。

9月4日　縦堀Ⅰ区、横堀Ⅰ区出土遺物平板測量、写真撮影。横堀Ⅲ～Ⅳ区掘り下げ。礫の集中する箇所が見られる。釣手土器片、打製石斧、灰釉陶器、常滑等出土。T・T′～W・W′－G仮清掃。タタキ床、焼土集中、柱状落ち込み顕著。出土遺物平板測量、レベル実測、写真撮影。横堀は北へ向って、掘り込みではなく自然地形に吸収されて行くと考えられる。

9月5日　縦堀Ⅰ区堀平面平板測量。横堀Ⅰ・Ⅴ区掘り下げ。横堀Ⅱ区遺物・礫平板測量。T・T′～W・W′－Gの遺構を第2号住とする。盤状の石列や青磁、常滑、砥石等が出土。

9月6日　横堀Ⅰ区掘り下げ、ほぼ終了。Ⅱ区掘り下げ中途。Ⅲ区遺物・礫平板測量、レベル実測。H～L・N～R－Gを清掃し、柱穴址群、土壙を掘り下げる。T′－Gより長方形の落ち込み確認する。竪穴遺構1号とする。全体の写真撮影を行う。

9月7日　横堀Ⅱ・Ⅲ区掘り下げ、ほぼ終了。Ⅳ・Ⅴ区遺物・礫平板測量。竪穴遺構1号ベルトを残し掘り下げ。灰釉四耳壺、鉄製品出土。土壙2～4・6号$\frac{1}{2}$カット。柱穴址群掘り下げ。

9月8日　竪穴遺構1号掘り下げ。古銭2枚、天目、内耳等出土。横堀Ⅲ・Ⅳ区掘り下げ、ほぼ終了。Ⅴ区中途。柱穴址群掘り下げ。

9月9日　現場作業休み。

9月10日　横堀Ⅱ～Ⅴ区掘り下げ、終了。土壙7号$\frac{1}{2}$カット。縄文中期後半台付深鉢土器の台部中層より出土。土壙5号$\frac{1}{2}$カット。竪穴遺構1・2号掘り下げ。出土遺物平板測量。写真撮影。

9月11日　第1号住掘り下げ。東壁に周溝あり。西壁は横堀によりやや切られる。竪穴遺構1号ベルト断面実測。横堀Ⅱ～Ⅴ区ベルト清掃。Ⅱ～Ⅳ区ベルト断面実測。写真撮影。

9月12日　第2号住柱穴掘り下げ、平板測量。2号住床面より土壙8・10号検出。横堀Ⅱ～Ⅴ区ベルトはずし。清掃。竪穴遺構1号ベルトはずし。柱穴址群掘り下げ。写真撮影。

9月13日　第1号住柱穴掘り下げ。土壙1～6号断面実測。土壙8～10号$\frac{1}{2}$カット。第2号住焼土・木炭除去。鉄釉茶入$\frac{1}{2}$個体、天目茶碗$\frac{1}{3}$個体出土。

9月14日　第1号住プラン実測。土壙7～10号断面実測、掘り下げ。竪穴遺構1・2号プラン実測。柱穴址群プラン実測。写真撮影。地面の揺れがわかる程、大きな地震あり。

9月15日　第1号住ベルトはずし、清掃。第2号住平板測量。横堀Ⅰ区清掃。器材整理。

9月16日　第1号住プラン実測。発掘調査区域全体写真撮影。器材撤収。本日にて調査終了。

第II章　遺跡の環境

第１節　地理的及び歴史的環境

当遺跡は、駒ヶ根市東伊那火山3499－１・２・４、3500－１、3501番地に所在する。国鉄飯田線太田切駅より北東へ約４kmに位置し、標高は690m前後である。

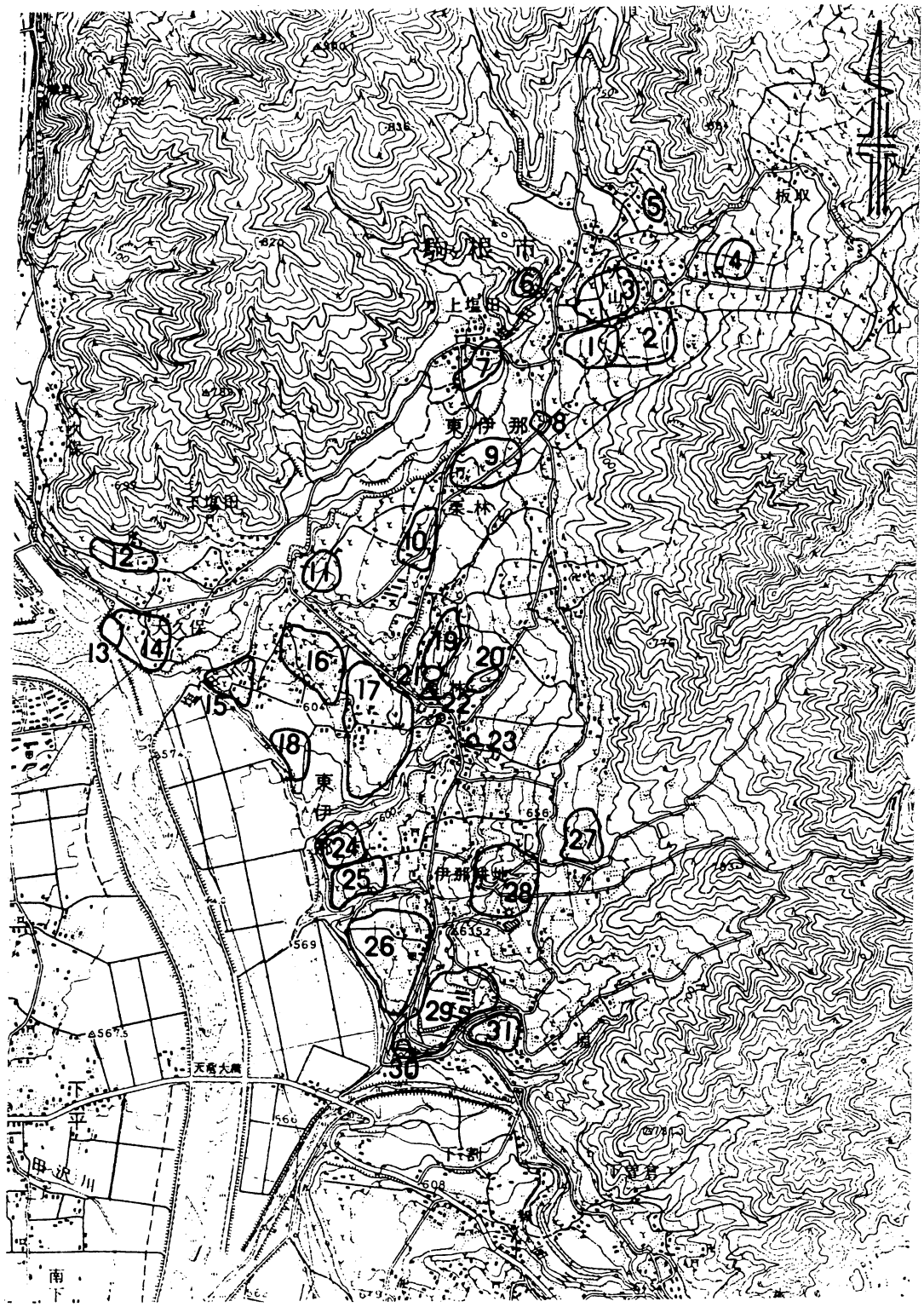
遺跡地は。諏訪湖より、流れ出て南下する天竜川の左岸で、その支流となる塩田川が造り出した扇状地の南側の小高い舌状台地上に立地し、塩田川との比高差は約30mを測る。この舌状台地は、東方の山麓より西に向って形成されており、東西約450m、南北約100mを測り、標高730mから690mへかけて傾斜している。台地は大観して中央部（標高700～705m）より東が傾斜が強く（約10°）、西へかけて徐々に弱くなる。この傾斜が弱くなる先端部は、東西80cm、南北50cmの規模で迫り出している。周囲より５m程高い。この先端部の西側約40m離れて高遠往還（現在の主要地方道伊那・生田・飯田線）が北の火山峠へ向って南北へ走っている。

天竜川の左岸段丘の東伊那地区から中沢地区にかけては、中世の城跡が数多く存在している。第１図中、北より13は大久保城、15は高田城、24は稲村城、25は稲村古城が段丘上に位置し、扇中央部には、19城村城、20小城（「城村古城」）が位置している。いずれも、高鳥谷山、戸倉山を初めとする伊那山地から天竜川へと西流する河川が造り出した扇状地上に位置し、周辺には何川による自然断涯をもつことが特徴である。地形的に見ると青木城は、他の城とは様相が異なり、山麓寄りに位置することになる。

城跡以外に当遺跡に関連する史跡としては、天正棟札が保存されている４の高山神社がある。

この外、東伊那地区には、２青木（平安、中世～近世）、３青木北（縄文・平安）、５火山（縄文）、７上塩田（縄文・平安・中世）、８は石経塚（中世～）、９栗林神社東（弥生後期）、10善込（弥生後期）、11垣外上（弥生）、12箱畳（平安、中世～近世）、16反目（縄文）、17遊光（縄文）、18反目南（縄文）、21桃山（弥生）、22桃山古墳（消滅）、23柏原古墳（消滅）、26殿村（平安）、27山田（縄文）、28丸山（縄文、弥生）、29狐久保（縄文・弥生）、30稲荷古墳がある。

特に、６塩田城は近接する中世城跡として関連が注目される。また、７上塩田遺跡からは、昭和57年度の発掘調査により15～16Ｃの天目茶碗、古瀬戸灰釉、青磁等が出土しており、当遺跡の出土遺物と似る点、距離的に近いことなどから、同一の生活・生産基盤をもつ領域内の遺跡としても考えられる。



第Ⅰ図　青木城遺跡及び周辺遺跡分布図(Ｓ＝1/25,000)

第Ⅲ章　発掘調査

第１節　調査概要

調査に先立ち、調査Ｄ地区及び周辺の桑畑、野菜畑の表面採集を行い、縄文中期後半土器片、石鏃、古瀬戸灰釉、近世陶器等を採集する。

調査方法は、発掘調査に先立ち、重機による桑の抜根、表土排土を行った。排土後、調査区の南西隅を基点として、台地の南北軸にほぼ沿って、５ｍ×５ｍの主杭を打ち、グリット単位とし南側より北へ向いＡ′・Ａ～Ｆ、Ｇ′・Ｇ～Ｌ、Ｍ′・Ｍ－Ｒ、Ｓ″・Ｓ～Ｘ、Ｓ‴・Ｓ′～Ｘ′と東へ平行して設定した。西側と北側については、内側のグリットにダッシュを付した。

層位の確認については、表土が15～30cmと浅く、重機により遺物包含層上層及び部分的にはローム面まで排土したので、遺構内のみ調査することとなった。遺構は、住居跡、竪穴遺構、土壙、堀について断面実測を行った。

出土遺物は、排土後のものについて全点ドットし、平板測量を行い、レベルを実測し、主たるものについて写真撮影を行い取り上げた。総数で約900余点を数える。

発掘調査面積は、約1,000㎡である。

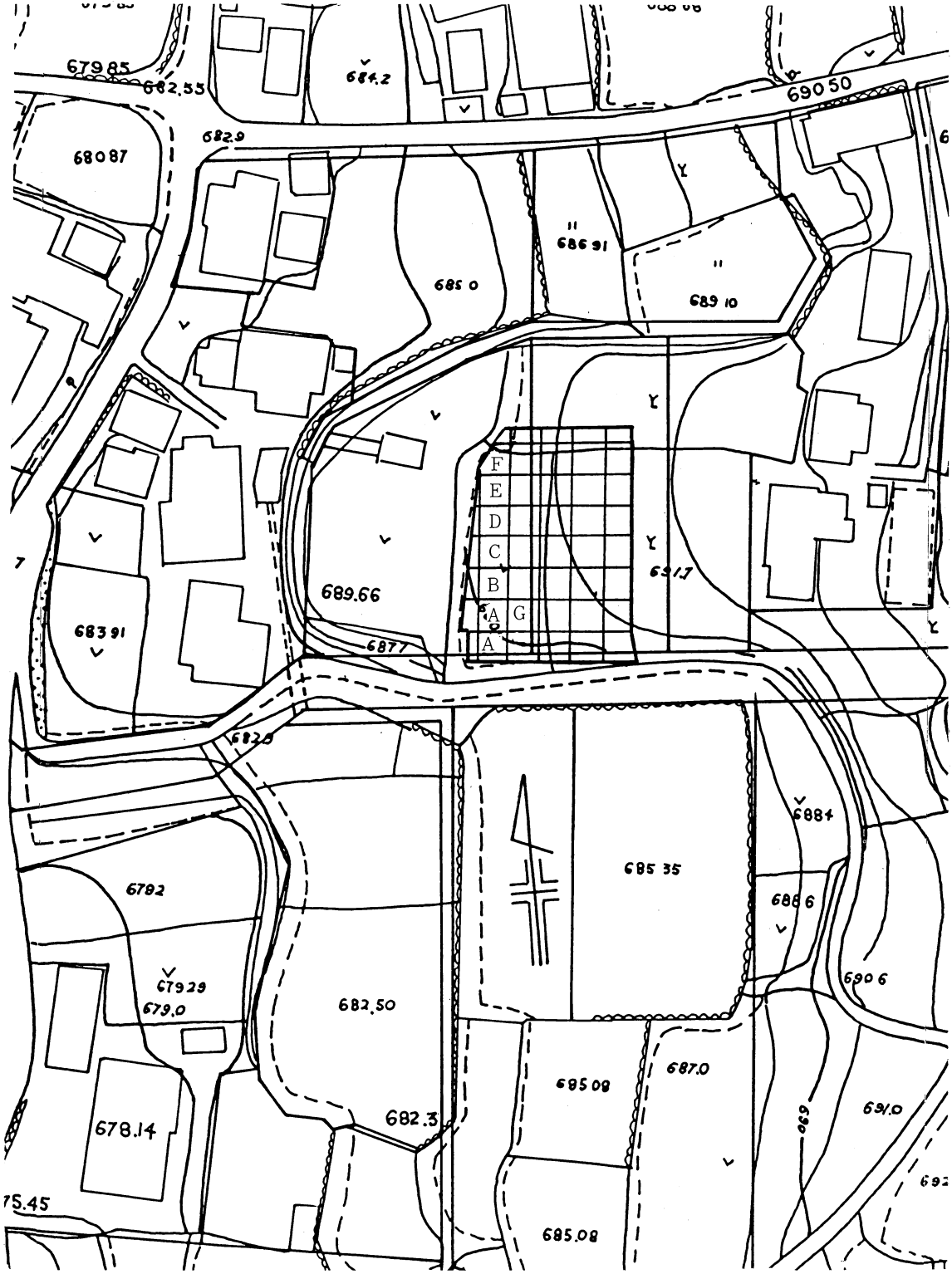
検出された遺構は、縄文時代中期後半の住居跡１軒、同時期土壙４基、中世期の住居跡１軒・竪穴遺構２基・土壙１基・柱穴址群・柱列址群・横堀・縦堀（以上城館址の施設として考えられる遺構）、時代不明土壙５基である。

第２節　遺構と遺物

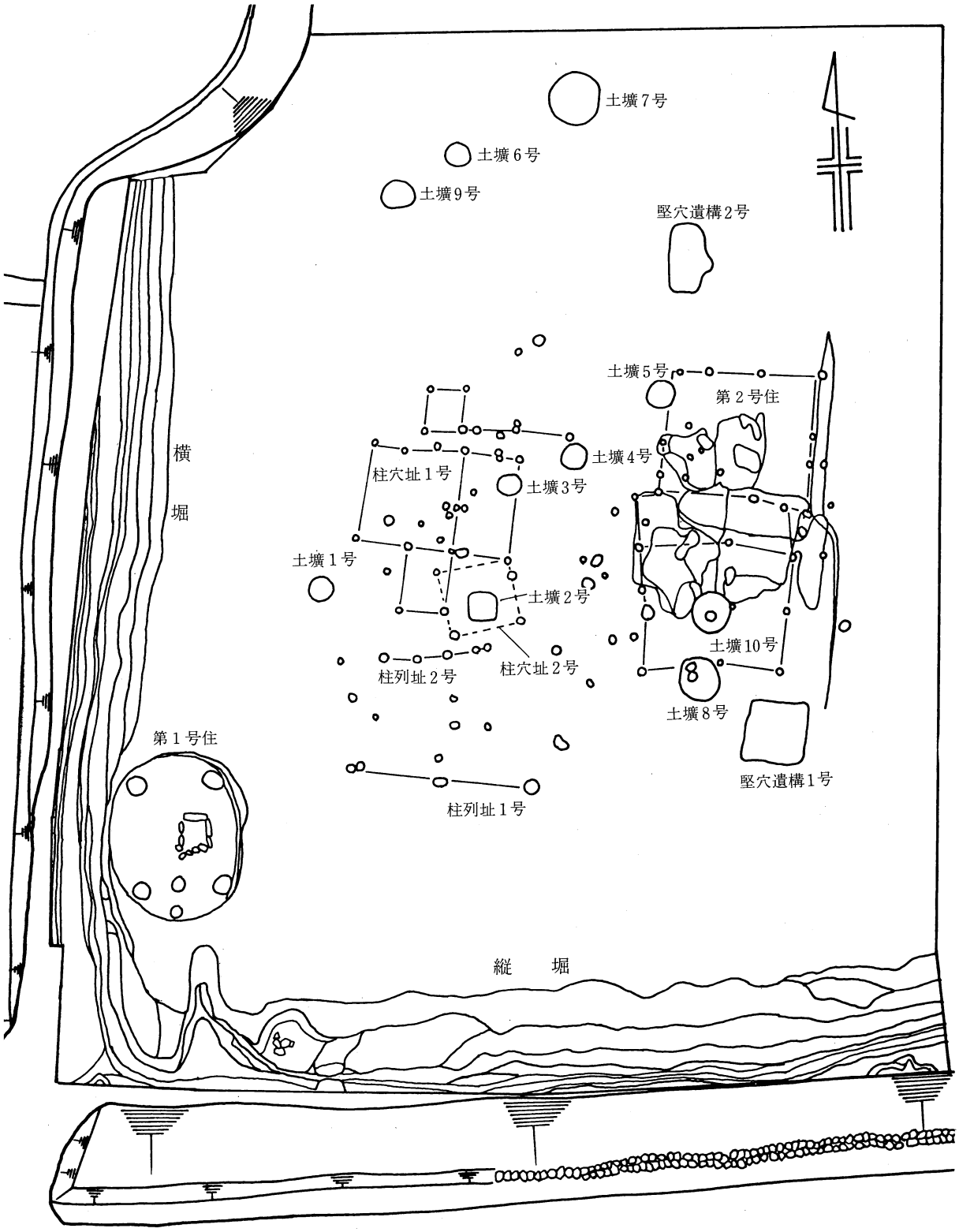
遺構と遺物は大別して縄文時代中期後半と中世期のものであるので、縄文時代から順を追って記述して行く。

〈縄文時代〉

第１号住居跡　本跡は、調査区の南西隅より検出された。規模は、南北５m25cm、東西４m15cmを測り、ほぼ楕円形をしている。壁は現状では東壁で10cm、北壁で15cm、南壁から西壁にかけては、壁は現存しない。本来は壁高が最低50cm前後はあったものと推定できうるが、耕作・開墾時による削土か、又は室町期の居住地の整地時等で削土されたものと考えられる。主柱穴は、P_1・P_3・P_4・P_6の４本が考えられ、P_1・P_6はほぼ円形で、P_3・P_4は楕円形に近い。深さは44cmから54cmを測る。P_4には底に深さ38cmの柱穴と、北西壁にP_5深さ65cmの柱穴があり、このP_5が柱穴の中で最も深いことが注目される。また、南壁寄りにあるP_2は入口部をなす柱穴と考えら



第２図　青木城遺跡調査Ｄ地区位置図及びグリット図（Ｓ＝1/1,000）



第3図　青木城遺跡調査D地区遺構全体図(S＝1/200)

れる。P_7～P_9は、当地域の気象上、西風が強いことから、防風の為の柱穴とも考えられる。西壁は、横堀により若干切られている。

周溝は現状では、東壁に見られ、幅10cm深さ5cmを測る。基盤が東から西へ傾斜していることから構築時そのままであろう。

炉は床面中央東壁寄りに設けられており、南北（長軸）1m30cm、東西（短軸）1mを測り、ほぼ長方形をなす。炉石には、長さ80cm幅30cm厚さ12cmの花崗岩をはじめ、東側・南側にもやや小形であるが長さ55～60cmの花崗岩を用い、形状はやや大きな炉に属す。北側を除き、炉石は複数で一辺を構成する。炉内は、底に焼上層10cm前後、焼土＋暗茶褐色土混上層5～15cm、暗褐色土＋焼土層10～15cmが堆積していた。炉底は堅い。炉石にほぼ接する状態で、長さ約20cmの石棒が炉内に頭部を向けて遺存していた。

床面は割合堅いが、柱穴と炉の間には床面全体にわたって、直径10～15cm、深さ15cm前後の小穴がある。これらの中で、炉の西側約80cmの床面には南北に7本の小穴が並び、又、南西に20cmと34cmの小穴が見られ、棚等の内部構造を示すものであろう。なお、床面北壁際には、長さ35cm、幅30cm、厚さ5cmの風化した粘板岩が遺存していた。床面を含め覆土には、木炭・焼土がほぼ一面に遺存しており、火災があって上屋が消失したとも考えられる。

遺物　本跡から出土した遺物は、壁自体が削土された可能性が強く、その為、西側の横堀に流れ込んでおり、住居跡に伴って出土したものは少ない。以下は床面より出土している。

第5図1は、大型の無頸甕である。破片が全体の$\frac{1}{8}$個体のみで、器形復原は控えた。口唇部は肥厚させ凹みをもち、内彎している。口唇部直下は無文帯をもち張り出している。刺突文を間にもつ2条の横走隆帯と連結する隆帯唐草文を貼り付け、地文にはヘラ状施文具で斜条線を施す。底部は網代底である。外面には炭化物が付着している。4は半截竹管による連続刺突文を伴う横走隆帯と半截竹管の背による沈線重孤文で文様構成される。5は懸垂隆帯文と結節縄文を施す。結節縄文は隆帯との間が磨り消されている。6は底部片で、器面には縦の沈線文が施され、網代底である。第6図1は深鉢形土器胴下半部で、2条ないし3条の懸垂隆帯と蛇行隆帯を貼り付け、地文には棒状施文具で綾杉文を交互に施す。第5図1、4、6、第6図1は唐草文系III（曽利III・IV式）に位置付けられ、第5図5は同時期である。

第5図2は地文は無文で、幅広の隆帯を貼り付けその上にヘラ状文具で斜めの刻み目を付ける。器壁厚は5mmで、色調は灰褐色、胎土に長石・石英粒を多く含む。内面はナデ整形。器壁は厚いが、文様・色調・胎土からみて縄文前期前半に位置付けられる。3は撚りのしっかりしたLRの斜縄文を施し、施文間には移行時の乱れた縄文の痕跡が残る。縄文中期前半に位置付けられる。

7は1号住の炉南西わきから出土した石棒で、長さ19.2cmで茎部直径11cm～12cmを測り徐々に太くなる。頭部は直径12.4cmを測る。砂岩製でやや風化が進んでいる。調整は全体を敲いて成形し、頭部上面と側面は磨っている。頸部の凹みは弱いが、意識的に削り込んでいる。

土壙3号　本跡は調査区のほぼ中央から検出された。長軸72cm、短軸62cmの不整円形で、深さ